
その道、遙か遠からんや

うしおなとら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その道、遙か遠からんや

【Zコード】

Z5228Z

【作者名】

うしおなどり

【あらすじ】

「闘神大会」それは宙に浮かぶ豊かな闘神都市、その恩恵に育つことある者が作り上げた街で年に一度行われるトーナメント制の闘技会。そこに現れたのはJapanより攫われて来た一人の少女、そして彼女の記憶に引っかかる面影を持った一人の剣士。ゲーム進行と同時に書いて行きますので深い設定とかは知らずに書きます。ツッコミ、酷評はドシドシお願いいたします。

一 戰田（讀書セイ）

「…かなりのチャレンジな氣が…」

『…』の方もよろしくお願ひいたします

私の中の最初の記憶。

それはおつちよこちよいでダメダメな、けど優しくてあつたかい姉さんと一緒にいたこと。

でもどうしてかはわからない。

だって私には姉さんなんていないんだから。

私の家族、私を娘として、妹として扱ってくれる人たち。

Ｊａｐａｎにあるとある村の小さな農家、そこに私の家族はいる。そこに居るのはお人よしのお父さんと逞しいお母さん。

それと『侍』になろうと頑張っている私の兄さん。

農民は侍になんてなれないってみんなが兄さんに言つ。

でも兄さんは侍になろうと頑張っている。

山の中を走り回って、川の中を泳ぎまわって。太い棒を持つて振り回して、ホントは地面を耕すための鍬を刀に見立ててみたり。

みんなは農民は侍になれないって兄さんに言つ。

でも兄さんは侍になろうと頑張っている。

そんな兄さんを、私はこつそり応援している。

兄さんに『なんで侍になりたいの』って聞いてみたことがある。

そうしたら兄さんは一人の侍のお話を拳児のお爺ちゃんから聞いたからって言つた。

拳児のお爺ちゃんは村の長者様。

昔沢近様の所に婿養子に入つたつて聞いたことがある。

拳児のお爺ちゃんは昔は侍の一人だつた。

この近くを治めている小早川様、そこに仕える侍の一人だつた。ある時愛理様に見染められて本当の侍の一人になつた。

兄さんは拳児お爺ちゃんのお話を聞いて、『伝説の侍』のお話を聞いて、侍になりたいって思う様になつた。

お父さんは反対していた。
お母さんも反対していた。

二人とも兄さんに危ない所に行つてもらいたくなかったんだろうと思う。
何時死んでしまうかもわからないうなとこに行つてもらいたくなかったんだろうと思つ。

私自身も、兄さんに死んでなんか欲しくない。

幸い私たちのいる村の土地は肥沃だ。

少し、おなががすいて可愛い音を立てる」ともあるけれど。

でも年貢も激しすぎる」とも無く、私たちはしっかり食べる」とだつて出来る。

飢え死にしてしまつ人なんていない。
とつても平和な村。

でも兄さんは……行つてしまつた。

兄さんが12歳にならうかつて頃、私が8歳にならうかつて頃。
兄さんは行つてしまつた。

それから結局7年間、兄さんは帰つて来ていない。

お父さんは泣いていた。
お母さんも泣いていた。

私も一緒になつて泣いていた。

私の中でこんなにも兄さんが大きな存在だつて、そう私は思い知ら
された。

水を汲むのも、ご飯を作るのも、畑を耕すのも。

山に行くのも、川に行くのも、こつそり長者様のお屋敷に行くのも。

私と兄さんはいつも一緒だつた。

……違う、かな。

私はいつも兄さんの背中を追いかけていた。
兄さんに置いてかれないようにするため。

でも兄さんはいなくなつた。

朝起きても、昼水を汲む時も、夜寝る時も。

何度も何度も何度も繰り返しても、いつものように繰り返しても。

……いつものように兄さんはそこにいなかつた。

そして昨日……そう昨日。

何か……あつて……。

赤……朱……紅……。

そうだ、どこかが赤に染まって、丁髷姿の、真っ黒の刀を持つた人がいて。

ツ！？

チュンチュンと小鳥の鳴く声がする。

頭が痛い……。

スツと手を頭に寄せてみると田に入るいつものボロイ服。お母さんが織つてくれたんだっけ、ツギハギだらけだ。

頭の痛みはまだそこそこ。

でも…… じー、 びー?

私こんなとこ知らない。

薄つぺらい意味をなさない布団なんかじゃない。
長者様の所だけで見たことある、 いっぱいの羽毛の詰まつたふわふ
わの掛け布団。

床は硬い板張りじゃなくって、 やわらかい畳の感覚。
近くで炭を燃やした囲炉裏が見える。

ぐるりと見渡せばわかる。

こんなとこに私はいなかつた。

絶対に、 絶対に、 絶対に。

でもそれより…… どうして私、 前が肌蹠てるの?
なんで下に何も履いてないの?

えう。

ちつ、 ちがつ…… 一人でそんなことしてない。

でも…… 違うこと無い、 事も無い。

私も…… その…… 一人でやつたことも…… つう……。

でも今日は…… 違つ…… から。

「……くあ……ああ、起きたのか?」

…………え…………?

なんで隣に、その……裸の男の人。

「初物、中々に良かつたわ」

バツ 布団をめくつて立ち去つて行く男の人。

しつ、下も……着てない……。

顔が熱い…………。

逸らさないと…………。

そうして私が写した視線の先。
真っ白な布団の上に存在を示す朱。

…………ホント?

II 戰田（温韾也）

いたな時間まで向やかにゐるんだ

おかしい、そう彼女は思つ。

何がおかしいって全部おかしいのだ。
朝起きたら見たことも無い所に居て、そこは今まで住んでいたところ
なんかよりずっと綺麗で。
きっと一生まともに味わうことなんて出来ない畳張りの部屋に居る
のだから。

「……嘘……、でも、だって……違うくて……」

でもそんな事よりももっとおかしいことが彼女に身には起きている。

『朝起きたら服が肌蹴でいて、裸の男の人人が隣に居ました』。
『真っ白な布団、その上には真っ赤な染みがありました』。

彼女とはいえそのような性の知識はある。

Japanは幼い人間でも契りを結び、夫婦になることなんてしょ
つちゅうだ。

実際彼女自身もう十五。

見合いを持ちかけられたことも、告白を受けたこともある。

たまたまそれが自分と大して変わらぬ身分の男だった。
だから彼女は生娘のまま、今の今まで生きていたはずだった。

「……知らない人に……私……ツ」

ボロボロと涙が彼女の頬を伝づ。

「お父さん……お母さん……」

今の状況、それは彼女にとつてとても恐ろしいことだつた。

知つてゐる人間も、知つてゐる風景も、どこも彼女には存在しなかつた。

そんな状況で、彼女に付しつけられた事実。

『犯された』といつて、変えようもない事実。

「ヒツ……あああツ……ああ……ああ……ツ

嗚咽を漏らし、咽び、彼女は泣く。

女として守らねばならないものの一つ。

本当に捧げよつと、そつ思える人にこそ捧げるべきもの。

それが自分の意志とは全く無関係に、散らされていたのだから。

Ja panの女性は貞操觀念が基本的に高い。
生娘といつことは、それだけで非常に価値のあるものだと考えられてゐるのだ。

一人の男にすべてを捧げる。

そんな思想が美しいと、Ja panが誇る美女の一つの条件だと思われているのだ。

「……ツ……ニ……さん……兄さん、兄さん兄さん兄さん……」

彼女は兄を呼ぶ。

自分で中で父よりも、母よりも大きかつた存在を。

いつも自分を助けてくれて、でもどこかに行ってしまった彼を。

「兄さん……兄さん……」

呼べば少しだけ、氣も晴れる氣がしたから。

彼女の兄がいなくなつて、辛いことがあるたびに彼女は彼を呼んでいた。

『自分が危ない目に会つていたら助けてくれる』、どこかにそんな感情があつたのかもしれない。

勿論、彼女の声に兄が答えた事などただ一度も無かつた。でも彼女は安心できた。

兄に依存している。

彼女自身そう思う事は幾度もあつた。

けれどそれでも、彼女は兄が大切だつた。

何度も何度も、求婚をしてくれた男もいる。

でも何度も何度も、断り続けたのは兄がいたため。

せめて彼の姿を見ないと彼女は他の男の事など考へる事も出来なかつたのだ。

「……逃げ……なきや」

「ゴンゴンと叩きつけていた胸が少しだけ収まつて行く。

まだ気を緩ませれば零れる涙。

けれど今ここで気を緩めて、またあの男に会つてはいかない。

出来るものなら布団に包まり泣き明かしてみたい。
でもそれじゃあダメだつてわかっているから。

そして何よりも……。

「私は……私は侍の妹だから」

きっと居なくなつた兄はどこかで立派な侍になつていて。
そうなれば自分は侍の妹。

そんな自分が蹲つている訳にはいかない。

いつか兄が沢山の武功を立てて帰つて来たときに、胸を張つて迎え
られる妹でありたいから。

「……大丈夫、行こう」

「じじじ」と乱暴に畠をこする。

帯を巻きなおし軽く身なりを整えて、さて立ち上がり出でこいつ。

そう思つていた時ふと、先ほどまで寝ていた布団が畠に入る。

そして彼女はいそと布団をたたみ部屋の片隅に運んで行く。

「……洗濯は出来ないけど、イイよね？」

今から逃げ出そうと思つてゐる彼女のやるよつた行動ではない。でも彼女の引っ込み思案なくせにおせつかいで几帳面な性格。それが災いして攫われてるはずなのに間の抜けた発言をしてしまつ。

「イイわけねHだろ？それぐらこやるのは当然じゃねえのか」

それが災いして逃げる」と叶わず男に彼女は見つかってしまったのだ。

「 ッ

「なにや、怯えた眼しちゃつてよ。

俺が悪いみてHじやねえか」

どこからどう見ても男が悪い訳である。

が、悪びれた様子も無い男はジロリとつま先から頭まで見上げるよう視線を這わす。

目付き鋭い三白眼。

真つ黒な瞳、その瞳孔はあるで獸のよつに縦に裂けてゐる。

大柄でガツチリとした体格。

かといつて太すぎる事も無い腕。

だがその腕はまるで鋼のような印象を彼女にもたらした。

腕だけではない。

彼の纏つた白い着流し、その隙間から除くありとあらゆる部分が鋼

のよ。

彼女の目にした事のある大人の男なんかよりも遙かに強大な力の印象。

唐草模様の帯に差し込んだ「*apana*」刀。

恐らく武士なのであると彼女は思つ。

けれど今まで目にした事のあるどんな武士よりも強く見えた。

そつ思わせる何かが男にはあつたのだ。

「く……ボロ衣でも元が良けりやあ映えるもんだ」

「見ないで……くだれ……」

「裸まで見せあつた仲のくせになあに言つてんだか」

「ツー」

ニヤついた表情の男に彼女の顔は恥辱に染まる。

抱きしめるように腕を回す姿に、さらに男に顔は愉悦に染まっていく。

確かに男の言う様に彼女は美しかつた。

肩にかかる程度の流れるような艶々しい黒髪。
整つた鼻筋に小さな口。

そしてどこか儂げな印象を「*え*る緋色の瞳。

体型も均衡がとれており大きすぎず、かと言つて小さすぎない胸。

一日中、日光にさらされる農民で在りながら真つ白く毛細血管すら

透けそうであるなめらかな肌。

かつて彼女に求婚し続けた男はその美しさをいつ表現した。

『立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花』。

もし彼女が権力者に目を付けられていたら即座に興入りに成りそう。そう言つても構わぬほどの美貌が彼女には備わっていた。

「ま、お前の事はまた夜にでも体験すりゃあイイわけだし」

「離して！」

「逃げるだらうが、そしただらう」

「イヤッ！」

歩み寄り、肩を掴み取らうとする男。

彼女は粗暴な手を振り払おうと身体を振るひ。

「……ウザい」

ガシガシと丁髷を結つた黒髪をかきむしる男。

そして苦々しく舌打ちをし、躊躇うことなく白刃は彼女の目の前に突き出した。

「……あ……ッ」

長い彼女の睫毛。

切つ先がそれを揺らすほどに、白刃は彼女を圧迫していた。

「だーつてゐ、動くな、テメエの生殺与奪はすべて俺の手の中にあ
るわけ……おわかり?」

始めて見る本物の刃。

自分の命を軽々しく捨て去る凶器。

彼女はただ呆然と、男の言葉に従うことしかできなかつた。

キヨロキヨロと物珍しそうに彼女は辺りを見渡す。
自分の居たＪａｐａｎでは絶対に見受けられないような石畳の敷き
詰められた歩道。

木造ではなく石造の家屋や商店らしきもの。
長者様から聞いた『市』などといふものとは似ても似つかないその
光景。

そして言つていたより遙かに多そうな人、人、人。
年に一度だけある村でのお祭り。
そんなもの比べ物にならないような人が彼女の視界を埋め尽くして
いた。

「どーでもイイけど、意外に度胸あんのな

「すつ、すいません……」

「ま、俺は付いて来てくれて逃げたりなんかしなけりやどつちでもいいんですけどね~」

先ほど刀を彼女に付けた男とは思えぬほどに寛大な心を見せる。

「……けども、走った瞬間切るから」

前言撤回。

無情で冷酷な言葉に彼女は息をつまらせる。

発した本人は何が楽しいのか大口を開けてケラケラと笑っているが。

「逃げなけりや あ俺は優しいよ?」

ともかく『闘神大会』でお祭り騒ぎなわけだし、楽しまなけりやあ損つてヤツだぜイ』

そう言うと男はイイ香りのする屋台の方に歩みを進める。
突拍子もない彼の行動にポツンと取り残された彼女。

続けざまに背筋に感じる冷たい感覚。

それも氷のように鋭く、痛く、冷たいものだ。

「で、だ……何で付いて来ねエんだ……テメエは」

ポンと肩を叩く男。

「……え……?」

今先ほど、確かに前の方に言つてゐるのを彼女は見ていた。
だが確かに今男は彼女の後ろに居る。

体験した事の無い、どこかひずり寒い状況に彼女はただ肝を冷やす。

「今度はちゃんと付いてこいよ~

「あ……」

「返事は?」

「……はい」

小さな声で肯定を示す彼女。

その言葉に満足したのか、男はまた歩みを進める。

先へ、先へと行つてしまつ男。

そんな彼にどこか自然に彼女は手を伸ばして、そしてギリと開いた手を握り締める。

(……情けない)

まったく知らないもので溢れたこの場所。

そこで彼女は自分が唯一知つてゐる男に括りつとしたのだ。
自分を躊躇したはずの男に、だ。

(切腹とか、したほうがいいんだろうな)

侍となつてゐるであらう兄の名誉を護るなら自分は死ぬべきなので
はないか、そう思つてしまつ。

けれど彼女にはそれは怖かった。

言つまでの事は無く兄の事は大好きだ。

それでも彼女は死ぬのは怖かった。
だから彼女は情けなかつた。

自分がどうしようもなくちつぽけな存在に思えて仕方なかつたのだ。

「……逃げよ」

「うん、それ無理」

不穏な言葉を発した彼女の隣。

そもそも当然のように腕を組みこちらを見下ろしてくる男。

「とつとと行くぞ」

「……はい」

今度は歩く男に彼女は付いて行つた。

遅れることなく、一定の距離を保つて。

そんな自分がやっぱり彼女は情けなかつた。

てかでか歩いてさりに少し。

ローマのローラセオのような場所に男と彼女は居た。

「失礼しちゃうわ、ホント」

「つあ、ブサイク」

「誰がブサイクよ！」

「ほれほれあの子」

「ふふ～ん、確かにね」

鼻息荒くじりにに向かって来た桃色髪の女。

巨鉄ちゃんのような顔をしたその娘？と一言一言葉を交わし、さらには男は進んでゆく。

その後ろをいそいそと、彼女は付いてゆく。

とりあえず逃げるという選択肢は放棄したのであるつか。
今は従つた方がイイと判断したのだろうか。

ともかく一人は進み、石の階段を上り、入口のような場所に出た。

「こちらが出場申請の書類、こちらが大会規約の書類です」

「ちよつと受け付係と思われる翡翠髪の女性。

その女性は緑髪の少年と茶髪の少女に何かを話しかけている。

「おおーちよつとこいや、俺らもやつてくれつか

「あらま、大会出場の方ですか？」

一緒に連れてる女性も……身なりはアレですが十分合格点ですね」

「だろだろ」

どこか誇らしげに受付の女性に合図の手を添える男。

そして彼女を少し見定めるように視線をくれる少年と少女。

居心地の悪さを感じ、ぴょいっと男の影に隠れる。

街を歩く時もそうであったがそれ違う男たちからの視線はきついものがあった。

見目麗しい彼女がボロ衣を着て歩く。

それは注目を浴びるには十分な理由だった。

そしてそれ以外にも、彼女には人の視線に触れたくない理由があった。

そして結局男の傍らに立つてしまつ、そんな理由があったのだ。

「パートナーの方はなんていう名前ですか？」

「ちなみに私はシユリ・セイハジュウ・ナガサキっていいますよ」

「よひしう、ナガサキ」

「なんでそこなんですかお兄さん！？」

「ふつうはシユリさん、とかシユリちゃんとかそんなんじゃないん

ですかッ！」

「ケケケ、気にすんな氣にすんな」

楽しそうに話す一人にビンにかいたたまれない気持ちを感じる彼女。

「で、名前はなんでんだ」

始めてまで捧げたであろう男には名前すら知られていなことこの上ない。

情けなれども寂しい、そんなものを彼女のビンにかは訴えていた。

「……ハ雲……です」

絞り出しきつに発せられた蚊の鳴くよくな声。

「はいはい、登録完了ですよ。

で、お兄さんの名前は？」

振り切るような勢いで発したものだったが奈何せん、ハ雲の心情はシユリにはわからなかつたようだ。

まあ初対面の相手にわかれという方がどだい無理な話かもしれないが。

ともかく彼女は男のパートナーとして登録されたよしだ。

「……」

「お兄さんお兄さん」

「何よナガサキ」

「名前です名前！あとナガサキはやめてください……」

……変な名前だつたら私が呼んあげますからね

ムムムと唸のシユリにカラカラと笑う男。

「俺はリコーカだ。

将来『闘神』と呼ばれる男だからしつかり頭ん中にも登録しつけ
よ

ビーンと胸を張り凄まじい事をあつけらかんと言つココーカ。

「俺が優勝するんだからな！」

「無理無理、無い無い、帰れ帰れ」

突つかかってきた少年を軽く受け流しシユリの出した細かい文字が
びつしりの書類をふと見つめる。

そんな視線に気づいてたのか説明を始める。

「……」

参加証の魔法印と規約受理の捺印も兼ねてますので。

つまり……

「八雲、手H貸せ

「あ……」

グイと手首に手を添え、リューマはハ雲とともに手を付く。それに感化されたのか、隣の少年も急ぐようになに彼に続く。

ぴかーー。

眩い光が辺りを照らす。

収束したその後、隣で何か言い争う声が聞こえる。だがハ雲の耳には入っていない。

彼女の純潔を奪い、生れた村より遙か遠くであらうこの場所に攫つて来た男。

奇しくもその名はハ雲の兄『龍麻』とよく似ていた。

— 戦田 (後書き) —

変だわ

三歳目（前書き）

キャラがわからんねえ

闘神大会規約

* 出場資格について

どのような者でも参加可能。但し、闘神の称号を得た者はこれに準じない。

参加に際しては、男子は必ず見目麗しい女子をパートナーとする事。女子は条件を満たす容姿の場合、自身をパートナーとしてもよい。

* 試合について

試合は原則として1対1で戦うものとする。

点で決定する。

武器類又は装備可能なもののみ使用可とする。

その他のアイテムの使用は可とする。

＊ 勝者の権利について

試合に勝利する毎に相応の賞品を授与する。

る。

対戦相手が女性であり、自分自身をパートナーとしていた場合もこ
但し、性交以外の傷害、及び殺害は認めない。

れに準ずる。

* 敗戦時の罰則

試合で敗れた者には以下の罰則を課す。

パートナーを試合後24時間の間、対戦者に預ける事。

その間にパートナーがどの様な目に遭つても、大会運営委員会及び対戦者に責任を問う事はできない。

その後、パートナーは、闘神都市内で3年間の無償労働に従事する事。

無償労働は免除金300000GOLDを支払う事で免除可能。

出場者が死亡したい場合、不戦敗の場合もこれに準ずる。なお、出場者本人に課せられる罰則は無い。

* 予選落選時の罰則

参加者多数の場合、予選が行われる事がある。予選で落選した者は以下の罰則を課す。

落選者のパートナーは、闘神都市内で1年間の無償労働に従事する事。

無償労働は免除金300000GOLDを支払う事で免除可能。

なお、落選者本人に課せられる罰則は無い。

* 優勝者の権利

都市長より、闘神の称号と相応の賞品、及び一流の武具を授与する。

パートナーと共に、闘神区画での贅沢な生活を保障する。各国にお

いて英雄待遇を得られる。

敗戦暦があり、以前のパートナーが無償労働に従事している場合は、以降の無償労働を免除する。

* その他の規約について

大会期間中の出場者同士の私闘は厳禁とする。

出場者のパートナーもこれに準ずる。試合の放棄は、どんな場合であろうとこれを認めない。

試合を放棄した場合、不戦敗となり、敗北のペナルティを課せられる。

試合に遅刻した場合、及び試合当日ロロシアムに姿を見せなかつた場合もこれに準ずる。

-以上-

闘神大会出場者規約より抜粋

「……ええつ——! ! ? ?」

隣で茶髪の少女が呻いている。

「だから待つてって言ったのに……」

「パートナーを対戦者に! ?

三年間の無償労働！？

不穏な言葉も聞こえるがハ雲の視線はただリューマに固定された。

彼女の兄、タツマ。

それとよく似た名前を持つ男。

名前を知ったその存在は彼女の胸をひどく揺さぶる。

そう言われてみれば、と兄と似ているとこを探してしまった始末だ。

黒髪と黒田はよく似ている。

目付きも鷹のように鋭かつたし、大口をあけて笑う姿もそつくりだ。意外に粗野で、同じ村の子供や、果ては大人まで鏽付いた鍬を突き付けながら無茶な事を言つていたのも見た事はある。

でも違う。

ハ雲は結局そう決め付けた。

そんな訳が無い。

だつて侍になつてゐるはずの兄が、このような事をするはずが無いのだから。

妹であるはずの自分を、手籠めにするなんてありえないのだから。

彼女は否定したかった。

何よりもハ雲自身がリューマをタツマだと認めたくなかったのだ。

大好きな兄がこんな人間になつてゐるなんて思いたくなかったのだ。

「ハ雲さん！ハ雲さんはそれでいいんですか…？」

「……え、あの……何が、ですか？」

「さつきの見なかつたんですか…？」

「……文字……読めないんです」

ポツリと零すハ雲の言葉に少女は気まずげな表情を作る。

Japanの、村の農民の娘。

その寺小屋のようなモノも彼女の周りには普及しておらず、触れる機会があつたとすれば長者様のお屋敷に忍び込んだ時くらい。

勿論そんなハ雲が文字を読むだの書くだのという教育を受けている訳も無かつた。

幸いが、この世界ではすべての地域に置いて共通の言語が用いられている。

人と対面して意思の疎通は出来るわけではあるが、そこが彼女の限界だったという事だ。

「（）めんなさい…」

「うそ……気にしてないですから」

と言いつつもハ雲はリューマの後ろから顔だけ出して少女に口をきいている。

元々彼女は人前に立つて、なんて事は超が付くほどに苦手である。初対面である少女に対してもハ雲お得意の人見知りが発動してしま

つている奴だ。

「あの……怖がられるような」としきりやつたつけ?」

「……すこません」

「イヤイヤイヤー全然氣にしてないから!—!—」

あわあわと手を振る少女にハ雲は思わず小さくなつていぐ。

自分が悪いといつことはもちろん彼女はわかっている。

ちゃんと向き合つて話さねばならないという事も、ハ雲はわかっているのだ。

でもわかつていても行動に出せない。

そんな自分の内向的なところがハ雲は嫌いだった。そう思つてもう、7年は経つていてるのだが……。

「とにかくパートナー取り消し!—

俺、違う人探してくるから!—!—」

「……ダメです、お一人はすでに参加承諾してしまつてますから。

棄権者にはそれ相応の罰則が下されてしまします。

勿論ナクトさんと羽純さんだけじゃなくつてリューマさんとハ雲さんもですよ」

これから噛み砕いて説明する予定だったのに……。

どこか悲壮感を漂わせるショコリに言葉を詰まらせるナクトといつ少年。

そしてその視線は、ぴぴいーと口笛を吹かせるリューマに移る。

「アンタはイイのかよ！ それで！ ！」

「つたりめH！

てかボクチン大会規約も呼んでなかつたのか？ バカなの？ アホなの？ 死ねばいいのに！」

どこ吹く風でナクトに降りかかる見下すような視線。人を小馬鹿にしたようなリューマの態度に、ついにナクトはキレた。

「ふざけんなッ！

パートナーまで危険な目にあつんだぞ！ ！ それなのに何なんだよアンタの態度は！ ！

「この子がどうなつてもイイってのか！ ？」

「イイから来てんだろ、脳味噌入つてるう？

「こいつは俺が拾つた、衣食住は完璧に揃つたとこにこさせでやるつもりだ。

つまり八雲は俺のモン……おわかり？」

「拾つたって……じゃあ八雲さんは知らない事ばつかなんじやない

んですか！？

そう言って羽純はリューマに詰め寄る。
訳もわからぬハ雲はちょいちょいと手招きするショリに呼ばれ……
その顔を徐々に青くしていった。

「私ッ……聞いてない……！」

「やつややうだ、言つてねえし」

躊躇い無いリューマの言葉はハ雲をひどく傷付ける。

「ともかくこれで逃げれん訳さ。

…………もつとも逃げたとしてどうするかなんて俺にや全くわからんね
えことだつたけどよ」

彼ら彼女らに付加された魔法印は街の警備システムに反応するよう
になつている。

これで「ひそり逃げる事も事実上不可能になつてしまつたわけだ。

まあリューマの言つよつこと、たとえ彼から逃れたとしてもハ雲に「
appaに帰る手立てなどこれっぽっちも存在しなかつた。
お金も無く、知識も無く、モンスター相手に立ちまわれる力も無い。
そもそも彼女のような美少女がたつた一人で歩いてどこかに向かお
うとしているのだ。

そこに誰かが現れたとして、何も無い彼女をappaまで送つて
くれるようなお人よしなどいるだらうか。

良くて誰か一人の、人間の性奴隸。

悪ければ男の子モンスターの腹ませ道具として一生過すことになるだろう。

思考をよぎった光景に身体が震えだす。
情けなさで頭がいっぱいになる。

結局、ハ雲にはリューマのパートナーとして闘神大会に出場すること。

皮肉にもこれが最も安全な状況であったのだ。

「まー安心しどけ、テメエは俺んだかんな。

第一俺が負けるなんて在りえねHし

再びケラケラと笑いだすリューマ。

その自信はどこから來るのか、そこら辺は全く分からぬがともかく彼に負けるという光景は思い浮かばないようだ。

それはただ単純に自分より弱い敵としか戦つた事が無いためなのか。それとも本当に大会出場者の誰よりも強い力を持っているためなのか。

この時点では誰にもそれはわかっていない。

「なんでアンタが付いて来るんだよ」

「なんでって」ひちに宿があるからだろ？」

振つたらカラカラ鳴るんじゃねえの、お前の頭

顔を赤くし、睨み付けるナクト。

その状況を止めようとナクトに話しかける羽純。

鼻で笑う悪い顔のリューマ。

オロオロと双方を見つめるハ雲。

四人の間に流れる空氣はどう見てもイイものではなかつた。

「それよりもナクト……平氣だからんて言えないと……イイって
言つちやつたし、手遅れだし……。

でも……お金とかあんないつぱい持つてないと憑つけど……優勝
……出来そつ？」

「……するつもつではないる」

「うん、それ無理。

なぜなら俺が優勝するからさッ！」

「いちいち入つてこないでくれよ……。」

天下の大通りで一人だけの空間を作り出したナクトと羽純。

お構いなしにその空気を吹き飛ばしたリューマは殴りかかるナクトの拳をヒラリヒラリかわしていく。

「『人の自分の為より大切な人の為の方が何倍も力を出せる』……まあなんてくっさい台詞！」

んな事こんな大会開いてる側が言つなつてもんだよな

「ホント何なんだよアンタは！」

アンタはハ雲さんの為とか思わないのかよ！――

「思わん！」

即座に切り返すリューマの言葉にやはりハ雲は気持ちが暗くなる。わかつっていた台詞ではあるが実際に向けられるのはつらいのだろう。

「所詮人は自分の為にしか闘わねえんだよ。

俺も俺の為に剣を鍛えてここに居る訳だし、第一拾つた人間に情なんて沸くわけねえじゃん

ケタケタと再び笑いながらリューマはハ雲の肩を抱く。ハ雲の顔には嫌悪感が思わず表れてしまう。

「……やめて……くださいッ」

自分の身体を離そうと押し込んでくるハ雲。だが気にした様子も無く彼は鼻をスーサースーハーと鳴らし……眉を顰める。

「てか臭いッ！？風呂^ルぐれえちゃんと入れや」

「　　ッ……ハ……」

貯め込んで、堪えていた涙。

その席は女として馬鹿にされてしまつ」とことも容易く決壊した。

「ヤコまで言わなくともいいじゃないですかーー。」

「俺のモンにビリ^リおつが俺の勝手、そりだろっ。」

崩れ落ちた八雲を抱きしめる羽純の強い視線もリューマはお構いなし。

何が悪いのかわからん、やつ^{ヤツ}いたげな表情で彼は深いため息をつく。

「羽純……俺決めた」

「あアん？」

「絶対にお前をブツ倒して八雲さんを救つてやるーー。」

「いやー、冗談の言えるヤツは嫌いじゃねぇよ」

見上げる間に視線を注ぐナクトを見下すように見つめるリューマ。

今回の大会で台風の日となるかもしれない一人は最悪の形で一方で印象を与えた。

もう一方はまるで歯牙にもかけていないようだが。

「てか同じ宿かよ……ストーカーか、テメエは」

「誰がストーカーだ……」

三戦目（後書き）

ムズイです

ゲームの方も合わせてるので牛歩……まだ迷宮探索すらしてないつてどうなんでしょう

四戦目（前書き）

説明チックになつた

三人称は難しいなあ

一夜が明けて、ナクトと羽純は宿屋を出発した。

彼らとリューマラが今大会中身を寄せるのは『カテナイ亭』という何とも不吉な名前の宿。

マルデ・カテナイという名の獣耳のおかみさんとトコトン・カテナイという名のたぬーの御主人が経営するのだが、奈何せん名前のせいで避けられている風潮にある。

だからこそナクトと羽純でも宿を借りれた訳ではあるが、彼らの故郷では『無病息災』という意味を持つそうだが、やはり引つかかるものというのは残つてしまふのだ。

そんなこんなで朝食を取るべく一人は近くの酒場『ハーフ浪漫』に足を伸ばした。

彼らの生まれ育つた村とは比べ物にならない規模。その大きさに圧倒される羽純にそれをからかうナクト。幼馴染特有のやわらかい雰囲気が一人を包み込んでいる。

「はにゃりーん、いらっしゃいませ……お、そっちがナクトくんのパートナー？」

「私アリサ・エアリス、よろしく」

「えと……よろしくです」

ウェイトレスのアリサの友達感覚の触れあい方。

それも一人にとつてはありがたく、始終笑顔を絶やすことが無かつた。

「さて、じゃあ『ロシアン』行ってショーリさんから話を聞くか

ナクトは爆弾おこぎりを、羽純はぽわわサンドを平らげ酒場を抜け
る。

今日は澄み渡るような快晴で、一人の足取りも軽い。
途中、昨日ナクトが『闘神』の一人を見かけた広場へと差し掛かつた。

「うわ～、人もお店もいっぱいだね。

村のお祭りが三つくらい入りそつ

「闘神大会の開催中は街全体がお祭りみたいなもんだからなー」

彼らの言つ様に確かにそこは人であふれかえつっていた。

そこいらかしこの店から漂つつい匂い。

朝食を取つたばかりではあるがそれはナクトの腹の虫を刺激する。
食いしん坊つぶりに呆れてはいるが、羽純もそこやかしこに視線を
巡らせる。

やはり興味を引くのは間違いないのだろう。

「こやはせせ中々に美味しい……が、『へんてう』はいまいちだわな。

お前、料理くらこは出来るよな

「……少しでしたら

「そか、じゃあ帰つたら作つてくれ。

返事はハイかイエスだ

「イエス?」

「肯定つてことだな、拒否権は無いつてこつた」

「……はい」

串に刺さつた何かの肉を豪快に口にくわえつつ一人の方にやつて来ているのはリューマ。

八雲は八雲で焼きの入つた麺類のようなものを手に持ち俯き加減。合変わらず八雲の事を人として見ていなにようなリューマの発言にナクトは声を荒げた。

「八雲さんに何やつてんだよアンタ……」

「何やつてるつて飯食わせてるんですけど~」

確かに八雲はモムモムと何かを咀嚼している。

加えて昨日までボロ衣だつた衣類も、濃紺の艶やかなそれに代わつていた。

「流石にあんなもんじゃ俺がみつともねえし。

てかテメエ何様?突つかかつて来る理由が全くわかんねえんだけ

「ど

「それはッ！……でも絶対にお前は間違ってる……。」

「だとしてもテメエことやかく言われる筋合いはねエだらうが。

しつかり飯も、服も、住む場所も、マトモなもんを『えりてのつもりなんだがね』

激情に任せた拳を握るナクトではあるがやはりリューマは歯牙にもかけない。

鬱陶しげにシッシと手を払い、テカテカ彼は歩いて行く。

その後ろを置いてかれまいとハ雲が続く。

「ハ雲さん！」

ナクトの声に振り返り、ペロリと頭を下げたハ雲。

少しだけ足に力を込めて、彼女はリューマの後を追いかけたのだった。

『闘神大会』の本選に出場するためには、まず『予選迷宮』と呼ばれるダンジョンに赴かねばならない。

本戦であるトーナメント式の大会、その参加者を絞り込むためにそ

れは存在するのだ。

課題は『予選迷宮』において『いかな』を一十五以上集める事。そうすれば予選クリアの最低条件を満たすこととなるのだ。

ちなみに『いかな』とは小さな魚で高級食材の一つでもある。たくさん集めて煮るとおいしいといわれている。

鳴き声は『ぎょるぴー』と非常に変わっているのだが……。

ともかくそれを予選迷宮内の受付に集めて渡す必要があるわけだ。今回の受付はマスカットという女性とキヨホウという良く分からぬ生き物。

集めて来たものをキヨホウが飲み込むことによってその量を測定する。

期限は明日いっぱいまで。

予選自体は三日前から始まっている訳であるから、ここから参加するリューマたちには少々厳しい条件かもしれない。

加えて言えば本戦に出場できるのは『いかな』の累積数が多い予選上位三十名のみ。

トーナメント自体の出場者はシード権を持つている者がいるため二十一名と少し増える。

二十一回とこつのはあくまで最低条件なのだ。

今年の参加者は百名程、競争率は三倍程度だ。

てな訳でここは『予選迷宮』の入り口付近。

ぱつと見どこかの村の鉱山のようだがれつとした予選会場である。立てられた看板にもでかでかと予選会場と書かれているし、誰がどう言おうと予選会場なのである。

そして現在の時刻は16時。

『予選迷宮』の開放時間は決まっておりそれ以外は侵入できないシステムとなっている。

時間は9時～16時まで、今は閉鎖の時間と合いなるという事だ。

入り口の付近で、一人の少女がぼんやりと立ちつくしている。

濃紺の着物に白い肌が映える美少女。

Japanより見知らぬ土地、闘神都市へとやつて来た彼女の名前は八雲。

健気にも自分を攫つたリューマを迎えているのだ。

「あ……八雲さん」

声をかけて来た羽純にペコリと会釈を返す。

「えと……あの人を迎えてるんですか？」

の人といつのはリューマの事であろう。

首を小さく縦に振る八雲に羽純は難しい顔をする。

どこからどう見てもリューマの八雲への扱いは不当なよう見える。暴言しかり、大会への登録しかり、彼女へ気を使つていないうつに見えてしまう。

だがナクトの言う様に彼は悪人なのであるうか。

今朝もそつとあつたがきちんとしたものは食べているようだ。

服装も昨日とは比べ物にならないものだし。

泊つてるとこをマルテに見せてもらつたが、作りは違うがかなり立派なところだつた。

そう考へるとハ雲への対応は不当では無いものに見えてしまつ。彼の言う様に彼女を拾つた、というのならば破格の待遇ではないのか。

尤も同じ女の子としてはどうか?と思える言動は節々に感じられるのは間違ひないが。

「ハ雲さんはあの人と一緒にいいんですか?」

意を決して尋ねる羽純。

少し困つたような顔を見せる彼女はもう一度小さく肯いた。

「私は何もないですから……。

でもご飯の用意とか買い物のお手伝いとか……文字とかお金とかよくわからぬいけど、ちゃんとやつてたら何もされてないですから……

「何もされないって……何かやられたんですか!?」

表情を変えずポツポツ言葉を紡いでたハ雲の頬に少し朱が差す。それとは対照的に瞳の光はだんだんと失われていく。

そんなハ雲に羽純は思考がそちら寄りに移り……茹で蛸のよつに真

つ赤な顔。

「あつ、あの人！」

「大丈夫……です、私は……きっと」

強張つてはいるが精一杯の笑顔を浮かべるハ雲にそれ以上の事を羽純は言えなかつた。

きっと彼女は心の中にピンと糸を張つたのだ。
何らかの思いを糧に張つたそれを、自分の言葉一つで千切つてしまふ訳にはいかない。

自分の我儘で、彼女を再び悲しませる訳にはいかないのだ。

「じゃあハ雲さん……私はもう何も言わないです。

だから、その……代わりにお友達にならう？」

でもこのままここで足踏みしていくことだつてもつとできない。
だつたらばせめて、自分が彼女を支えれるようにならう。

昔憧れて、少しだけ嫉妬した女性に抱いた感情。
自分が支えるなんておこがましいかもしないけど、それでも羽純は何かがしたかった。

「あのつ……えと……その……」

ワタワタと手を振り小さくなるハ雲に小動物のそれを重ねてしまつ。頬を這つて口元を持ち上げていたのだが、だんだんとそれも自然に行えるようになる。

「ねつ？」

「……あう」

慣れていないのか口を噤むハ雲に笑いかける羽純はとても楽しげだった。

『予選迷宮』に現れるモンスターは弱い存在が多い。
『ハニー』に『イカマン』に『るるんた』。
一般的な実力を持つ冒険者ならばまず負ける事は無い、所謂ザコ敵だ。

まあとはいっても苦戦する人間もいる。
たとえば駆け出しの、レベルが低い、

「いつてH H H H – ?」

そここの縁髪の少年、ナクトのよつに。

イカマンの噴き出すスニをまともに受けたといひに触手による連續

攻撃。

ダメ押しの人のような脚での蹴り技。

初心者が陥りやすい死への一直線ルートだ。

「なつ……めんなア！」

が、まあこんなところで彼は死ない。

一応原作の主人公なわけだし、補正でもかかっているのだろうか。

迫る肢を刃で受けて逆に相手を怯ませる。
そのまま食い込んだそれを下に引き切り、

「負けねエー！」

斜め下に振り下ろす、存外鋭い刺突がイカマンを貫く。

「イカアアアア！」

青色の体液を撒き散らしながら断末魔とともにイカマンは生き絶えた。

「いかなー」……「げつとう」……

息も絶えながらも死骸をあさりいかなーを袋に入れる。

倒したら光とともに消えるなんて事も無く、モンスターはちゃんと存在するれっきとした種の一つである。

この世界でのモンスターは『人類の敵対者』というよりも『普通に存在する野生動物』という感覚が強い。
種類によっては加工されたり、食用としても扱われたりする。

何にせよ彼らは実際に存在するのだ。

「……何度もなれねエや」

返り血で青く染まつた剣を布でふき取り溜め息をつく。

先ほどので「10匹田のいかな」。

とりあえず今日のノルマは済ませたのだが迷宮の道すがら田にした
参加者たちを思うと足りない氣もする。

参加の際配られた魔法時計で時刻を確認するともう30分程で16
時となる。

「今日はここまでに……ッ！」

ザクザクと土を削る音がする。

恐らく何者かがこちらに向かつて来ている。

消耗しきつた氣力を奮い立たせるべく世色癌の一気に口に放り込み
噛み碎く。

ランスの居る時代では『ハピネス製薬』といつ会社で一大製作され
ていたこのアイテム。

その発祥は非常に古く、現在と製法は異なるがとある高い医療レ
を持った人物が開発したとされる。

氣力体力を回復させる薬草や滋養強壮の食材。

さまざまな原料を微妙な配分で調合したそれは冒險者ならずとも一
般家庭でも重宝されている。

地方によって伝わる製法は異なるらしく、広い範囲で普及している
代表的なアイテムだ。

ちなみに『ハピネス製薬』の初代社長は大陸中に散らばる製法の伝承者を集め、さらに高い効能のそれを作り上げたらしい。

今の時代一粒で数値で言えば一しか回復しないそれが、ランスの時代では数粒で全快する。

そのあたりは年推移による技術の発展といえるだろ？。

「いかなご集まつてるう~」

「……アンタかよ」

奥から現れたのは大きな風呂敷を肩に担いだリューマ。
抜き身の剣をとりあえず鞘におさめたナクトは、ハアと深くため息をつく。

「ンだよ、ノリがワリイな」

「疲れてんの、見ればわかるだろ」

「え？ マジで？ …… プーッ！ クスクス」

「笑うなッ！ ！」

「イカマンとかに苦戦する『闘神』……ダセエ！ ……」

顔を赤くしながらも何も言い返せない。

残念なことにそれは変えようも無い事実なのだから。

「レベル屋とか行ったか？ アレ？ もしかして存在もじらねェとか…

「…」

「知ってる！それにそんなどこ行かなくたってレベル神が俺には付いてんだよー！」

「まつたまた」、冗談は頭だけにしどけ

「いるんだよー！」

この大陸に暮らす生き物には、強さと技能に生まれ付き値の定められたレベルがある。

通常のRPGにあるようなレベルと同じ概念で、例外的なキャラクターもいるが、基本的にレベルの高い者が強いのだ。

ちなみに生き物が死ぬと魂は天使または悪魔が回収するのだが、レベルの高い者の魂ほど、宝石の如く美しく、貴重な存在となる。そして、最終的な帰属先のルドラサウムやラサウムの力となつていくため、レベルアップの本質とはこの魂の精練にあるらしい。まあこの辺は大陸に生きる者たちは知らないのがほとんどではあるが。

ここでリューマが言つてゐるレベル屋についてだが、そこは経験値を入手した者がレベルアップを取り行うことのできる特殊な場所の事である。

大陸に生きるものすべてにはそれ相応の経験値といつもののは存在する。

それを倒すことによつて「己の身に経験値を蓄える事が出来る……」という聞けば酷く変な常識がまかり通つてゐるのだ。

まあ何にせよレベル屋とは水晶玉を用いて一般の人々のレベルアップをしてくれるところなのだ。

「ホントなんだよー！」

「あーまあ、口だけは！」達者なよつで……」

「ホントだーー！」

「へイへイ妄想！」

「ヤレ」まで言うんなら呼んでやるよーーー！」

そう言いつつナクトは拳を握り祈る。

「レベル神よ、我の呼び出しに応じ、その姿を現せーー！」

一瞬辺りがまばゆい光に包まれたかと思うと、一人の前に桃色髪の少女が姿を現した。

「あ、ナクトさん！」んにちは」

「どうだ！俺専属のレベル神のクミコ様だーー！」

レベル屋を利用するしかない一般の人と違つて、有望な冒険者や実力者など、優秀と判断された人物には彼女らが担当として付くようになる。

その行動は自分の階級を上げる事が目的とされ、レベルの上がつて行く者に付いているレベル神は、それにつれて階級も上がつて行く場合が多いらしい。

勤務態度にもよるが、呼ばれればどこにでも現れて仕事が終わると去つていいくのが基本だ。

レベル神が付いているところはそれだけ素質があるといつ證明にもなるのだ。

「どうだ！」

「おお、ちょっとだけ感心だわ」

ちなみに一人のレベル神は複数の存在を相手にするのだが……」
辺は言わないでおこう。

本当に驚いた様子のリューマに満悦のナクト。

「アンタには付いてないだろ？」んな可愛いレベル神が……！」

だからこゝに乗つて挑発するような態度に出る。
悔しがつてゐるであろうリューマの顔を再び見るべくこゝから視
線を移す。

そしてその先、彼の隣にはハ雲と同じような濃紺の着物を纏つた一
人の少女の姿があった。

「あらクミコ、専属を見つけたの？」

「お久しぶりです！先輩のこゝ指導のお蔭でようやく一人目が

「へ……先輩……？」

「見習いは先輩の下で実地研修を積むんだよ」

「はじめましてかしら？私は晶、リューマのレベル神よ

まるで表情を変える事も無いような徹底的な無表情。
だが酷く整った人形のような容貌に鳥の濡れ羽色の髪。
少々小柄ではあるが間違いない美少女であつた。

「ま、テメエだけが特別じゃねエつてこつた」

ケタケタと笑うリューマに突っかかる気力すらもはや残されてはい
なかつた。

五戰目（前書き）

地の文はやはり難しい

『予選迷宮』を抜けて、入口で待っていた一人と合流して、四人はカテナイ亭へと歩みを進めていた。

のだがその途中、ナクトらは浅黒い大男に絡まれていた。ナクトは剣を手に、『ドギ』と呼ばれた男は斧を手に、双方は殺伐とした空気を漂わせている。

どうやら一人には面識があるらしく、ドギは怯まぬ羽純に興味を持つたようだ。

関係は良好ではないらしい。

それもリューマとのように一方的に嫌悪を抱いているものではなく。嫌悪と興味が、悪い感じで絡み合っているのだ。

「へへへ……お前と当たればその女を食えるってわけか。

まだつぼみだが、ずいぶんとおもしれやつをパートナーにした
じゃねえか」

どうも小悪党感たっぷりな発言ではあるが絡まっている本人たちに
とつてみれば凄まじく拙い状況である。

いやらしい田線で、舐め回すように羽純を見つめるドギ。

思わずナクトの後ろに隠れるが、ドギの挑発でナクトは剣を構えた。

鬪つようである。

「尊じやあ強いもんがとことん優遇される街らしいな、こいは。

さあて、予選落ちしそうなチビッ子を叩き潰して、土産をいたぐるかあー！？」

ドギは間合いを取り斧を構える。

その巨体の筋肉の盛り上がりは本氣の戦意を現していた。

「俺もここつも『闘神』になるつもりなんだ、どうせ大会で当たる。

だから……こいつを倒せるくらいにならないとダメなんだ！

きつともっと…強い相手だつて…！」

逃げようとした途端を振り切りナクトは前を向く。

「逃げるなんてこと……大会に申請した時からもうあり得ないんだよッ！

「こ、こ、ドギー叩きのめしてやるッ…！」

「ばーーーーーか、寝言は寝ていいやがれー！」

「どいつもこいつも……俺の事をバカにすんなアアアアアー！…！」

ナクトは地を蹴りドギーと向かつて駆けた。

そんな光景をリューマは冷めた目で見つめていた。

「……ただのバカか、まあ小利口に固まつてゐるヤツよか俺は好きだ
がね」

「あのー、ビーフ……」

「ビーフてそりゃ宿に、重くは無いけどずっと持つてるとタルイン
よ」

そう言つと皿抜きされたイカマンが十数匹入った風呂敷を掲げて見
せる。

食材代の節約ということで、イカは好きではあるし、彼はついでに
狩つて来たという訳だ。

「助けて……あげないんですか」

「ハア！？なんで俺が！」

「だつて……その……仲も良かつたですから」

「ねエな、ダチでも何でもない、ただの顔見知りだろ。

義理もなんもありやしねエんだよ」

呆れたよつに肩を落とし、軽くハ雲のお尻を蹴飛ばす。

「ほれそれ行くぞ」

振り回した斧に吹き飛ばされていくナクト。

あまりに一方的な攻撃に、思わずハ雲は口をつむる。

誰か助けに入るのか。

そんな想いを胸に周りを見渡してみても、遠巻きにそれを眺めるだ

けで基本的にリューマのよつて無感心か、野次馬根性だ。

「あの……とも……だちなんです」

「ハアー!?」

「羽純とは……友達になつたから……だから」

「じゃあ行けばいいじゃん、助けにどいづぞ」

「え……」

「いや～アレだね、友情つてのは素晴らしいね。

そのために今日一晩か、これからずっとか、二人仲良くアイツの性奴隸になるわけだ」

見てみればナクトはドギとの戦いに敗れ地面に倒れ伏していた。

「ナクトッ……！」

「あう……あ」

「ほれやつぱ負けた、勇気と蛮勇は違つんだぜ！」

「やつ……しつかりしてー怪我はー!?」

「ぐははははははは、弱すきるぜえクソガキいーー！」

さあてじやあクソガキのパートナーの味見でも……」

ドギは舌舐めずしながら羽純に近付く。

「さて、どうすんの…… ってマジ?」

怯えを見せつつある羽純に向かってハ雲はあろうとか駆け出していた。

ハ雲にとつて、羽純は初めての友達である。
奥ゆかしすぎる一面を持つ彼女に、これまで友達といつた友達はいなかつた。

同年代の相手とは話しても、どうも彼女はつまらないらしくすぐに離れていく。

村の中で顔を合わせず生活をする、などといふことはほぼ不可能に近い。

必要な事、そんな話は必然的に行つ。

だがそこまで。

少しの休みに他愛も無い話に花を咲かせたり、そんな経験は彼女には皆無だった。

だからこそ、羽純はハ雲の中で大きな位置を占めていた。
自分を友達と呼んでくれる。

それは彼女にとつてひどくうれしい事だった。

「あちらの男の人人が言つてましたが、勇氣と奮勇は違うのですよ

走り出した彼女。

しかしその行く手は編み巻を被つた、鈴の音のような声の女性によ

つて止められた。

「まさかカラ一……ちよつといこつは予想外かねエ」

同じようなappa刀を腰に携えた女性の隣にリューマは歩み寄る。

その一人の視線の先。

それを追う様にハ雲は顔を上げる。

「え……？」

氣力を振り絞り立ち上がるうとしたナクト。

されどボロボロの四肢に力のこもる事は無く、彼の思つよつには動いてくれなかつた。

そしてとどめとばかりに振り下ろされたドギの巨大な斧。ナクトの頭蓋を粉碎するはずだったそれは、青い剣によつて受け流されていたのだ。

受け止めたのは観衆の後ろから飛び出した一人の青マント。

「邪魔する氣か！？」

怒声とともに振るわれた斧。

再び受け流されたドギの斧は剣士のフードを切り裂いた。

「ひゅー、剣士としても一流つてか」

「やわらかな太刀筋、見事ですね」

ドギの喉元、そこには彼女の剣先が付きつけられていた。

「見事だぜ、カラーの姉ちゃんよ」

周囲の観衆がざわめく。

裂けたフードから覗いた長い耳、額に光る美しい赤の宝石と整った容貌。

『カラー』とは女だけの不死の一族。

若いままでの姿で生き、ある時期が来るとそれまでの行いに応じて天使か悪魔へと変貌する人間とは違う生物。

彼女らは総じて美しく、高い魔力を持っているが人間に比べて戦闘能力が優れている訳でもない。

そのうえ処女を失うと赤から青へと変化する額のクリスタル。それはきわめて強力なマジックアイテムとなるため、常に欲深い人間たちに狙われているのだ。

自然に生きていれば不老不死、だが額のクリスタルを奪われれば天使にも悪魔にもなれずに消滅する。

故に、ほとんどのカラーは『クリスタルの森』と呼ばれる森の中、罠を仕掛けて侵入者を拒み、ひつそりと暮らしている。

今この街で、屈強な男相手に剣を交えているのはそのカラーなのである。

ギラつく目で見られてしまうのも当然のことだった。

「カラーと知り合いたあ意外に交友関係がひれエや」

「どうやら彼女も闘神大会に参加するようだ。

額の赤いクリスタルに喜びの声を上げるドギは満足そうにその場を立ち去つて行つた。

「ンじゃ俺らも帰るか

「お待ちを」

八雲の肩をぽんと叩き歩みを促すリューマに制止をかけたのは編み傘の剣士だった。

傘の向こうから覗く眼光は鋭く彼を貫く。

「私が、あの方が、止めに入らねばどうするつもりだったのですか」

「さあ？止めに入らうのがわかつたもんを考えたつて仕方ねエ
だろ」

「……わかつていたと」

「どうだうなあ

今度は羽純の方に駆け寄つている八雲に、リューマはガシガシを頭をかく。

「ずいぶんと嫌われているようですね

「ケケケ、それが普通だうよ」

「何をなされたので？」

「ちょっと誘拐を……な

その言葉に剣士は刀の柄に手をかける。
鋭い圧力が、リューマを貫き、それはカラーの剣士すら振り向かせた。

「闘神大会参加者同士の私闘は禁止なんですか」

「……参加者では無いやもしれないですが」

「今日迷宮に潜つたとき、アンタに似た編み傘の人間を見たんだねエ、コレが。

つまり……それはアンタつてことだろ？

正体隠してゐつもりか知らんが逆に田立つてんだぜイ」

ジリジリとした雰囲気が一人の間を突き抜けてゆく。
ナクトとドギ、ドギとカラーの剣士、この間では感じ取れなかつた濃く粘つこい空氣。

カラーの剣士も一人とハ雲をかばう様に、こちらへと神経を張つている。

「お名前は……？」

「ブタバンバラです」

「……お詫びは？」

「ンだよ、どこつもここつもノリが悪いね」

被っていた編み傘を取り上げ自分の頭に被せてみる。

彼の顎が、口ほどかまである長身の女性。

流れるような黒髪と透けるような肌が印象的な侍美女が姿を現した。

「返していただけるので？」

「やつちの方が田立たんしイイだろ。

てな訳でくれんか、」「？」

美しくもどいか包容力を漂わせる顔立ちに不快感を少し混ぜ込む。

「お前を教えていただけるな」

「え？俺に惚れた？」

「切りますよ」

「ヘイヘイそんな時だけ笑顔になんなよ。

リューマねリューマ、あようじへ

「……やつですか」

「なにそれの残念そうな顔はさー」

俺にもうと何を求めてたんだよテメエ「ノヤロー」

「……それではまたいざれ」

そつぱると女性は踵を返し人混みの中へと消えていった。

「俺つて嫌われてんなあ」

ホソと呟いた言葉は誰にも聞かれることが無く消えていったのだった。

コトコトと鍋が音を立てる。

少しだけ煮詰めたいかなごを取り出し、砂糖にじょひめ、酒を加えていく。

「……生まれの俺としてほしゅせやつぱ欲しいんだが高いんだよなあ」

ブツクサと文句を言いながら、空になつたしょひめの密器を「み箱に放り込む。

カテナイトの共同台所、その一つの魔法「ノロの前にリマークとハ雲は立つてゐる。

「……なんとか……んじゃまあこかな」貸してくれんな

「……あのつ」

「何よ?」

「いかなじ……その……必要なんじや……」

予選の突破条件はハ雲も羽純から聞いたため知つていい。そして目の前で煮立つてしまつたそれは、その突破に必要なものなはずなのだ。

「余裕余裕、しつかり収めて來たしさ」

「でも……あの……」

「いいだろ、大丈夫だつて言つてんだからよ。

それにだ、もし予選敗退だつたら一年間無償労働するだけでお前は自由になるんだぜイ

リューマの言つ様に「*a pan*」には戻れないかもしねないが、少なくとも誰にもこれ以上汚されることは無くなるかもしねない。

その上一年間、この街で暮らすのだ。

そうなれば「ネも出来るかもしねない、知り合つても出来るかもしねない。

女の子一人でもまともに生活していけるかもしねないのだ。

「てな訳でさ、まあイイ」と呟くめだろ?

「いかなご」の佃煮は食えるし、ローラー出身ひとひやあ御馳走の「つじやねえか」

祭りの時だけ食べる事の出来るお椀いつぱいの白米。
そしてそれには必ずと言つていよいよ「いかなご」の佃煮が少しだけ
ついていた。

こちらに来てから毎日のように、とこつてもまだ「日ほど」だがローラーに居た頃とは比べ物にならないほど美味しく豪華な料理を食べている。

基本的にリューマもまたローラー出身りじこので白米を思いつきり食べられるのだ。

食べ物によりて胃袋を買収されてしまったような状況だらうか。
そこにさうに自分も、兄も、大好きだつたいかなごの佃煮が付属する。

田の前に垂らされた餌に、結局八雲は屈してしまつのだつた。

それから一晩が過ぎ、リューマと八雲の手の平の魔法印は光り輝いた。

一人の手の平の紋章はいったん姿を消し、そしてまた再び形を変えて現れ、また消えていった。

「いかなごばんざーい」

「いかなごばんざーい」

どこかの部屋からナクトと羽純の声もある。

リューマーらも彼らも予選を通過したのだった。

だが同時にこれは相手対戦者にパートナーを凌辱される可能性も秘めているという事だ。
掛け値なしに喜んでいる一人とは違い、八雲の気持ちはやはり沈んでいた。

六戦目（記載せ）

W.i.kで見て、え？ 一年目へと感つた今日の頃

六戦目

組み合わせ発表の日、リューマは毎晩つから酒を飲んで頃垂れていった。

机に突っ伏し「Japan酒を煽り。
どうからどう見ても氣の抜けた、やる氣のかけらも無いダメ人間であつた。

「浮かねえ顔はなあんねえな」

「アリッサちゅわん、もう一杯くださいな」

「リューマさん、毎晩つから飲みすぎだよん」

「いいのいいの、予選突破しちまつたしお祝いってヤッだしイ」

頬を朱に染めたリューマはコップ片手に手を振る。

その前で、いかにも屈強そうな男が大きくため息を付いた。

「なんで伊田那、もつと楽しもつぜえ〜」

「酔っ払いの世話じやなくて、真毎晩じやなけりやあな

ゲヘゲヘと酒臭い息を吹きかけるリューマは公害以外の何物でもない。

それがある程度受け流し、扱える壯年の男は度量が広いのだ。

身の丈ほどある巨大な剣を携える彼の名前は『ボーダー・ガロア』。

闘神大会の常連出場者であり、毎年優勝候補の一角を張る男である。

「強そうだったから話しかけてみりやあ……俺の勘も鈍ったか？」

「うう……うえええええつ」

「いんなとこでもビしたらダメだよん……」

桶に顔突っ込んでいるリコーカマを見て、口をぱはり溜め息がこぼれる。

強い相手との戦いを望む性質のあるボーダーは無くなつた頭頂部を叩くのだった。

「は」「やつーん、いらしゃこませ……つてナクトさんじやない」

「邪魔するね……つてクサッ！なんの臭い！？」

「いや～、お密さんの一人がもどしちゃつてね～」

顔をのぞかせてみれば見知った着物姿の丁髷男。

何か言つてやろうかと口を開いてみるが、周りに人の沢山いる酒場であると気付きとりあえず自重する。

リコーカマを相手にするよりも大事な事がある。

そつ自分に言い聞かせ、気持ちを押しとじめて、ナクトはアリサに向き直つた。

「あの、聞きたい事があるんだけどいいかな」

「おっけ、何かな？」

「あのセ、通せんぼハイーのどかし方って知ってる?」

ナクトの話をまとめるとこうである。

大会の予選通過者は、来るべき大会に向けて経験値を稼ぎ口を強くする必要がある。

だがしかし、果たしてその経験値はどこで稼ぐのであるつか?

予選迷宮で稼ぐというのも一つの手だ。

されどあの迷宮に現れるのは極めて程度の低い敵ばかり。大した経験値を稼ぐ事も出来ず、無駄な時間が流れていってしまうのだ。

そこで大会出場者には『エリアカード』といつものが配られる。

この闘神都市には『マビル迷宮』といつ不思議なダンジョンが存在する。

世界各地の数多のダンジョンにつながり、そこへ転移魔法で移動できるといつ極めて稀な迷宮なのだ。

転移した場所の事をここでは俗に『エリア』と呼んでいる。

そこには強いモンスターが場所に応じて存在し、たくさんの経験値を稼ぐ事が出来るという訳である。

無論エリアにもランクがあり、強さにも多くの幅がある。自分に合ったエリアを選ぶことが出来るといつ事だ。

出場者はこれで日々己を鍛えているのである。

さてさてここでどうのうに行くエリアを選ぶかといつとんだ。

勿論最初からすべてのエリアに移動可能ですよ、なんて甘く優しい配慮を期待してはいけない。

エリアーに存在する『認証シール』、それを獲得し認証してもらうことによって新たなエリアへと進んでいけるといつシステムなのだ。

ちなみにこのシールの貼り付けも自分一人で出来るわけではない。一日一回、その日の午前中に認証管理官にに頼む必要があるのだ。ナクトはマゼル迷宮最初のエリア、『ファースト』に入ったのだが通せんぼハニーが邪魔をして先へ進めなくなってしまっている状況なのである。

「じめんね～、ダンジョンの事とかはちょっとわかんないかな。

前の大会出場者とかに聞いてみたら？」

「ぼうず、それなら俺が相談に乗つてやるぜ」

グイッとしな垂れかかるリコーマを押し退けボーダーはナクトの方へと近づいた。

その顔には少々疲労の色が見え隠れしている。
酔っ払いの相手はそれだけ疲れるということか。

「ほうすじやない、俺はナクト、ナクト・ラグナードって言つんだ！」

「ほう、威勢がいいな……気に入つたぜ」

「俺は～リューマって言います～、アロペラ」

ボーダーはリューマを視界に入れずナクトの髪をわしゃわしゃと搔き回した。

「ふむ、ぱうずの頭は手触りがイイな」

「あ、ちゅうどいにじゃん。」

ボーダーさんは去年の大会の準優勝者だし、聞いてみればいいよ

「おじちゃんは～おじちゃんは～」

またしてもリューマを視界に入れず、ナクトとボーダーの話に花が咲く。

再び頭に手を乗せて、ナクトの頭を撫でる。

「タチの悪いマネしゃがつて……いいだらつ、俺に任せな

「え？ ありがと、ボーダーさん」

どうやらボーダーはナクトに協力する方向で話が進んでいる。
完全に空氣と化したリューマではあるが、じいじとばかりに言葉をつなげる。

「たいちょーーー自分も行きたいあります

「……エリアカード持つてるか？」

「持つて無いであります

「じゃあクロシアム行って貰つてきな、俺らは先に行つてるからよ

適当に厄介ばらっこをしたボーダーはナクトとともに酒場を後にした。促すアリサに背を押され、彼もまた酒場の外へと繰り出した。

目指すはクロシアム、受付へ。

だがその前に桶がもう一つばかり必要なようだ。

クロシアムの受付、その奥には受付嬢が休めるための一室が存在する。

机があつて、椅子があつて、魔法ビジョンがあつて。非常な簡素な造りのその部屋に、青い顔のリューマは机にべつたり顔をひつ付けていた。

「嬉しいのはわかりますけどお酒に呑まれちゃダメですよー

「あ……お……わざわざ

ふらふらと覚束ない足取りでクロシアムまでは来たものの、照りつける日射に日に耐えきれなくなつたリューマはショリの皿の前でぶつ倒れてしまつたようだ。

差し出された冷たい水がのどを潤す。

「まだガンガンと痛む頭に眉を顰めてしまつ。

「はあ、受付の仕事そつさのけでお世話して上げたんですからお姉さん感謝してくださいよ」

「十分も経つてねえじゃねえか……」

「それだけ憎まれ口が呂けるなら大丈夫ですねー」

「そう言つとシユリは扉をぐぐつ吹付へと足を延ばす。

残された部屋の中、一人となつたリューマはボンヤリと開いた手を見つめていた。

握つて開いて、握つて開いて、握つて開いて。

「なあにやつてんだらうね……」

目を見開き勢いを付けて両の脚で立ちあがる。

若干ふらつく体をしっかりと握りしめた刀によつて落ち着かせた。

「ビーせやることなんてたつたーつじやねえか

ニヤリと口元を持ち上げ、リューマは扉をぐぐつシユリを追う。

「あれ、もう行くんですか？」

「まあな、悪いがエリアカードだつて、アレくれる？

「はーはーい。

使い方はわかつます?」

「シールを集めて認証管理官に張つてもうまいやつだろ」

「そうゆーことですね、午前中しか認証はやつて無いんで急いだ方がいいですよ」

ヒラヒラ手を振りリューマは速足で歩きだす。

その歩が若干ふら付いているのはまた御愛嬌とこつものだ。

「頑張つてくださいねー、結構応援しますよー」

背中にかかるショリの言葉は御世辞か、それとも本音か。
その辺りは彼女にしかわからない。

結局時間ギリギリで認証小屋に飛び込んだリューマは無事初めの迷宮へと入れるようになった。

認証管理官を厳格なおっさんと予測していたため現れた青髪の巨乳少女『御前夏』には少々度肝を抜かれたが。

転移魔法陣で空間を越え辿り着いた迷宮『ファースト』。

といつても現れるのは『ぷりょ』に『ローパー』に『メイジマン』に『グリーンバー』。

まだまだモンスターとしては最弱級の者たちばかりだ。

「ヘイヘイ煩わしいねッ」と

飛びかかってくるふりょを蹴り飛ばし、ローパーの眼球に石つぶてを叩きこむ。

『光の矢』を繰り出すため腕を掲げたメイジマンを叩き斬り、グリーンハニーも真つ二つ。

どつせりの程度のモンスターではリコーマの足止めこすりならぬいよ。

まだ青白い顔でも余裕綽々である。

「滑った！？……見られてねエよな

下り坂で足を擦りしみつともなく尻もちを付く。
酒に酔つて気分の悪い胸とそれくらいが彼に『えたダメージだらうか。

ヒリヒリ痛む尻を擦りつづらなる奥へとズンズン進む。

「ハニホー、ここを通りたければ三万GOLO出すあるよー

「退けたんじゃねかつたっけ？』

細い通路、そこに我が物顔で鎮座するのはカラーコーンのような外見を持った一匹のハニーだつた。

『通せんぼハニー』と呼ばれるハニーの個体の一種。良くな迷宮でこりやつて道を塞いでいるのだ。

ちなみに赤色と茶色の二種類が存在し、今回は茶色。

石化し超重量となる事によつて道を塞ぐタイプだ。

「げ、復活してゐるじやん！」

そつと通せんぼハニーの向いの側から姿を現したのはナクト。深くため息をつぶローマに田を付けると彼は少し勝ち誇った顔をしてみせた。

「アーレ、ココーマさんそんなとこで何してるんスか？」

イヤー大変ですね、ボーダーさんに土下座でもして退かしてもらひよつ頼んでみたらどうですか？

ま、引き受けてくれるかどうかなんて俺はわからんんですけどね
早口で、嫌味たつぱりの迷宮の認証シールをヒラヒラ見せつけた。

多少溜飲が収まつたのか『お帰り盆栽』を取りだした彼は枝を折り、虚空の彼方へと消えていった。

ちなみに『お帰り盆栽』とは帰巣本能のある特殊な植物の事である。枝を折り宙に掲げることによって迷宮の入り口に帰る事が出来るという極めて特殊で利用価値の高いものだ。

折れた枝も10分そこいらで再び生えてくるため、冒険者たちにとっては是非一つは持つておきたい必需品である。

「ハニホー、早く出すあるー」

「なんで俺が、お前に出すなんて勿体なも過ぎるだろ

「じゅあ通さんあるね、必殺……石化……」

そう言つとがつちかちの鉱石のよつになつてしまつた通せんぼハイ一。

「ハハハ」と軽く叩いてみるが、どうやらかなりの硬度のよつだ。

「あ～ああ、帰つてひととと寝よ」

そう言つと彼は刀の柄に手をかける。

瞬間、一筋の銀閃が迷宮内へと煌めいた。

「 売る気か？」

「 はい……」飯代とか宿代とか、全部出してもらひのは悪いですか
「 う」

「 ま、どうでもいいけど」

妙に義理固いハ雲は再び黙々と草履を作る。

辺りは夕焼けに染まっている。

差し込むオレンジの光はハ雲の傳い美しさを一層引き立てていく。

「 ンな事よつ飯は？」

「 あ、ト、じ、ひ、ま、済んだのですべこでも出来ると思つます」

「 ょし、じゃあ食おう。」

「 腹ア減つて仕方ないんだよ」

グウと大きく鳴るリューマの虫。

思わずクスクスと笑つてしまつハ雲。

「 ほれ、とつと立て」

ゲシと軽くハ雲の頭をはたく。

「 ……はい」

手を止めて、歩き出す彼女の足取りは昨日よりも少しだけ軽かった。

六戦目（後書き）

やっぱ三人称は難しいです

七戦目（前書き）

組み合せ発表してみました

七戦目

大会一日目

第1試合 白井カタナＶ・Ｓ・カリギュラ

第2試合 ナミールハムサンドＶ・Ｓ・銀河爆神ドル

ガーラ

第3試合 ボーダー・ガロアＶ・Ｓ・黒ひげサミー

第4試合 中華仙人Ｖ・Ｓ・レオパルド・

マーラー

大会二日目

第1試合 タイガージョーＶ・Ｓ・恐怖の大王ラスボス

第2試合 ハリケーン斎藤Ｖ・Ｓ・宝光

第3試合 アジマフ・ラキＶ・Ｓ・松本山本

第4試合 十六夜幻一郎Ｖ・Ｓ・アッシュ・根性

大会三日目

第1試合 ナチスパンサーＶ・Ｓ・レメディア・

カラーラ

第2試合 ナクト・ラグナードＶ・Ｓ・ドギ・マギ

第3試合 リューマＶ・Ｓ・ゲラー・ミン

大会四日目

第1試合 邪悪大帝Ｖ・Ｓ・ワートナー

第2試合 総統ＫＶ・Ｓ・ラフレシア

頭巾

第3試合 マダラガ・クリケットV・S・戦士カキタロス
第4試合 チヤネラー伊藤V・S・ブルマ大使

闘神大会開催期間中、魔法ビジョンにより放映される番組『闘神ダイジェスト』。

司会を務める『クリちゃん』と解説の『切り裂きくん』によつて毎晩行われているこれにより組み合わせが発表された。

『魔法ビジョン』とはテレビのような魔法製品の一つである。

その原理は単純で、例えば魔法冷蔵庫なら保温性の優れた箱に職人である魔法使い。

彼らが寄与魔法、この場合内部を涼しくするというモノを付ける事で魔法製品が出来上がる。

他にも予選で配られた『魔法時計』や電気、掃除機など様々な魔法製品が存在する。

しかしこれは基本的に宙に浮かぶ『闘神都市』の庇護を受ける都市、つまり聖魔教団の従属が強い都市のみ存在しているのだ。

いか程か前、魔法工学の権威『フリーク・パラフィン』によつて『魔法貯蓄』という革命的な概念が発明された。

文字通りそれは魔力を注入し蓄えておくという技術のことだ。

彼は本来、瞬間的なエネルギーでしかない魔力を専用の装置に入れておき、必要な時に取り出して使用出来るようにしたのだ。

これによつて魔池などに代表される魔法貯蓄が聖魔教団傘下の都市で普及し、彼らの魔法技術文明の基礎となつたのだ。

この開発によつて人類を統一した聖魔教団はさらなる発展を続け、従属の強い都市は従属が弱い都市とは比べ物にならないほどの技術を誇ることとなつた。

なんにせよ、それによつて組み合わせが発表されたのだ。
そして一夜明け、リューマは迷宮の中に居た。

今回の転移先に選ばれた迷宮は『見世物小屋』。

『ふりょ』、『メイジマン』、『グリーンバー』に加えて『ヤンキー』が生息する迷宮である。

……とまあ偉そうに言つてみるがまだまだ最弱クラスのモンスターばかり。

木製?のバット?とヤンキーを分断したリューマは今、鼻息荒く目の前の光景を食い入るように見つめていた。

「おかゆ様……スゲエぜ……代わりてエなあ

見世物小屋の一つではおかゆフイーバーと呼ばれるモンスターとリア姫と呼ばれた女性の公開×××が行われていたのだ。
着物を押し上げ盛り上がった息子をチラリ、ゴソゴソと辺りを見渡す。

少しばかり歩いてきたがやはり先っぽが擦れて妙な感じだ。

「お、俺つて運イイねエ」

見れば先ほどまで閉まっていた扉が開け放たれているではないか。

神経を集中させて辺りの気配を窺う。

どうやら近くに人はいないようだ。

そうと解れば、目散、扇の内側へとリハーマは駆けこんだ。

鼻歌を口ずさみ、帯に手をかけそれを緩めていく。

その顔はたゞしなく緩んで
初めてAVを見た中学生の如くた

「ケケケ、では御開ちよーバラツパツパツバラララー」ってなんじゃアアアアアー！？」

突如聞こえたトランペットの音。

隠していた着物を高速で隠した。ニーベル

たらんと力なく垂れ下がつた唐草模様の帯を引を引も、奥へ奥へと進んでいく。

「秘劍……朧抜刀切り！！」

見れば恥じらう事も無く堂々と、カツコイイのかカツコ悪いのかわからぬ技名を叫びヤンキー幾体かを一瞬で絶命させている男が居るではないか。

ヤンキーの集落か、とも思える数。

10か20か、それ以上か。

輪を描くように真ん中の縁髪の少年と銀髪の青年を取り囲んでいた。

緑髪の少年はお馴染みナクト。

銀髪の青年に見覚えは無いが、恐ろしいほどの速度と軽業師のよつた身のこなしで次々とヤンキーを仕留めていく。

「棒手裏剣ね……らしくね」忍者もいたもんだ

先ほどまでのみつともなさを隠すよつて、キッチリと帯を締め、眞面目な顔を作つて見せる。

とはいへ息子の方は元気ハツラツウ？なようド中腰であるが。

「Carry on...」

突如死骸を見聞していたリューマの頬を白球が掠める。
こちらに気が付いた幾体かのヤンキーが、彼を攻撃対象として認識したのだ。

「HAAAAA!!!」

シユールなジョークを受けたよつな軽い笑いを洩らしながら、ヤンキーはバットを振りかざしこちらに向かつて来た。

「むつ、いかん！？」

飛来する棒手裏剣。

だがそれよりも早くリューマのヤクザキックがヤンキーの体勢を崩し、追撃の踏みつけがその首をへし折つた。

結果……。

「すまん…まさかそのよつて倒すとは思わなかつた」

「いや～何のことかわづぱりわかんねエよ、俺は」

「刺さつてゐからーアンタ頭に刺さつてゐからーーー。」

ザックリと額に黒光りする鉄の塊が突き刺さつていた。
ピューピューと冗談のように血を吹くりコーゲ。

「コレ?……力を解放すると生える俺の角なんだ!ーーー。」

「んなわけ無いだろーーー。」

吹つ飛んだリコーゲの言葉に思わずツツコミを入れるナクト。

いつもならここでその問答は終わるはずだつた。
だが今日この時この場所には、今までとは違つた男が一人いた。

「角を生やす……だと」

「ツー? そだその通りなんだよ!ーーー。」

「実は……俺、悪魔と人間の間に生まれたんだよ」

「イヤ、そんのはいらねえから」

「人間と仲良くするためにこの大会に出場したんだ、きっと友達も
出来ると思つて」

「どんな設定だよ」

斜め上を行く発言ではあるが銀髪の男はうとうんと首を縦に振る。

そしてガシツとココーマの手を握ると真っ直ぐと彼の瞳を見つめて口を開いた。

「君にならきっと出来る……きっとな。

では少年、半魔のキミ、また会おう……」

「忍者仮面さん……！」

「イイ奴だ……ノリもイイしなあ

青年の立ち去った後、ナクトはしばし彼の行き先を見つめていた。

「未来の闘神、ヤンキーに囮まれて絶命す……と

「ほつといてくれー死んでないし……」

闘神都市の広場では出店が立ち並び、イベントがそこかしこで行われていた。

大会目当ての観光客もたくさん田にしつく。

そんな中、とある一角に八雲はいた。一角といってもホントに端の端の端、あまり人目の付かないところだ。

出店を出す」と自体は簡単である。

ここを管理してこなとひ、つまつコロシアムの受付で許可申請をすればいいのだ。

そしてショバ代を納め見事出店が出せるわけである。

まあしかし、人通りが多いところなどは既に店が立ち並んでこる。当たり前ではあるが高額のショバ代が必要で、尚且つ大会前に行われる抽選会にて当選した者たちだけが出店できるスペースなのだ。

勿論ハ雲は抽選会には行つてないし、お金もほとんど持つていない。店を出すから、トリコ・マに壱つと渡されたなけなしの100GOLDが彼女の軍資金だ。

そんなはした金でまともな場所など借りれる訳も無く、結果としてこの場所に追いやられてしまつたのだ。

田差しは鋭くハ雲の肌を刺す。

どこからか引つ張つて来たじざの上、籠と草鞋を並べておく。

籠が一つ8GOLD、草鞋が一組3GOLD。

時折くびくびと、水を飲み込みのどを潤す。

「……売れないな」

結果として言おひ。

彼女の商売、ハ雲は全くと詰つていいほどに振るわなかつた。

売れたのは「ああ」出身だといつ老夫婦への草鞋二つと籠が一つのみ。

それはそうだろう。

草鞋なんて、一体誰が履くだろうか。

底の硬い、お金を出せば魔法まで付『』された靴が流通しているところに。

誰とは知れない人間の作った、田舎臭い籠など一体誰が買つだろうか。

頑丈な皮や、特殊な金属性の持ち運ぶための道具があるところに。

「お嬢ちゃん、籠を売つてんのか?」

「あつ、はい」

久々に訪れたお密に八雲の気持ちも弾む。

「これまたずいぶん下つ手クソな籠だねえ!」

「え……?」

「編みは緩い、造形は甘い、装飾の一つもあつやしない」

まるで可哀想な子を見るように、深く重いため息を吐き出したお密の男。

ポイッと彼女の方に何かを投げて寄越した。

「俺の奢りだ、わかつたらどつか行つちまいな。

アンタみたいな素人さんがいるところちが迷惑なんだよ」

投げて寄越されたのは同じような形の籠。だが彼女が作る者よりも正確に、頑丈に、美しく仕上げられていた。

舌打ち一つ、男は歩き去つて行く。

貰つた籠を持つ力が強くなる。

絞め付けるような痛みがハ雲の胸を襲つ。

周りは喧騒に包まれている。

だが自分の周りにだけには音という概念が存在しない。

そんな感覚を、ハ雲は肌で感じていた。

「おいつ！」

「あ……はい、いらしゃいます」

籠を横手に置き、ハ雲は頑張つて気持ちを入れ替える。

「お前、いくらだ？」

「えと8GO-LDになります」

籠の事で頭がいっぱいだったハ雲はとつさに口を開いていた。

そしてふと、自分は間違つた事を行つていたという事に気が付く。

訂正しようと移した視線の先、そこには先日ナクトと羽純に絡んでいた大男が下品な笑みを浮かべながら立つていた。

「一九四九年十一月、日本に置かれていた

「キヤツ」

グイと乱暴に八雲の手を引いたドギは、一瞬の躊躇も見せず彼女の胸へと手を運ぶ。

和服の上から その豊満な胸が力強くて形を変える

「いたつ……イヤツ」

「なにが嫌だ、買わせてくれるんだろ、お前の体をよー！」

続けざまにギリと八雲の胸に痛みが走る。

その痛さと怖さに思わず口をつむった時、首筋をねじりとした熱く臭いものが通り過ぎて行つた。

「ハシ！」

「ぐわははははははつ、中々美味しい肉じゃねえか！」

ポカポカとドギから離れようと腕を振るつ。

しかし彼に対して全くと言つていいくほどに意味をなさなかつた。

否定しているのだ。

「さて、そろそと直接とするか」

着物の隙間、布と布との間にドギの無骨な手が侵入しようと試みる。そしてその指先が彼女の柔肌に触れようか触れまいか、そのような距離で急にドギの動きは停止した。

「悪いがそいつは俺のなんだわ。

ンで俺は闘神大会の出場者でこいつはパートナー、ビーチの意味かおわかり?」

「ツチ!めんどくせえルールもあつたもんだ」

「まったくまったく、ここで肉塊にしてやれんのが残念で仕方ねえなアー!」

ドギの太い首に紙一枚分、離れた距離に白刃が鎮座している。

リューマはいつもと違つて少々苛立たしげ。

「まあいい、勝てばいつも食えるってことだしなあ」

そう言つてハ雲から身体を離したドギは高笑いしつつ人混みの中へと消えていった。

囲むようにこちらを見つめていた群衆も、次第に疎らになつて行く。

「…………うえ…………ひつ…………」

「泣いてんじゃねーっての、ウザッてーな」

ガンとハ雲の頭にゲンコツを落としたリューマは大量に残った商品

を見渡す。

予想通りといえば予想通り。

予想外なのは広場の端っこの方に店を構えていたことくらいだろうか。

「おい、コレいくらだ

「……うえ？」

「うえじゃねえっての、いくらだつて聞いてんだ

「籠が一つ8GO「D、草鞋が一組3GO「D……」

ポイッと八雲に投げて寄越された袋。

その中はGO「Dで埋め尽くされていた。

「全部俺が買つてやる、その代わり明日から俺の指示通りに動け。

返事はハイハイエスだ

敷かれていたじざを風呂敷代わりに、リューマは商品全部を抱きあげる。

ズンズン歩いて行く彼の背中に、小さく八雲は言葉を投げかけたの

だった。

「……イエス、リューマさん

七戦目（後書き）

難しいなあ

八戦目（前書き）

だんだんと、構想も固まって来たこの頃、

八戦目

カテナイ亭に戻つて来てから、リューマとハ雲はナクトと羽純の部屋に居た。

尤もリューマは鳴る腹の虫を抑えるためにハ雲を呼びに来ただけだが。

「ハ雲の自分の部屋とは違いベットと呼ばれる寝具の存在する部屋。」

その寝具の上に橙色の、優しげな風貌の少女が横たわっていた。規則的に聞こえる寝息が命を刻む。

少し前までは衰弱し、足取りも覚束なかつた少女ではあるが今は幾分か落ち着いている。

糸の切れた人形のように道に倒れ伏していた彼女を、ナクトは部屋へと運んだのだ。

彼女の名前は『マニー・フォルテ』、あのドギのパートナーである。

「落ち着きましたか？」

「はい……ありがとうございます」

ハ雲お手製のお粥を食べ、血色を取り戻したマニーは、けれどまだ力無くうなずく。

服の裾でナクトの視線が定まっていた手首を隠しながら。

「あの、もしかして倒れたのはその癌が何か関係してるんじや」

「セセーナクトくんでりかしー無い男つてさてーよつ

「つぐつ

「だからまだ童貞なんだよ」

「ビ、ビ、ビ、ビ、童貞ちやつわーーー！」

真っ赤な顔で叫ぶナクトであるが女性陣、もとい羽純からの視線は痛い。

「ふふ……今更隠しても仕方ないですよね」

悲しげな笑み。

ゆっくりと服の袖から手首をさらしつつ、四人の耳に自嘲気味な声が響く。

「これ……ドギに毎晩縛られて出来た痣なんです」

「緊縛プレイ！アイシもやるなあ」

うんうんわかってる、と頷くのはリコーマだけ。あとは揃って顔を真っ赤に染め上げている。

それは恥ずかしさからか、怒りからか。

生々しい情事の跡を見せつけられて、平氣でいられるような場数を彼らは踏んでいなかつた。

「縛られて……それで酷い……事を……つづり……」

「熱い俺の滾りをお前で沈めてやるぜーーとかか？」

「おいッ！」

ケケケと悪人じみて笑うリューマにナクトから降り注ぐ視線は冷たい。

それを見つけるとキリッと顔を作つてみせるリューマ。

ケツヒ一言、ナクトはマニへと向き直った。

「どうして……ですか……？」

「えつ？」

「その……あなたみたいな人があの人のぱーとなーに……」

ハ雲の言葉に突如としてマニはぽろぽろと涙をこぼし始める。泣きじゃくるマニに投げかけたハ雲はおろおろ、一人もうろたえるだけだった。

「ビーセ犯されて攫われたの私、とかだる。

よくあるよくある

ケタケタ笑いだすリューマにビクッヒマニの身体が大きく震える。

途端ナクトの拳がリューマに迫る。

それを軽々と手の平で受け止め、ナクトの腹へとつま先をめり込ませた。

鳩尾に食い込んだそれに、ナクトは先ほどとった食事を床にぶちまけてしまう。

うずくまるナクトの後頭部に木製の下駄が押しつけられる。先ほど吐き出した、臭い立つそれへと彼の顔を押しつけながら、リューマはわかつて無いとでも言いたげに口を開いた。

「泣くのは勝手だけどよ、じゃあアンタは泣かないための努力でもしたのか？」

受動的にアイツの言ひ事を聞き入れ続けて、今の状況にあるだけだろうが。

そんなんだからテメエは荷物運びできる便利な肉壺としか見られないんだよ」

足を頭からじけて、ひらひらと手を振りリューマは自分の部屋へと向かつ。

「傷でも舐めてもらひえばいいじゃねエか。

俺は『免だがね……テメエの意志のかけらも無い、奴隸みたいな人生は』

「そんな風に……言わなくとも……」

「黙つてろクソガキ。

自分の立場はそこには觸るのと同じ……どういう意味かおわかり？」

真一文字に口を結び、八雲はそれっきり黙りこくつてしまつ。この三日間、リューマは八雲に触れてはいない。

頭をはたかれたり、ゲンコツを落とされたり、お尻を蹴られたり。そんなことは多々あった。

けれどそんなもの、自分の兄も良くやっていた。

ハ雲が遅れた時、間違った事をした時、ウジウジとくだらない事で悩んでいた時。

だからそれはちゅうと痛い、スキンシップくらいにしか感じられなかつた。

けれど違う。

今回のはまったくもつて違うのだ。

先刻、ドギに荒々しく扱われた痛みと恐怖が彼女の脳裏によみがえる。

そしてその行為を毎晩、いや朝昼夜、時間を問わず行われている人物が目の前に居る。

考えれば考えるほど、自分の体温が急速に失われていくような錯覚をハ雲は感じていた。

扉が閉められ、沈黙が辺りを埋め尽くす。

身体にのしかかるそれを押し退けて、羽織はマニの隣に腰かけると背中に手を回した。

「ココーマさんの言つてることも一理あるかもしねー」……でもー。

「ここにはあの人はいませんから……あの人はいないんですよ」

「…………つあ…………つ」

「今は、今だけは……大丈夫ですから」

泣きじゅぐるマニーの背を、羽純は優しく撫で続けた。

女同士だからこそわかるのかかもしれない。
だがそれは自分の立場がマニーと、そしてハ雲と違うから出来る事なのかも知れない。

自分のパートナーは幼いころからよく知る姉弟みたいな関係の男。
たとえ襲われたとしても、ナクトなら……イイよ、なあんて言えれるくらいの気持ちを抱いてる相手。

生氣の無い顔で立つ友人と自分の胸で泣く女性に対して、どこか疎外感と歯痒さを羽純は感じていた。

「！」めんなさい、急に取り乱したりして」

「いいって、でもよかつたら話してくれないかな？」

「俺らじゃ力になれないかも知れないけど、話してマニーさんの気持ちが楽になるんなら」

「なあくうとお～ーー！」

「えつー！ちよつー！なんで怒るんだよ！？」

羽純が用意したお湯に付けられたタオルで顔を拭きつつあるナクトは、恐ろしい剣幕の羽純に詰め寄られていた。

「いえイイんです、聞いてくれませんか？私とドギのことを……」

長い沈黙。

辺りを見渡しマニーの視線がハ雲のそれと重なった時、少しづつ自分の事を話し始めた。

彼女はもともとある商家の一人娘で、両親に愛された普通の子だった。

ただ同年代の中で際立つた容姿を持っている事を除けば。

そのため半年前、暴力団のリーダーとして幅を利かせていたドギに目を付けられ、そこから彼女の人生は大きく狂ってしまった。

一人で母親の誕生日の買い物に出かけたその帰り道、マニーは襲われた。

気が付くと彼女はドギのアジトに居た。

そこからは彼女の意志は無くなり無理やりに純潔を散らされてしまつたという訳だ。

彼女もまたハ雲と同じく自ら望んでパートナーになつた訳ではない。しかしここで少しばかりハ雲とマニーの立場は違つてくる。

もし拒む様な態度を取つた時。

その時八雲は無理やりその事柄を行わされる。だがそもそも要求される事柄が非道とはかけ離れているのだ。

飯を作れ、洗濯しろ、掃除しろ、何か買ってこい、道具の整理してろ。

せいせい八雲がこの三田アリューマに要求されたのはその程度である。

それは侍女か、メイドかその辺の下働きと変わらない。

衣食住はまともなものを与えれているのだから、寧ろ高待遇といえるのではないか。

だがマニーの場合、口に出すのもほんかられるような行為を無理やりに行われる。

性的であつたり、暴力的であつたり。

その日のドギの気分によって様々ではあるが、それはおおみそ非道と呼べる行為だ。

ドギはさらにもマニーだけではなく彼女の友人や両親にも暴力を振るつた。

だからこそ、優しい心というものを持っていた彼女はドギに従つしかなかつた。

八雲の場合、彼女には頼れるものが今リューマしかいない、だからこそリューマに従つしかないのだ。

両親の行方は分からぬ。

気が付けばこの鬪神都市に居たのだから。

生きているのか、死んでいるのか。
それさえも定かではない。

マーはこれまで人形のようにドギに付き従つて来た。
だがハ雲は首輪は付けられているものの、人としてコローマに付き
従つて来た。

ハ雲とマー、二人の立場は似ていようが酷くかけ離れたものであ
つた。

話を終えるとマーはハ雲の瞳を見つめた。

泳ぐ緋色の光。

けれどその奥底、そのどこかに淀まない流れを彼女は見つけた。

ナクトはドギに勝ち、闘神都市の管理下にマーを置くと息巻いてい
る。

その言葉はとても甘美で、マーの乾いた心に少しづつ水を注ぎ込んでいく。

だがそれよりも、マーはハ雲へと意識を向けていた。

「……ハ雲さん、羨ましいです」

「え?」

「私は攫われるなら……あの人に……攫われたかった」

一夜明け、ナクトと羽純は連れだつて通りを歩いていた。

昨日のマーを思い、闘神ビジョンを見て羽純を想い、一匂氣合を入れた彼である。

ダンジョンに、工房へ、一人はそれぞれの目的地を田指していくた。

そんなところ、一組の見知った男女がホテルから出でてくるのを田撃した。

女性は闘神都市にやつて来た当口パートナーを頼んだお姉さん。

「ん? ほりすじやねえか。

あのあとちゃんと探索出来たか?」

男は先日彼が世話になつた、昨日闘神大会一回戦を突破したボーダー・ガロアその人だつた。

「うん、でも」めん。

同じ出場者だつてのこあんなこと頼んじやつて

「いいじじよ、じつせひだつたしな

ナクトのタメ口にも文句一つ言わず余裕を持って話すボーダー。

質実剛健な、器の広い男なのだろう。

「あ、私羽純・フラメルって言います。

お忙しいところをこの前はありがとうございました」

「羽純……言動が母親みたいになつてゐるぞ」

「えーーーっ！？ボーダーさん失礼を……」

突如として始まつた二人の夫婦漫才にボーダーは豪快に吹き出す。
それを聞いてまた漫才を始める一人。

その流れを断ち切つたのは一人の男の登場だつた。

「いや～旦那、この前は悪かつたですわ」

「あ～、あん時の酔つ払いか。

今日は飲んでねえみてえだな

「うえ、や～なやつ」

現れたのは苦い顔のリューマ。

腰に日本刀と小袋をぶら下げて、編み傘片手に弄びながら草履を履いての「」登場だ。

彼の登場にナクトの視線は硬くなり、羽純の視線は辺りをさまよう。そんなものお構いなしなリューマはボーダーと、隣のお姉さんを交互に見比べ親父臭い笑みで彼の顔を迎えた。

「昨晩は御楽しみだつたよ'うで……。

いや~これくらいこ色氣のあるお姉さんなら羨ましさしか生まれんですわ~」

「ケツ、茶化すなや」

どうやらお姉さんはボーダーの、昨日戦つた相手のパートナーだつたようだ。

お姉さんの職業は『パートナー姫』、お金を出すことで出場者のパートナーを務める役ビビリである。

「ふふつ、昨日は」の人に好きにされちゃつたわ

「……」

色氣たつぱり零す吐息に羽純とナクトの顔は朱に染まる。

「楽な仕事だつたわ、思ひのほか紳士だつたし」

「紳士? それは聞き捨てならぬえな」

「やあね、おかしいぐらこの変態じゃなかつたつてこと」

「じゃあどうですか! 獣な俺との交尾は! ?

曰那! 俺と穴兄弟になりませんか! ?

「金はお前で出して、交渉もお前でやるんなら好きにしな。

まあ、出来るもんなら個人的には「」免願いたいが

「そりやねえっすよ～」

頃垂れるコートの肩をお姉さんの手が優しく撫でる。

「いいわよ、一晩10000円のロードなり

「まさかの追撃！俺のワイヤーもつば口よーーー」

自分たちの居る所とはやはりかけ離れた会話。
ナクトと羽純は真っ赤な顔を見られまいと俯いた。

「じゃ、今度は仕事抜きで会こましょ。

貴方も……一回戦ぐらこ勝てたらうね

ボーダーに、加えてリューマにも頬に軽く口づけをすると陽気な顔
でお姉さんは去つて行つた。

残されたリューマは緩んだ顔を見せて、グッと拳を握つている。

「お疲れ様」

彼女が見えなくなつて、少しばかり四人連れ立つて歩いたところで、
優しいねぎらいづやつな声がかかつた。

「ん？ああレイチエルか」

「一回戦突破おめでとう、ボーダー」

「よせよ、一回戦突破如きでそんなもん言われひまつたらケツが痒くなつちまつぜ」

「つふふつ

長い桃色の髪に優しげな容貌。豊満な胸とくびれた腰が少し、強調されるよつた服を纏つた綺麗なお姉さんがそこに立つていた。

「スンゲエ美人……ガキンチョもそつ思つよなー!?

「お、おう、確かに綺麗……つてガキじやねえー!..

「ちょっと、ナクトもリュームさんも面と向かつてそんな言い方失礼でしょー!..

「あら、いいのよ。

お世辞でもうれしいわ

年上の余裕か、あらあらと母性的な笑みで三人を包む。

「イヤイヤお世辞なんかじや

「そうです、とってもお綺麗だし素敵です」

「是非とも俺の滾る刀を納めさせてくださいーーー!..

「調子に乗んなつ！」

リューマの腹めがけて突き出された拳を彼はガツチリと受け止める。そしてギリと力を込めて、ケタケタと笑いだした。

「準決勝だけ、そこで俺が勝つておいしく頂いちまいますわ旦那。
ま、旦那がそこまで勝てるかどうかは全くわからねェですけどね
」

「それはこっちのセリフだ。

精々一回戦突破は出来るよつこな

額と額をこすりつけ、空いた手でガスガスとお互いを殴り合つ。双方顔は強張つてゐるが口だけは開いて、はははつと笑いあつてゐるのも傍から見れば不気味だ。

「ふふつ、ボーダー」

「……シチ、俺とした事がガキ相手にムキになつちまつとはな

ゆつくりと互いの身体を離して、ボーダーは深い溜め息をついた。どうもリューマといふと自分のペースを崩される。
だがそれはなぜか不快な気持ではなく、どこか自分に心地よさを感じさせる。

「変なヤツだよ、お前はさ」

「照れるぜ！」

「褒めてねえよ、このクソガキ」

八戦目（後書き）

感情表現はおつかなびっくり

九戦目（前書き）

今回のコレってR15でいいんでしょか？

九戦目

「ほうづ、何でもかんでも頼つてんじゃねえぞ」

「ケケケ、怒られてやんの」

「リュー、マくん、そんな風に言つちやダメよ」

「こは闘神都市にあるトトカルチヨ会場。

「ロシアムで行われる大会の勝者を予測し、一攫千金を得よつとい

う場である。

今日も今日とてその券が配られている。

第一、第二試合と終わり栄光を得たもの、屈辱を得たものそれぞれだ。

今よく出回つているのは今日の第三、第四試合。

そして明日行われるリューマ、ナクト、そしてレメディアの試合だ。

さてはてその配当は、注田度はどうなつてゐるか。

といつても殆んどの人々の注田はレメディアの出場する第一試合に集まつてゐる。

それはそうだ。

なんたつて滅多に人前に姿を現さないカラーの一人がこのよだな闘神大会に出場するのだから。

はつきり言えばリューマとナクトの試合になんてこれっぽつちも注田は集まつていないので。

第一試合はこの街に来てから予選以外で全く人前に姿を現してないカラーラーの試合。

第一試合は子供と田舎の暴れん坊の試合。

第三試合は大通りでゲロを吐くのを目撃された剣士と鋼鉄の巨漢の試合。

誰がどう見ても注目は第一試合。

そして賭けるならばカラーラー、暴れん坊、鋼鉄の巨漢ではなからうか。

そんなこんなでリューマの配当は7倍、ナクトの配当は6倍と極めて高い結果となつた。

ひとまずそれは置いといて、今ナクトはトトカルチョ会場に面する三人に会つていた。

何でもゴミだらけの迷宮、『清掃週間』で凄まじく重いゴミ袋が行く手を阻んでいるらしいのだ。

元来どのような迷宮でも清潔なのが基本である。

モンスターや人の死骸も無ければ、使い捨てたものや食べカスなど雑多なゴミも無い。

それは迷宮に存在する女の子モンスター、『メイドさん』のおかげなのだ。

メイドさんは他人の世話をするのが大好きな家庭的なタイプの女の子モンスターである。

迷宮などはメイドさんが一人いると清潔が保たれる。なぜなら迷宮が綺麗なのは常に彼女らが清掃してくれるからだ。

今回のナクトが潜った『清掃週間』のようだらけの迷宮はおららくメイドさんがいないのであります。ちなみに、妙な趣味でもあるのか倒される時は何故か嬉しそうである。

「ザマニア」

「うむせえ！ だつたらアンタだつて連れんだろ？ が！ 」

てか「」に埋もれる鬪神つてマジウケルんですけどオ（ ）「

「ほうすもやめろ、お前も挑発すんな」

飛びかかるうとするナクトを肩を掴み動きを止めるボーダー。ニヤニヤいやらしい顔のリコーマにナクトはガルルと牙をむく。

「仲良しね、二人とも

「誰が…………つて照れてんじやねえ！！！」

アツハツハと頭をかくリューマにまだナクトは鼻息荒い。

完全にナクトが遊ばれている状況だからよ」と自尊心の強そうな子
だし、と桃髪の女性は自重する。

彼女の名前は『レイチエル・ママーラ』。

ボーダーのパートナーであり彼の幼馴染もある。

正確に言えばレイチエルの兄とボーダーが幼馴染であり、幼いころから一人を追いかけていたのが彼女だ。

昔から年下のくせに世話好きの彼女。

そんなレイチエルは彼女の兄、『スコッティ・ママーラ』が彼女とボーダーを庇い亡くなり、ボーダーに口説かれた時から彼の女となつたのだ。

昔はそこやかしこの女性に手を出していたボーダーを受け入れれるよつな懐の広さを持つたレイチエル。

長年の付き合いからか、ボーダーとの間には夫婦のよつな雰囲気が漂つてている。

また彼が対戦相手のパートナーを抱くことも『勝者の権利』として認める理解ある女性でもある。

「てかなんでアンタが一人いるんだよ！？」

「俺が誰といったってンなもん自由だろ？が、お前は俺の父さんか」

よほどナクトはリューマのことが嫌いなのだろう。

昨日完膚無きまでに叩きつぶされたというのに、おもづくそ突つかつている。

脳筋か、鳥頭か、まあ彼に思慮という言葉は似合わないよつだ。

「まづ、お前はもつと冷静さつてもんを持った方がいいな」

「だけどアイツは八雲さんを！？」

「……ああ、リューマくんの言つてたパートナーの子ね」

「だつたら知つてるだろ!! コイツは八雲さんに……つてなんで笑つてんだ!?」

「ふふふつ、一人とも若いなあつて思つてね」

詰め寄るナクトを笑顔でかわせるレイチエルは歳の功からか、踏んだ場数からか。

いまいちわかつてない様子のボーダーを一目クスリと笑窪を作る。

「毎日ハッスルつてことですね、わかります」

「テメエッ!!」

「だからしつこつて言つてんだよ」

リューマは視線を送つて来たナクトに相槌を打つ。

ボーダーの腕の中、目の前で吠えるナクトを舌を出して挑発した彼は、そのまま手を振りトトカルチヨ会場外へと歩いて行つた。

あの後一人と別れたナクトは憤りを納められないでいた。

「なんであんなヤツがボーダーさんたちと仲良くなってるんだよ」

自分の目から見れば完全な悪。

そんなリューマが同じ大会出場者として憧れを抱いていたボーダーの隣に居たという事実。

彼を苛立たせるには十分すぎる要素であった。

怒りか、それとも嫉妬か。

恐らくそれらが両方とも混じり合った感情を胸に抱きつつ、歩くナクトの足取りは重い。

「絶対決勝でブツ倒してやる」

トーナメント上、そして私闘禁止というルール上、決勝戦でしかリューマと闘うこととは出来ない。

元々ここのは優勝するために来た訳であるし。そう思つと重い足取りも徐々に軽くなつていぐ。

リューマを地面に叩きつけ、ハ雲を救いだし、そして……。

「つて何考えてんだ！確かにハ雲さんは美人だけどーーー！」

頭に打ち入る妄想をブンブン外に飛ばし、ナクトは歩を速める。

「……スタイルは羽純よりいいって言つてたし……肌も綺麗だよな……
儂げな雰囲気も……」

否、思春期の彼には全くと言つていいほど捨てきれていなかつた。

トトカルチョ会場を出る途中、ざわめきが彼の耳へと入りこむ。ふとその音源を見れば、会場の片隅にいつもとは違う人だかりが出来ていた。

イベントでもあるのか、そんな軽い気持ちでナクトは人だかりへと近付いて行く。

「……おい、またやつてるぜ」

「闘神クランク様の、いつものご乱行だる。

いつもは闘神区画の中で堕落した生活を送つてゐるくせによ……同じ闘神でもボルト様とは大違ひだ」

「ああ、バニーの子も可哀想に」

バニーの子、その言葉でナクトの脳裏に一人の女性が思い浮かんだ。『夢色・バニー』というなトトカルチョ会場司会のおねーさん。明るい笑顔を振りまいてくれた、優しく美しい容貌の女性だ。

そのバニーは今、公衆の面前で裸に剥かれ、形の良い乳房をさらしている。

単純に言えば公開レイプ。

浅黒い肌の、モヒカン頭の酒臭い中年の男が彼女を強姦しているのだ。

彼の名前は『クランク』、そしてその称号は闘神。ナクトが目指す結果がそこにはいた。

突如としてトトカルチョ会場に現れたクランクは、彼女を見るなり

いきなり押し倒し、事に及んだ。

痛みが走るのか、苦悶の表情を浮かべるパーティ。

「どうだい、おじさんのアカメフルトを味わえるなんて最高だろ？」

下種じみた笑みを浮かべながら、いやいや首を振るパーティにクラシクはご機嫌だ。

ちなみにアカメフルトとは「トトカルチヨ会場で販売されるケチャップ付きの赤長いヤツ」。

男子モンスターの一体である『アカメ』から作られる『』の名物だ。

ちなみにアカメは赤い指ぬきに一つ田と凶暴そう大口が付いた様な生き物。

『火爆破』と呼ばれる炎属性の広範囲魔法を操るため、数を持つて現れれば熟練の冒険者パーティーでも苦戦することがある、結構危ないヤツなのだ。

彼女の心は嫌がっていながらもクラシクの言われるがままにパーティは身体を、腕を、指を動かす。

『この街で闘神は絶対』、ここに住むものならば誰もが知っている絶対尊徳の掟。

襲われてしまつても、被害者は加害者に従わなければならぬのだ。周囲の人々も、哀れな彼女を前にクラシクを止めよつともせず、息を潜めて田の前の光景を静かに窺う。

誰しもが自分の身に不幸の降りかかる事を恐れ、嫌がるのは当然のこと。

だからこそ、人々はただ傍観をする。

そして、事が終わるのを、嵐が過ぎ去るのをじっと待つている。終わり過ぎ去れば、大丈夫なんてパーティに声をかけてクラシックの悪口を並べたてるのだろう。

だが内心皆が「いつ思つているはずだ。

『嗚呼、自分じゃなくつて良かった』と。

「さあて、パーティちゃん今このどうなつているか教えてあげなさい」

「…………あ…………う…………」

「言わないならむしヒビライことしきやうよ」

刹那、頭に血がのぼったナクトは走り出す。

「くそつ、やめさせないと……」

だがその前に大きな影が立ち塞がつた。

「待ちな、ぼづか」

「ボーダーさん！ なんで邪魔するんだよーー？」

「この街で、闘神は絶対だ。

「逆らひことは許されない」

重々しい彼の声がナクトの中を震わせる。

確かにそんなルールが。

そう思い到るも沸き上がった感情を抑えつけた事など出来はしなかつた。

「でもひ、『んな』と見過しちわけにはいかないじゃないか……」

「何度も言わせらるな、この街で闘神は絶対なんだ。

「じとの是非など問題ではない」

「だけど……ひー。」

「なら、闘神に闘いを挑むか？

「じとんゲスなヤツだが、それでも一度は頂点を極めた男だぜ」

冷や水を掛けられたかのように、ナクトの動きは止まる。

「ギにすら、勝てなかつた自分。

そんな自分が果たして田の前の闘神相手に闘つて、勝てるといつのか。

それでも、といつ思いが沸き上がりナクトを焦がす。

「気持ちはわかるが今は耐えろ、パートナーの嬢ちゃんの為にな

そしてすぐさま鎮火された。

闘神に剣を向ければ自分だけではなくパートナーである羽純にもきつい処罰が下される。

そのようなこと、火を見るよりも明らかだった。

「へえう……」

結局呻き、この光景をただ見ていいことしかできない自分。
そんな現状にナクトは歯がみをする。

パシャツ

粘着質な水音ばかり響いていた先ほど。
しかし今この時までとは違った音がナクトとボーダーの耳に飛び込んで来た。

人垣に囲まれていたのは凌辱されていたパニーと凌辱していたクランクの二人。
そこに新たな三人目が姿を見せていた。

「むほつ、ナイスアングル！」

いや～いい仕事しますねエ

「……誰かな？おじさん汗臭い男に興味は無いんだけどなあ

「俺つスか？俺は通りすがりのカメラ好きでさア。

いい感じのハメ撮り現場を見つけちまつたんでついつい首を突っ込んででしまいましたわ

「ハメ撮り？」

「そーなんすよー。

俺は写真撮らせてもらひただけで十分なんで……あ、カメラは差し上げますよ」

「むふふつ、それもイイかもしれないねえ」

「ゲヘヘ、もうっしょ」

顔を近付けてゲヘゲヘといやらしい笑みを浮かべるクランク。再び動き出す彼の周りを回りながら、一心不乱にシャッターを切るのは和服姿の丁鬚男。

「アイツ……何考えてるんだよーーー」

先ほどまで自分と一緒に居たリューマその人だつた。

「こんな感じかなー」

「実にナイス！イイ感じですわ」

グチャグチャと、リューマに見せつけるように動くクランク。必然的に囲むものを意識するよつた動きもリューマへと集められていく。

「アイツ……ここまでのバカタレか」

「つーーー」

「ど」「行く気だ」

「決まってるだろ！」

「アイツをぶん殴るために決まってるじゃんか！？」

予想どおりのナクトの言葉。

「ヤリと釣り上げていた口元をキュウッと結び、ボーダーは腕を開く。

「許さん」

「へ？」

「アイツを……リューマを止める気なら俺が許さんって言つたんだ」

ぼしづ扱いだつた自分とは違ひ名前を呼ばれるリューマ。
自分と、下劣な存在であるはずのリューマにボーダーの中ではそれ
ほどまでの違いがある。

そんなときつけられた事実に、ナクトはじばじ動くことが出来なか
つた。

「おおつ、いくよ～」

「ナイスな終わりでー！」

パニーの身体に降りかかった白濁液。

それを見せつけるようにレンズの前へと運び、ふいーっと満足した
かのようなクランクは息子を服の中へと隠した。

「じゅうじゅうおもてなしの心が、おもてなしの心です。

あ、おじさんからの粋な計らいとしてパニーちゃん、好きにしちゃつていいからねえ。

「じゃあ帰つてクソして楽しむとしますか、ぐはははははははつ」
そう言うとカメラを小脇に抱えたクランク。

もはやリューマに、そしてパニーにも一瞥もくれず、下品な笑いだけ残してその場から立ち去った。

「ひやつほーい、美人さんいつただきイー！」

呼応するようにクランクの体液で汚れたパニイを抱えたリューマは近くの建物めがけてすっ飛んで行つた。

中に居た女の子たちを外に押し出して、立てこもつた中は女子更衣室を兼任するバーネーたちの控え室。

ヒーリング

瞬間群衆は爆発した。

「ふざけんなアーーー！」

「闘神の腰巾着が！！」

「いやーーっ、私のカメラどうしてくれんのよーー」

「ゲス！下種！テメエなんぞ最低だ！！」

更衣室を囲み騒ぎ立てる人々。

乗り込もうと行動を起こす者もいた。

しかし不審者対策万全なバーニーたちの更衣室。

盗撮や、ちょっとやそっとの冒険者崩れの暴漢たちにも安心安全の設計だ。

頭に血の登つた一般市民如きではその防壁を破れる訳も無い。

「イヤアアアアッ！！」

周囲に木霊するパーティの叫び。

それ以降、彼女の声は全く聞こえなかった。

結局一時間後、妙につやつやした満足げな顔のリューマが扉を開けて外に姿を現した。

彼を迎えたのは石と、「ミミ」と、暴言の嵐。

そんな彼らにザマア~~~~~と一言、リューマは睨み付ける眼光で人々を退かせ、悠々と歩き去つて行った。

九戦目（後書き）

ウチの男主人公はこんな感じ、ウチの原作主人公はこんな感じ

十戦目（前書き）

なんとなく、原作主人公にイライラが溜まりだした今日この頃

「私のカメラ、ビ———してくれるのよ———」

アレが無くつてどうやって私に記事書かつて書いの——? 収入源が空っぽになつちやつじやない——」

「ンな」と囁つたつて見てただろうが。

鬪神様に盗られちやつたんですう、俺にまだひとつもなかつたんですう

「そんな事言おうがアンタが先に私のカメラ盗つてつたんでしょうがツ——!」

ヤイヤイと躊躇立てる薄紫色の髪の少女にリューマは適当な相槌を返す。

トトカルチョ会場を後にし、カテナイトへと歩みを進めたリューマであるがその後を追いかけるように彼女が付いて來たのだ。

「あの……お茶です」

「あ、ありがと」

湯呑みを八雲から受け取り喉を鳴らす少女は『シャーリー・山本』。自称『愛と眞実と正義のリポーター』な新米報道れぽーたーである。

「てかアンタ明日の試合の……ああ名前忘れた!」

なんでアンタみたいな話題性のかけらも無いヤツに……ってゲロ

吐き劍士！！」

「吐いてやるうかテメHの顔に……」

「そんなこと平氣で言えるなんて男の子としてどうなのよ……

このクズ！下劣！ノータリン！だから童貞……じゃあないわね

機関銃のように言葉を並べたてるシャーリー。

幾分か言いたいことをぶちまけてスッキリしたのか、立ち上がりついた腰をおろしてリューマを睨む。

クラシックの乱行にて彼がハメ撮りに使用したカメラ。

実はこれ、彼女のものだったのだ。

明日の出場選手……よね？と曖昧な記憶を頼りにリューマに取材をしていたシャーリー。

一回戦敗退組みだらうけど、なんて失礼極まりない言葉で始められた彼女の取材途中、リューマは彼女のカメラに興味を示した。

首からかけた紐を外し、血漫げに講釈を並べるシャーリーの隙をつきカツパライ彼はすっ飛んでった。

それで先ほどの出来」と。

もちろんクラシックに相手に返してください、なんて言えるわけも無く。

盗つたこいつが悪い！と極めて平凡な結論に至ったのだ。

「へいへい悪いやんしたー、どうかこのとーり許してやだぞーー

「棒読みで何言つてんのよー。」

袖口を掴み上げやんのかコルアとでも言いたげなシャーリー。掴む腕を鬱陶しげにとつ、よいしょっと彼女ごと抱え上げて自分の横に。

クイクイと顎を動かす。

その動作にちよこんとリューマの前に腰を下ろしたハ雲は、怨念でも出ていそうなシャーリーの視線をビクビクと見つめる。

「とつあえずカメラは弁償してやつからだーつてやる

「なんなのその態度！

だから一回戦敗退組みの、アンタみたいな泥臭い男はダメダメなのよーー！」

唾を撒き散らし、ぺたぺたリューマの頬に付くが気にしない。そんなことよりも、目の前のハ雲の言葉がリューマには今欲しかったのだ。

「で、しっかり働いて來たか？」

「あ……えと……頑張ります」

「イヤイヤ今頑張られても困るんですけどー」

「すつ、すいません……」

顔を赤く、小さくなるハ雲。

シャーリーの罵詈雑言が気になるが、強い視線に頭の中を整理していく。

「……今日の一回戦ですけど……」

朝食を取り、部屋の掃除とリューマの準備を済ませた八雲は重い気持ちと軽い気持ちが同居する心情で、のろのろと歩みを進めていた。

重い気持ちは無論昨日の出来事。

自分と同じように攫われたマリーの言葉がハ雲の中に大きく鎮座していたから。

『あの人攫われたかった』。

自分と同じような立場の彼女に、そんな言葉を投げかけられるなんて思いもしてなかつたから。

だつたら自分はどうな言葉を予想していたのだろうか？

大変だね、辛いよね、そんな風に同調するような言葉を予想していたのか。

最低だよね、早く負ければ一日我慢すれば自由になれるのに、そんな風に攫つた人間をけなすような言葉を予測していたのか。美味しいもの食べさせてくれた、意外にイイ人だよね、そんな風に

攫つた人間のイイところを羅列するような言葉を予測していたのか。

恐らくどれもが正解で、どれもが不正解だろつ。

信じられないかもしだいが、ハ雲は今の現状に満足し始めている。勿論自分の純潔を奪われたのは酷く悲しいし、攫つて来たリューマに全く恨みが無いと言えば嘘になる。

だが彼女の出身はJappa。

眼を付けられて、すぐさまその日のうちに逆らうことすら出来ず輿入れ、という現状が實際にある国なのだ。

事実、同じ村の少女が小早川に仕える武家の息子に見染められ、数日後には美しい純白の着物を纏い、御輿に乗っているのを見た事もある。

それはそういうモノ、そして家族の為にも名誉なこと。

そんな認識が、ハ雲の中には植え付けられているからだ。

と考えれば畠に寝れて、恐らくJappaに居ては一生見られ無いものを見て、食べられないものを食べている今の生活。

コレは酷く恵まれた生活ではなかろうか。

父母の事を思い出そうとすると、頭が酷く痛くなる。

二人が、そして兄がどうしているかというのは気になる事ではあるが、彼女の憂いはそれくらいのモノ。

後は実質的な自分の感情の問題だ。

段々と、段々と、ハ雲はリューマに心とうモノを開き始めている

のだ。

まだ四日ほどしか経っていないが濃密な時間をハ雲は過ごしている。ただ春は畑を耕し、夏は水を汲み草を抜き、秋は稻を刈り取り、冬は草履や籠を編む。

兄がいなくなつて、長者様の屋敷や山や川に行く機会もほとんどなくなり、単調で退屈な生活となつていた。

それをリューマは攫うといつ、倫理的にはおかしい方法ではあるが吹き飛ばしたのだ。

見るものすべてが目新しく輝いている毎日。引っ込み思案だからなア、と兄に出来るかどうか心配されていた友達というモノも出来た。

必然的に会話がいるため初対面相手にも、氣後れはするが話せるようになつて来た。

文字の読み取りが必要で、知識というモノが頭に入つて行くのを実感できる。

「……幸せなんだな、私つて」

怒鳴られたり、齧されたり、馬鹿にされたりすることはよくある。だがここに来て、それ以上の幸せがハ雲に降りかかるつて来てくる。

今日迷宮にリューマが出かける時、いつもの下駄ではなく草履を履いていたのを見て、涙すらこぼしそうになつたのを覚えている。

大量で、手を伸ばしたくなる飴と厳しくハ雲を穿つ鞭。

この適度なバランスがリューマへの隸属、という形で彼女の言動を

構成しつつあるのだ。

「……でも、マニーさんは……」

そう考えるとマニーと、自分との間にひどく隔たりを感じてしまう。同じで、でも果てしなく違う二人。

リューマや羽純を思うと軽くなる気持ちに、手放しでぱんざーいと喜べないのはこのためだ。

「私には……何も出来ない」

あの人に攫われたかった、あの人に攫われたかった、あの人に攫われたかった、。

マニーの言葉がハ雲の頭をグルグル回る。

あの人はあの人、私は私、つまり私勝ち組k t k r。

そんな風に割り切られたらどれだけ楽だろうか。

イイ意味でも悪い意味でも、ハ雲は人に気を遣いすぎる一面がある。気が付く彼女はリューマにとつてはイイ掘り出し物で、非常に重宝しているのは間違いない。

朝起きれば朝食はいつでも食べれる準備が出来ており、迷宮に潜る

準備だつもちろん、世色癌の古い新しいまで選別する始末だ。

汚れた和服は気分も爽快になるほどに、買って来た洗濯板で綺麗にしててくれる。

下駄も鼻緒の具合を確かめ、くついた土なんかも取り払う。

部屋には「ゴミ一つなく、聞いた話ではマルデに変わり一人の部屋は

ハ雲が掃除するといったそつだ。

リコーカに聞き弁当を持って送り出し、帰ってきたら夕食の準備はしつかり完了済み。

どこの娘の良妻！？とでも言ひスペックをハ雲は誇っているのだ。
ちなみにコレは彼女の母親の訓練の賜物で、そんなわけで父母は年中のようにアシアツである。

「……出来ない……私には……何も」

マーを見てしまい、マーの現状を知ってしまう、だからこそハ雲は心を痛める。

偽善なのかもしれない、自分とは違う立場だからこんなこと思えるのかもしない。

昨日の羽純と同じような、でも立ち位置の違ったハ雲が生み出す感情。

それは茨のように鋭い刺を持ち、ハ雲の身体に絡まり絞め付ける。

「……」めんなさこつ

思わず口に出してしまった言葉にハ雲は口を覆う。

同情してしまったら、さらにマーが小さく、ダメな存在になってしまふよくな気がして。

他の誰は良くても、自分だけは同情してはいけないよくな気がして。

「頑張らなきゃいけないんだ……私は私で……、マーさんの為じやなくて私の為に」

心に張った糸を一層強く、彼女は前を向いた。

石段を登り、受付で「ひら」を見つけたシユリが手を振る。

「ハ雲さん、リューマさんから聞いてますよ」

「あのつ、私何をすればいいのか聞いてないんですけど……」

「あら、サプライズが好きなんですかね？」

「そ、そ、そ、そ、？」

「でもでも、きっとハ雲さんは喜んでいいと思いますよ！」

「なんたつて大会の全試合を生で見る」とじが出来るんですから」

「……注意すんのはタイガージョーハヤツヒ宝光つてとかね」

ハ雲から云えられた情報を元に、リューマはムムムと唸つてみる。
彼が彼女に与えた仕事、それは大会を見学して情報を手に入れてくれるのことだった。

実はリューマ、昨日までは酒場『ハーフ浪漫』にでも雇つてもらえ

るようにならねばならぬつもりであった。

だが大会一日目の様子を放映する闘神ダイジェストを見て愕然。ちょっとお粗末すぎねエか、とも思える放送に急遽仕事内容を変更したのだ。

闘神都市にある高級宿『アルカトラズ』に泊れるほどの資金を実は持つてゐるリユーマ。

なぜカテナイトに泊つたのかといつたところは不明であるが、とりあえずお金に余裕はあるのだ。

そんなわけで朝一で『ロシアンのシユリの下に』。全試合を観戦することのできる高級チケットを一枚、現金叩きつけて買ったのだった。

「その……それで宝光つて人、あの編み傘の人で……」

「なになにつ、貴方たち宝光選手と知り合いなの！？」

だつたらアポ取つて！あの選手もレメデイア選手と一緒に全然宿から出て来ないのよ！――

「……あぽ？」

「忍び込もうと思つたらあの眼帯女に止められて放り出されるし……！」

それだつたらこのシャーリー・山本、広い心で少しだけあなたを許してあげるかも……つて無視すんな――」

編み傘に手を伸ばし、その裏を少し窺う。

「まあ何にせよ、もう一回会つてみるわやね」か。

「かお前まだ居たの、宿無しだとか？」

「誰のせいだと思つてんの……」

再び鼻息荒く、ガトリング銃のように薬葉を乱射するシャーリー。いつもなら、広場の喧騒にも耳を澄ませてしまつてしまつてしまうハ雲であるが、今日ばかりは少し違つていた。

シユリに対戦相手は聞いた、ゲラーミンとこの前の大男らしい。

『出場受付に現れた時はびっくりしましたよ。

だつて床を揺らして歩み寄つてくる青銅色の巨体ですからねー。

その威容からゲラーミン選手は注目を集めているみたいですが、知られている前歴は無じつてのも怖いですし。

『コーエさん、どれくらい強いのかわかりませんけど、ハ雲さんも覚悟は決めとくべきですよ』

シユリの言葉を思い出すと、どうも不安になる。

無償労働から助けてくれるだけのお金は持つてゐるのかもしけないが、助けてくれるのかどうかわからない。

そして、自分はあの男に好きなように弄ばれるのかもしれない。

そう思つと胸が寒くなる。

「……ツー

怖い、怖いのだ。

リューマに攫われ、よつやく少しだけ、夜寝るときこ安らげるよつになりつつあった。

だが負ければまた訳のわからぬところに連れていかれるのかもしれない。

そしてそこは、こことは比べ物にならないよつな劣悪な環境なのかもしれない。

それ以前に、彼女も他の勝者が行っているのを目撃した公開レイプ。

いたたまれず、その場にとどまる事が出来なくて、逃げ出したものの行為。

自分の身に、自分の体に、刻まれるかもしれない。

「あの……ちよっと、大丈夫?

顔真っ青じゃない!」

「あ、いえ……その……私は……私は、……」

「大丈夫なんて言つ氣?

そんなもん絶対嘘に決まってるじゃない!」

一般的な良識はあるらしく、シャーリーはハ雲の肩を撫でた。そしてどうにも荒い呼吸が収まらないハ雲に、縋るよつな手つきをリューマに向けた。

「んぐんぐ……ふはア、やつぱーさあに酒はイイイね」

「つてなにやつてんのよ——つ！」

「まあまあ、とりあえずお前も飲め」

「つちゅつーぼー」……ぐびつ、……ふぶつ

酒瓶一本、口をシャーリーの口に突っ込み入れて、逆さに持ち上げる。

当然凄まじいまでの勢いで酒が流れ込む訳で、鼻からむせ返らせる訳にもいかず一心不乱に喉を鳴らす。

そして空いた手でグイとハ雲の肩を掴み引き寄せると、コップ一杯のみなみと注がれていたそれをハ雲の口に押し込んだ。

「……あゅう……」

真っ白な肌を真っ赤に染めて、グルグル目を回して倒れるハ雲。あはははははつと陽気な声を響かせ、自ら酒瓶片手に喉を鳴らすシヤーリー。

「いやははや酒つてイイもんだねエ

呴いたリューマの言葉は一人に届くことなく、彼はひつそりと自室を後にした。

余談ではあるが、次の日の朝起きたハ雲は痛む頭を押さえながら辺りを見渡す。

そこには数本の空になつた酒瓶と、何故か素っ裸で口に顔を突つ込んだシャーリーが居たそくな。

一人をほつといて出て来たリューマはとつとつ、すっかりと喧嘩の消えた広場に居た。

その真ん中にぼんやりと腰を下ろし、夜空に浮かぶ星を眺めている。

「案外ロマンチストさんなんですね」

「いや、まあ癖みたいなもんだね。」

「ナガサキは今仕事終わりか？」

「だからその呼び方はやめてって言つてるじゃないですか」

「ふくつ、と頬を膨らませるシリ。

その仕草はどことなく子供っぽくて、彼女の年齢を感じさせない。

「やっぱり、明日の試合が不安とか、ハ雲さんが心配とかですか？」

「もう、だったら一緒に寝てあげればよかつたのにー。」

「そりや無理だわ、今もう一人ばかり女が転がり込んでっからなア」

「んま、お盛なんですね～」

ほこほこっとどこかに歩き出したショリー。

ガタンと、魔法自動販売機で缶入りこうじを買って来た彼女はリコーカーへと差し出してその隣に腰を下ろす。

温かいそれは少しだけ、冷えた空氣こまかにビーム。

「お姉さんが悩み相談なら特別に受け付けてあげますよ、同じ年っぽいですか？」

まあぶつつけ帰つても暇だからなんですか？」

「同じ年っぽいって、ンじや結構茹こじやん」

「わかりですか！」

もう嫌ですね、お世辞なんていつたつこれ以上齧つてあげませんよ！」

ビシビシと上機嫌にリコーカーの肩をたたくショリーに不思議そつな顔を作つてみる。

ブハッともせてしまつたのは御愛嬌だ。

「だつて十九だろ？」

「へ？ つてリコーカーもさて一十半ば……つ……」

「まう、後半か……イヤイヤいんじやねーの」

「つちよー。違います、私も二十歳そこそこです……。」

「二十代は全部二十歳そこそこだもんなア」

ケタケタ笑うリコーエマにシユリは白い目線。それを軽々と受け流した彼は立ちあがり、空になつた缶をポイッと虚空に放つた。

「……行くんですか」

「ンな不機嫌そうに言わなくたつてさ。

ま、明日見てな、勝利をお前にプレゼントしてやるぜ……ってか！――」

「クサイ上に古こです、もうちょっと女心を勉強すべきですね」

今度はケケケと悪人チックに笑つたリコーエマ。

立ち上がり、てかてか宿の方へと歩み去つて行つた。

リコーエマが居なくなつて少し、シユリも腰を上げ家路を急ぐ。本来ならこんな風に自分が特定の選手に関わつてはいけない。だが必死なハ雲を見て、そしてどうも受付歴（秘密）年の自分が見ても掴みきれないリコーエマの実力を肌で感じ取つて。

「応援してるのは……ホントかもしませんね」

ポイッと入り口近くにあるゴミ箱に缶を投げ入れ、シユリは夜道を進んでいく。

彼女が投げ入れたその中には、先ほどまでシユリが飲んでいた缶と、同じ種類の缶がもう一つ、ひつそりとその存在を主張していた。

十戦目（後書き）

だがきっと、彼は変わってくれる

RPGってそんなもんですよね

十一 戦田（龍樹寺）

物語は遅々として、ついにこんなもんなんでしょうかね

十一戦目

「ウハツ、スゲエ人だかり……、流石のカラーサンつてところか」

「あつ……待つて下さー」

「トロイねエ」

超満員のコロシアムの中、押し寄せる人波をヒョイヒョイ掻き分け
リューマは進む。

それに遅れまいと必死に追うハ雲。

だがどうも、その足は思うように動いてくれず、群集の流れに乗つ
て彼女は押し飛ばされていく。

自分の前を、横を、後ろを通り過ぎていく人々の顔、顔、顔。
どうも気分が悪くなる。

人混みはもともと苦手、はつきり言つてしまえば人自身あんまり得意ではない。

幼い時は、寧ろ活発で意地つ張りで、なのに引っ込み思案という矛
盾だらけの性格だった。

「つたく、なんか知らんが」こはお前の仕事場だらうが

猫のように襟首をひょいと掴まれ、足が宙に浮く。
着物を掴まれていてるのに首が締まる気配は見せない。

浮かせた身体を力チリと硬直させて、ハ雲はすいすい人混みを越え
てゆく。

一人分が通るわけで、その分だけ幅が広がるわけで、だとうのに見晴らしのいい席を一つ見つけるまで結局彼女は誰かにぶつかる事も無かつた。

「快晴快晴、イイコったイイコった」

「あ……えと、お茶入れておきました」

魔法瓶に入った冷えたジャガ茶をコップに注ぎ、リューマへと差し出す。

一口含み、細かい粒の土が敷き詰められた闘技場を見渡す。

頭の痛む八雲に朝食を作らせたリューマは、まだゲロに頭を突っ込んだシャーリーをほっぽって、口ロシアムへと足を伸ばした。

「わざはて、期待外れじやねホことを祈るゼイ」

龍の「一ナ一から姿を現したのは豹のような毛皮を被つた一人の男、『ナチスパンサー』。

鬼の「一ナ一から姿を現したのは青いマントで全身を隠す女、『レディア・カラー』。

大喝采が辺りを埋め尽くす。

声は振動となつて、コロシアム全体を震わせるかの錯覚を覚える。

マントを脱ぎ捨て、蒼に煌めく剣が、青にたなびく髪が、その美麗な相貌が觀衆の前へと晒された。

瞬間最高潮かと思われた喝采はさらなる飛躍を見せる。

目を白黒させながら辺りの様子に呑まれるハ雲。

流れる黒髪に荒々しく手の平が置かれ、リューマは乗り出すよう、ハ雲は見つめた。

「……こつけを……向いた？」

「……ついでに接觸したいもんだね」

まるで自分たちを方を向いているかのように、視線を投げて移した
レメディア。

周りの観客は、自分の方を向いたと感動し、歓声に更なる色を付ける。

「あのっ……リューマさん」

「さア、俺がンなもんわかるわけねエだろ」

ハ雲の上に置いた手をどけて、席に深々と腰かける。
それを確認したかのように刃がナチスパンサーに向けられ、シユリ
の試合開始の合図とともに、剣と拳が結びあつた。

ナクトの試合も終わって、自分たちの試合開始時間まであと少し。
リューマとハ雲は今、観客席から動けずにいた。

レメディアの試合は彼女と同じく美麗の一言であった。

幾撃も幾撃も、迫る拳を舞踊でも踊っているかの如き足捌きで流し、かわし、その身体に相手を触れさせない。

動きの一つ一つが、彼女の姿と相まって芸術品でも見ているかのようだ、というのがハ雲の感想。

されど繰り出される彼女の剣は凄まじく速く、圧倒的手数を誇つていた。

右を切られたと思えば左に刃が迫り、左を底おうとすれば掬い上げるような剣が迫る。

懐に入り込もうと思つても、流れのようにそれを許さない。

一度だけ、ナチスパンサーがレメディアに密着し、至近距離からの一撃を放とうとした。

だがそれも長い脚で繰り出されたハイキックがその顔を捉え、蒼い刃が彼の喉元に付きつけられていた。

試合はそれで終わり。

リューマに言わせれば殺陣でも見ているかのようだった、とのこと。それほどまでに、試合が作り上げられていたのだ。

逆にナクトとドギの試合はみつともないの一言。

力任せに、技術のぎの字すらない男が振るう斧を、剣を携えた少年が必死に逃げ、受け、避け、そして攻撃する。

腕にしがみ付いてまで、勝ちに固執する姿はそれはそれで美しいの

かもしだい。

だが第一試合とははつきり言つてレベルが違いました。

加えて言えば観客も少なかつた。
レメディア戦の半分というのは言こすぎかもしだいが、けれどその程度。

やはり注目度という点で言えば段違いなのだ。
ナクト勝利という形で終わつたが、盛り上がりに欠ける試合であつたのは確かである。

そして第三試合、リューマとゲラーミンの試合時間まで10分を切る。

「リューマさん……大丈夫ですか？」

「……うあ……もうちょっと優しく、たすつて

観客席に在るのは真つ青な顔をしたリューマと訳も分からぬ今の状況に、とりあえず言われるがままに背中ををするハ雲。
一人の周りには紙コップがいくつか転がり、そこからはアルコールの匂いがブンブン漂つてくる。

あろうことか周りの雰囲気に載せられ酒を飲み、動くのすら辛くなつた出場選手がここにいるのだ。

「でもつ、そのつ、時間が……」

珍しく大きな声で、本当に焦つたように言葉を矢張りに紡いでいく。

ワタワタと必死に手を振り、事の重大さを示そうとするハ雲であるが、聞こえていないのかリューマはほとんど無反応である。

時折うえつ、と口を押さえるのが唯一見られる彼の仕草。それ以外はどよ～んと、黒いオーラを背負い、出来るだけ頭を動かさないよじこしている。

「え～と、どうやら第三試合出場予定のリューマ選手ですが、まだ試合会場に到着していないらしく……」

いたたまれない様子シユリの声が魔法スピーカを通り「ロシアム」に流れ出していく。

それを聞いたリューマは傍らにハ雲を抱え、よみよみと歩みを進める。

「ぱっ、言えよコノヤロー」

「すつ、すいません……」

今田抱えられてぱっかりだ、とまあ場違いな事を考えるハ雲は、やらやら揺れながら観客席の前へ前へと近付いて行く。そして一番前、少しだけ石垣が高く積まれ、観客席と闘技場を隔てるそれによじ登り、引きずり落とされた。

「何やつているんだ君たちは……」

青筋立てた守衛らしき人物が、苛立たしげな顔でそこに立っているではないか。

クドクドと口を酸っぱくし、上から押さえつけるように説教をする

のはこの道十年近いベテラン。

闘神大会のすべてをここで見つめ、その試合を護つて来た勇者である。

「おっさん」

「誰がおっさんだ誰が…」れだから最近の若いもんは……」

「踏み台役ありがとな」

「何をいやぶるつ…！」

肩に手をかけ、よじよじと足をかけたりユーマは抱えたハ雲「」と一緒に飛び上がった。

宙を舞う二人はその隔たりを越えて、闘技場の領空内に入り込み。

「せつ、背中がアアアア…！」

おもつくそ背中から叩きつけられた。

そして思わず離したハ雲がリューマの腹めがけて落ちてくる。

「うう…ううえええええええつ」

当然そうなれば只でさえ最悪だった気分はさらに悪くなり、腹の中での拒絶反応が激しくなり。

結果として大量のゲロを神聖な闘技場に撒き散らすこととなつた。

「え……え」と龍のコーナーから現れましたのはJapanc

「いやって来た侍、リューマ選手……」

とつあえずどうすればよいかわからなかつた進行役のシユリは考へることをやめた。

始めれば何とかなるんじやね、という祈るよつた思いに任せて。

係員がいまだ蹲る青い顔のリューマからハ雲をつれ去つていく。

「リューマさん……」

本当に今日は珍しい日、ハ雲が何度も叫ぶとは。この四日、声を荒げることも、大きな声を出すことも無かつた彼女がリューマに呼び掛ける。

「まあ毎晩でもじてう…… つぶつえ

もう一度腹の中身をリバースする彼に不安しか持てないハ雲は異常なわけではないはずだ。

控室へとハ雲が運ばれたのを見計らひつゝ、司余のシユリはもう一度声を出す。

「鬼のコーナーから姿を現したのは青銅の巨人、経歴不明のゲラー・ミン選手だ……」

そして現れた対戦相手。

高身長なはずのリューマより更に大きく、横幅も広い巨人。のつそりと、ゆつくつと、闘技場を揺らしながら彼は現れた。

伝わる振動に気分を悪くしたリューマは、さりとて一度腹の中身

を吐きだした。

朝食と、昼に食べたおにぎり弁当をすっかり吐き捨てた彼。

膝を付くも日本刀を支えに何とか立ち上がるリューマと、それを見下すようなゲーラーミン。

対峙する二人に観衆のボルテージは高まる。

だがそれは、前に試合とは違った高まり方でだ。

「死に晒せゲロ侍！！」

「ゲラーミン、そいつをぶっ殺せ！！」

「パニーちゃんの仇討だ！！」

恐らく昨日の出来事が広まり、広がり、リューマは怨敵という位置付けになっているようだ。

それはそうだ。

嫌われ者のクラunkに肩入れし、人気者のバーーであるパニーを犯したとなればそんな認識を投げかけられるのも無理はない。

「だーつてり喪男どもがッ！！」

「だーでイ、俺はテメHらのおかずとマジにやつしまつたぜH－－－」

だがしかし、そんなものの歯牙にもかけない。

胃の中身をすっかり吐きだし、空腹はあるが気分の悪さは無くなつたリューマは悪人染みた笑みを張り付け、中指立てて観衆を挑発する。

「死ね！死ね！死ね死ね死ねっ！…！」

「誰かあの黄色い豚をやつつけろ！…！」

「我慢ならねエ！…！」

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤツ、嫉妬乙」

暴徒のように前面に集つた人々は口を荒げ、手当たりしだいにモノを投げ込んでいく。

それをヒラヒラとかわし、鼻の穴に指を突っ込む。

ホジホジと、デカイハナクソを取り出したリューマはピンとそれを弾き。

「ハツ！」

そう鼻で笑つた。

観衆の怒りはさらに立ち上り、天を突こうかというほどの勢いを見せる。

場内騒然となり、壁に手をかけ闘技場に乗り込もうとする人々。

「皆さんつ、落ち着いてください！…！」

シユリの叫びも、守衛の頑張りも、観衆には届かない。

そして今、観客の一人が闘技場に乗り込もうとした正にその時、その男の前に一人の侍が降り立つた。

「やめなさい、闘いを汚す」とはこの宝光が許しません」

純白の侍装束に身を包んだ黒髪の女性。自分の試合以外、外に出ようともしなかつた一人の選手がそこには居た。

観衆は予想外の出来事の言葉を失う。先ほどの喧騒が嘘のように静まり返ったコロシアムに、彼女の声が響いた。

「あなた方がそのような事をせずとも、あの男はここで負け、そしてそのパートナーの少女は汚される……そうではありますか？」

なれば見届けましょう、事の顛末を。

あなた方の思いが強ければ、アレには敗残の将となる以外の運命は残されていないのですから」

今日の第一試合の勝者、レメディアと同じくらいに注目されている彼女の言葉は観衆に伝わり吸い込まれていく。

『強者こそが法』、闘神都市に存在する絶対のルール。

観衆をかき分け、観客席に腰を下ろした彼女。ゲラーミンを、そしてリューマを見つめる宝光にそれ以上ものを言える者はいなかつた。

「ロシアンの熱氣は治まりきっていない。
リューマへの黒い感情も、まだまだ辺りを漂っている。

「ではこれより大会三日目、第三試合を開始しますー。」

だが試合は始まつた。

多くの観衆はリューマの敗北を望んでいる。

「……リューマさん……」

只一人、控室で待つ少女以外は。

最初に動いたのはグラーミン、彼が両手を顔の近くに持つていつた瞬間、ズビィムツ！ という轟音が響き渡る。

彼の瞳が光つたかと思えば、体色と同じ青銅色の光がリューマ目掛けて突き刺さつた。

それは闘技場に敷き詰められた砂粒を遙か高くまで舞い上がり、リューマの居たはずの地面にクレータを作り上げた。

「ビームっ、ビームです！ グラーミン選手眼からビームを放ちましたー！」

砂埃が辺りを埋め尽くし、リューマの姿を消す。
誰しもが終わった、ヤツは死んだ、そう思った時。

「……ハア、腹が減つたねエ」

傲慢不遜なリュ・マの声が聞こえた。

音源はゲラーミンの真正面。

対象を確認した彼は巨木のよしの腕をリューマ目掛けて振り下ろした。

しかしそれは空を切る。

いや、その表現は正しくない。

振り下ろされたるはずの腕は途中でその行動をやめたのだから。受け止められた訳ではなく、彼の巨体を軽く浮かせるほどどの、腹にめり込んだリューマの拳によつて。

「ガフウアツ！？」

痛みと、理解不能な衝撃によって頭の回りがなくなつたゲラーミン。緩やかに崩れ落ち駆ける彼の頭に合わせて放たれた踵落としは、彼の米神を正確に捉え、ゲラーミンの意識をさらに遠くに連れ去る。ダメ押しに叩きつけた地面によつて、彼の動きを完全に停止させ、すべてを終わらせた。

ビクビク身体を震わせる彼の横を悠然と通り去るリューマ。

「俺の勝ち」

捨て去つたその台詞によつて、ロロジアムは再び轟音で埋め尽くされた。

十一戦目（後書き）

結構なところを端折つひやいました

十一 戦田（前書き）

少しずつランクシリーズとクロス

リューマの試合が終わり、一時間がそこら経つた頃、羽純はカテナイ亭の部屋でぼんやりとナクトの帰りを待っていた。

「…………ふう…………」

窓辺に置いた椅子に腰かけ、日が暮れた街を見るともなしに見ながら溜め息をつく。

「…………ナクト、まだかな…………遅い…………なあ…………」

さつきまで、夕日に照らされていた部屋には熱っぽさがあったが、それが急速に落ちていきつつある。

窓の外からかすかに聞こえる不夜城のよつな喧騒が、羽純の思考を麻痺させ、どこかふわふわと夢の中のよつな気分にさせていった。

「シユリさんは、『ナクトさんは今日はお楽しみかもしれませんよ』って言つてたし……お楽しみつて！？」

そこまで考えたあたりで、羽純は下の階で鳴る大きな音を耳にした。

「ちよつと、部屋まで上げるのー

ダメダメダメ、壊れちゃつたら直すのに何んだけかかると思つてるのよー！？」

懇願するようなマルテの声に何事かっーと階段を駆け降りる。

カテナイ亭の一階、その入口付近には同宿で、同じよつに闘神大会に出場したリューマの姿がある。

聞けば圧勝だつたらしく、試合前まで散々彼を非難していた観衆すら魅了し、結果として大盛り上がりで終わつたようだ。

たどり着き、その場を取り巻く野次馬と化した他のお客の姿を見たとき、羽純はマルデの叫んだ原因を理解した。

そこにはリューマと八雲以外に対戦相手であつたゲラーミンと、そのパートナーであると思われる白衣の少女が居たからだ。

宿へとどことなく重い足取りで帰つている途中の八雲を捕まえてリューマはカテナイ亭へと歩みを進めた。

勿論、その時後ろに先ほど対戦したはずのゲラーミンが居ることに彼女はすっかり驚いていたが。

敗者のパートナーは悪趣味な、ピンクだらけのベッドルームに案内されるが勝者のパートナーはすぐに帰らされる。

居残る必要も無く、居てもする事も無いからだ。

まあ偶にはレイチエルのように、とりあえずボーダーがコロシアムを出るまでその場に留まる人もいるのだが、それは少々特異な例だ。

ポカーンと口を開けていたのを思いつきり笑われ、小さくなつてしまつたのを思い出す八雲の頬はまだ赤い。

ちなみにリューマの案内された、白衣の少女の居た隣の部屋は絶賛使用中であった。

「スコスコスコスコ、まあ初めてならんなものだろ」

「えと、何『』そこは聞かなくていいな……ハイ」

ゲヘゲへ親父臭く笑うリコーマにハ雲と羽純ははて?と首を傾げる。

闘神大会の勝利者は敗者のパートナーに二十四時間、基本何をしてもいいことになっている。

大体がえつちな事、そのための美人パートナーだ。

美人なパートナーが負けたら勝った相手に犯される、直接体験できる訳でも見学できる訳でもないが、それがまた観衆の興味と興奮をそそるのだ。

だがリコーマはそれをしなかつた。
まあ仕方ないというべきかもしけないが。

ゲラー・ミンのパートナーである『ステラ・コイル』、彼女は確かに美しく可愛らしい。

透けるような白髪に血のようないつ赤な瞳。

ふにふにもちもちとやわらかな肌も非常に魅力的だ。

只一つ、彼女が『よう』『よ』だと言つ事實を除けば。

だぶつく白衣の袖をいじりながら、ハ雲の膝の上にちょこん、と腰を下ろしていの彼女。

きょろきょろビクビクと小動物のように視線をチラつかせていくステラは非常に可愛らしく、保護欲をかきたてる。

余程特殊な趣味の紳士で無い限り、ステラに手は出せないだろ。

「可愛いいいこひ、向この方の方向の方……」

「ううだこつ、こくらなり売つてくれぬ……」

「……あの……その……ストラ売りやけいり……ですか……?」

「マルトセラフ、怖がつてゐじやないですか……?」

「……羽純ちゃん、そんなに怒んなくても……」

「い・い・え! そんな風にステラちゃんのことを言つ人はビックリに行つてください……」

「そんない、私もステラちゃんと遊びたいの……」

ああ~、と崩れ落ちていくマルトとは対照的に、ストラフに頬擦りする羽純は満足げだ。ステラはステラで、今まで体験したことのないような状況に顔を真っ赤に染めている。だがどことなく、心地良さそうなのなはのせこではなこだろ。

「うう……ハ雲おねーちゃん……」

「えつ、ハ雲こつ之間にそんな風に浮ばれるよつたの……?」

「はう、羽純……近こよ。

わつあせこのうしだけ、長く一緒にこいるから……自分それでだと思つ

「イイなイイな……あのね、ステラちゃん。

私のこと……羽純おねーちゃん……って呼んでみない？」

にっこりとやわらかく微笑む羽純に、小首を少しがらげてみせる。それだけで抱きしめたくなるような可愛さであるが、彼女はグッと自制し微笑みを保つ。

だがぴくぴくと、羽純の頬が震えているのは見ないふりをしてあげるのが大人というものだ。

「……羽純……おねーちゃん」

「リューマさんっ、いくらなら売ってくれますか！！」

「うるせー、そろそろ黙つてろ。

ステラ、お前はこっち来い」

「あい」

身を乗り出す羽純をギンシーと田線一つで黙らせ、ステラを隣に座らせる。

そして先ほじからの事の顛末を、顔色一つ変えずに見ているグラーミンの腕をパアーンと吊り、リューマはステラに向き直った。

「コイツは人間じゃねェな」

「えつ、それってどう「黙つてろって言つたのがわかんねェのかテメェは、あ?」……うつ、わかりました」

「聞きてHijoがあんなら俺の聞いた後にしる。

「言つとくがテメエは部外者以外の何物でもねエんだからな、おわ
かり？」

リューマの言葉に口を噤む。

確かに自分はリューマとはただ顔見知りなだけであつて、酷く彼に
自分が関係している訳ではない。

第一自分のパートナーは今頃……。

「……ッ！－」

ブンブンと沸き上がる思考を頭を振り吹き飛ばす。

しかしどいつも、恐らくまぐわいを行つてゐるであらう人物が自分の
知り合い同士であるといつ事實。

それは生々しい情景を、意識していなくとも羽純の頭に沸きあがら
せていく。

「不機嫌そうな顔してゐんならどうか行つてろ、邪魔だぜイ」

「いえ……ここにいます、部屋で一人で居たらなんか変な感じにな
っちゃ いそうなんで」

泣きそうな顔を必死にこらえて、羽純は微笑む。

ナクトが帰つて来た時、自分がこんな顔をしていちゃいけないって
思うから。

いつもと回じよつと、いつもと回じよつと、いつもと回じよつと、
いつもと回じよつと、いつもと回じよつと、いつもと回じよつと。

頑張つて闘つて来たナクトに、酷い事なんて、責めるようなことな

んで、決して言わないように。

興味も無さそうに羽純を一瞥し、ステラの瞳をじっと見つめるリューマ。

「テメエ、ステラ……魔鉄匠だな」

その問いかけに、彼女は「クリと首を縦に振つてみせた。

「じゃあ聖魔教団のもんか……？」

「ダメですっ！」

「退いてろクソガキ、煩わしい」

リューマとステラの間に入ったハ雲を押し退け、再び抜き去った日本刀を彼女の小さな顔へと近付ける。

「正直に言え、嘘だと思ったら切る。

も一度聞くぜイ、お前は『上』から来たのか？」

「ちが……う……ステラ……ステラっ、捨てられてたのをイジった……だけ」

ウルウルと瞳に涙を溜めて小さな手をギュッと握る。刺すような視線が、絶えず俯く彼女に降りかかるが、その追求を緩

める様子はリューマに見受けられない。

ハ雲も、羽純も、マルデも、トコトンも、野次馬のように彼らを囲む他の宿泊客も、誰一人として口を開けない。

勝者は敗者のパートナーに基本何をしても良い事になつてい。しかし例外的に、『殺傷する』という行為は認められていないのだ。

何故か?と聞かれれば、恐らく免除金が払えないパートナーが行うこととなつて『『闘神都市での三年間の無償労働』』という条件の為だろう。

死んでしまつた相手をそれにかり出すことは出来ない。

闘神大会の実行にはもちろんのことではあるが大量のお金がかかる。『街の名物』となつていても、そこに経営利潤を求めていいないと言えば嘘になる。

さらに毎年一人生まれる闘神のために多くのお金がかかる。と考えれば、給金ゼロの働き手というモノは非常に魅力的なのだ。ルール的にも違反なわけだし、そんなこと行つ相手はまずい。まずいのだが、目の前のリューマにそれが通用するかと言えば甚だ疑問である。

クランクの公開レイプを煽り、さらにその被害者に追い打ちをかける。ゲロを公道に吐き捨て、自分の試合会場ですらそんな情けない姿で現れる。

予想の斜め上をダメな方向でブツ千切る彼だからこそ、そのルール

を犯さないとは限らない。
故に彼らは動けないのだ。

「そか、じゃあ話してくれや。

「マイシとぢうぢうひつたかつてとこをな

「……あい」

乱暴に頭を撫でるリューマに溜めていた涙をこぼす。
穏やかになつたその空氣に周囲の人間も、安堵の表情を浮かべる。
にへへ、と笑顔を作つて見せたステラはゆつくりと、まだ舌足らず
なところの残る口調で話し始めた。

そもそも『魔鉄匠』とは聖魔教団にいる、『闘将』製作技能を持つ
た技術者のことである。

そして闘将とは絶対服従の魔法で魔法使いたちに忠実な、疲れるこ
とを知らない鋼の戦士のことである。

その製作には生前の肉体の中で骨格と金属化された脳と左目だけを
残し、元の体型を再現するように魔法で筋肉の役割を果たす包帯を
全身に幾重にも巻き付けていく。

それを腐食、腐敗させないように魔法コーティングさせていくのだが、性能は素材となつた人物の生前の能力が大きく影響するのだ。

いわば生前の人格、知識、戦闘技術をそのまま引き継ぎながら大幅
に強化された鋼鉄のミイラとでも言つべき存在こそが闘将である。
全身無駄なく筋肉の塊になる為に生前を遥かに上回るパワーが与え

られ、通常の数倍の厚みはあるつ頑強な鎧を着せられる事で無敵の肉体を得ることとなるのだ。

ちなみにゲラーミンは闘将では無く、その製作の基盤となつた『鉄兵』である。

G.I.360年、バルシン王国を僅か二十四体の鉄兵で蹂躪した『鉄兵戦争』はあまりにも有名だ。

その戦争からすでに百年近く経つてゐるが、闘将の登場により性能を抑えることが出来るようになり、その代わりに量産可能となつた鉄兵はまだ現役。

今日も元気に『聖魔戦争』の最前線で戦つてゐるだろ。

ステラはその鉄兵である、当時完全に壊れていたゲラーミンを拾い、今では人と変わらぬ姿までに造り上げたのだ。
彼女は自分を魔鉄匠といつてゐるが、その冠には『自称』がくつ付くといふこと。

「……天才？」

「……へう……疲れちゃつた……です」

ちいぢやな手でコップを持ち上げる彼女の姿からは想像もつかない。

そもそも基本的に鉄兵も、闘将も、その製造方法は秘匿されている。『死んだ人間が材料』ということはわかるが、だがわかるのはそこまで。

修理なんてこと、まったくその様相を知らない人物が出来る筈もないのだ。

「来た理由は、じゃあ『上』に上がるためってことか」

「あい、優勝すれば……田に畠まると思つたです」

『上』とは宙に浮く闘神都市のこと。

そこに行つて本場の技術を仕入れてみたい、といつのが恐らく彼女の望みなのだろう。

現在魔人相手に人類率いて戦争中の聖魔教団。

特別処置の施されているこの街や、その領域内にあるナクトの村などは実際に戦争を行つてゐる、という実感はあまり見てとれない。

だが一步、そこを出れば完全戦争モード。

武器の持てる男たちは前線に駆り出され、女たちは救護や炊き出しへ大忙し。

毎日のように人が死に、魔物が死に、闘将や鉄兵が出張り、魔人が暴力を振るう。

そんな世界がそこにはあるのだ。

「でも……戦争も長引いてるみたいだし、ステラちゃんくらいの技術があれば『ゲート』まで行つたら上がるんじゃないのかな？」

「へう、そなんですか？」

「いちいち反応が可愛すぎるよ～」

今度は飛びかかるのを自制して、隣にいるハ雲に抱きついた羽純。

飛びかかれた八雲は眼を白黒させながら、先ほどのステラに負けじと顔を真っ赤にしてみせた。

頭をふらふらさせながら小さな口をめいっぱいにあけたステラ。

「寝まいのか？」

「…………あ……」

「んじや 今日はまあこんなもんでいいさ。

八雲、俺は出でるから適当に寝かせとけ」

「あ……ハイ、わかりました」

そう言いつと羽純を引きはがし、ステラの手を引き部屋へと向かつ。ついでに私も、と着いて来た羽純とともに。どうやら今日は三人で寝るようだ。

解散するような雰囲気に野次馬たちも各自の部屋へと帰還する。

扉を開け、外に出たリューマ。

夜は広がり、辺りは真っ暗闇に覆われている。

「…………大丈夫だとイイんだがねエ」

いつもの不遜な態度と違い、リューマの吐きだした祈るような言葉を聞いた人間はどこにもいなかつた。

十一 戦目（後書き）

違和感がぬぐえない

十三戰田（龍藏也）

○ も、めちやくちや カツ ロイイ

いつになつたら流れんんじょ、いね？

十二戦目

その日、ナクト・ラグナードは非常に気分が良かつた。

昨日行われた第一試合で見事勝利し、ドギの魔の手から闘神都市での無償労働、という形ではあるがマニーを救いだしたのだから。朝方カテナイ亭に帰還し羽純と連れだってコロシアムへGO。必死に集めたいかなごが売られていたり、次の試合が助けてもらつたこともある忍者とかいうちよつと悲しかつたり、不幸だなあと思う事はある。

だがそれ以上に、彼の気分は浮足立つていた。

マニーを救えた事もそうだが、試合後に行われたマニーとのセクロス。これは彼の心を非常に優位に立たせていた。

どのようなものでもそつであるが、これまで出来なかつた事が出来た。

その事実は人を大きく成長させる。

出来るために努力をしたからか、出来た事によつて心境が変わつたからか。

今回はその後者であるが、ナクトは少しだけ、心に余裕が持てるようになつたのだ。

だからカテナイ亭にゲラー・ミンが居た事だつて許容出来た。リューマが勝つたつてことに納得がいかなかつたが、どうにか納得した。

そして次の試合に向けて、忍者打倒という目標も生まれた。

「シユリさん、男の子はいろんなこと経験した方がいいって言つてたけど、確かにそうかも」

『男児三田会わざれば刮目して見よ』という格言もある。今日は一晩であるが、昨日よりも少しだけ、ナクトの剣筋は鋭くなつていた。

ナクトの潜る『パチル』という迷宮。

そこに現れる『まる』、『うつびー』、『金魚』、『ブルーハニー』とこれまでと比べればかなりまともなモンスター相手に、危なげながらも勝ちを拾う。

「俺つてかなり強くなつてるのかもな……」

少々図に乗つた発言も見えてくる。仕方ないといえば仕方ないのかもしれないが、そんなどこから出来た隙によりナクトは懐の財布を奪われてしまった。

「あ……ああああああああつ！？」

見れば壁に無数に空いた小さな穴、そこから飛び出したブタかウリボウ。

そんな外見をした生き物『パチル』がナクトの財布をくわえているではないか。

このパチルという迷宮に存在するモンスターは冒険者の財布を盗んでいくということで有名である。

彼らが食料としてGOLDを必要としているからか、それとも巢作

りか、他の目的の為か。

その辺りの生態はまだ明らかにされていないが、冒険者たちにとっては非常に鬱陶しい存在であることは間違いない。

ナクトが追いかけようとした時、すでにパチルは穴の奥底へと入り込んでしまっていた。

ガシガシと穴を掘つたり、手を突つ込んでみたりするが無駄な徒労。逆に指先に噛みつかれてしまつたという散々な結果だつた。

「はあ、羽純になんて言えばイイんだろ……」

ずーんと肩を落として迷宮散策を続けるナクト。

先ほどまでの軽い足取りもどこへやら、彼は羽純に『付与』をしてもらつた剣を担いで歩みを進めていく。

「……少し『付与』について述べてみよう。

付与とはこの世界に存在する特殊な効果を持つアイテム、たとえば力を強くしたり、たとえば耐久力を高めたり、たとえば自身を身軽にしたり。

そのように身に付けると特殊な効果を生み出すアイテムの効能を剣や盾へと付加させる技術のことである。

この技術を『付与魔法』と呼び、それを扱うことのできる人間は『付与師』と呼ばれる。

これによりかさばる装飾品を複数身に付ける必要が無くなり、尚且つその特殊な効果を持ち主に宿すことが出来るという利便性の高い技術なのだ。

羽純はその付与師見習いであり、彼女によりナクトの持つ剣にはさ

さまざまな特殊な効果が付与されている。

それにより本来以上の実力を彼は発揮できるようになつていいのだ。

『わら』と言えば付与とこうモノはどのよつたな装備品に对しても平等に行える訳ではない。

各个の装備品に於いて、『スロット』と呼ばれる付与可能な領域というモノが存在する。

そしてその空きスロットのみに付与歸は付与を行えるのだ。

ちなみに付与師になるための最低条件はこの空きスロットを見つけるかどうか、といつとこりである。

また付与するアイテムによつても利用するスロットの大きさが異なつてくる。

例えば力を高めてくれるアイテムには『ねこる金貨』に『ドラ猫の鈴』、『純金ベア』が存在する。

しかし系統的には同じであるがどれもが同じ効果だけ力を伸ばしてくれるわけではない。

『ねこる金貨』よりも『ドラ猫の鈴』、『わら』それよりも『純金ベア』とアイテムにより効果の振れ幅が異なるのだ。

そしてそれに比例して付与するために必要なスロットの数も高まつていいく。

効果の高いものほど場所を取ることのことである。

「レメディアに貰つた剣も大分扱えるよくなつてしまつたし……やっぱ準決勝で当たるんだよな」

鞄に納めた剣をチラリ、ナクトは歩みを進める。

そつなればレメデイアとも、と満りになりかけた頭の中も田の前の光景によつて吹き飛ばされる。

「オラオラオラ、金田せや！」

「ひぐ――――――」

「200ちゅうとか……しけてンなア」

「何やつてんだよつー！」

「は、またお前かよ~~~~~」

田の前にまばゆめ息をつき首を振るリューマ。
走り寄つてみると足元には怯えたような顔のパチルが一匹、ナクトを田にすると走り出し穴の奥へと消えていった。

「何やつてんだってパチル齧して金奪つてんだけど。

やつぱ結構集まるもんだね！」

冒険者から金を奪つパチルから金を奪つリューマ。

少し膨らんだ、ボロボロの巾着袋を田の前にかざしてみると六からパチルが飛び出した。

躍りかかってくるパチルに拳を叩きつけ、田を回した身体をまわぐつてみる。

「あ、こつは300ぐらい持つてんな。

ケケケ、マジでイイ金稼うなぎわ

「お前つ、自分のやつてることがイイ」とだと黙つてんのかー?」

「別にイ、ンなことテメめに言われる筋合きんあいなんてね」

ナクトの田から見ればどうも外道な行為こうぎ。

カツと頭に血がのぼった彼はシャランと剣を抜き、リューマヘルと付

きつけた。

「お~お~怖い怖い

「前から思つてたけど……お前のやる「とは間違つてるー」

それでハ雲さん迷惑がかかるつてじでしてわからんないんだ
ー!」

「迷惑……とな?

まつたく意味がわからんのは俺だけじょつか……ってマジにな
んなよ

剣を握る手に力がこもる。

そこで私闘禁止というルールが頭に浮かび、田付き鋭いまリュー
マを睨みつけた。

「ハ雲さんはお前に攫われて、お前が無茶苦茶なことばっかりして
……どれだけツライ思いしたか……。

それぐらい考えたらわかるだろーー!」

じつと見つめるナクトにリコーマはフム、と考え、そして一つの結論に至つた。

目の前のナクトは昨日の試合で、大分すれば同じ状況にあったマニを救いだした。

そのことが恐らく彼に自信を植え付けたのだろう。

同時に余程感謝されたからか、ナクトはどこか『自分の正義が正しい』という認識も植え付けたのだろう。

そして自分と同宿にはマニーと同じような境遇の女の子と、ドギと同じように間違つている男が居る。

だから彼女、八雲は自分が助けなければならぬ。多分そんな青臭い正義感をナクトは持つているだ。

若い、リコーマはそう思つ。

別段そんな正義感、彼に言わせれば何それ、食えンの？程度のものかもしれないが、持つこと自体は構わないと思つ。

誰だつて勇者や英雄には憧れるものだ。
誰だつて感謝されたり人から褒められたりしたいものだ。
そして誰だつてイイ思いをしたいものだ。

だが一つ、自分に言える「」があるとするならば。

「で、それが俺に何か？」

「テメエッ！」

今度は飛びかかってきたナクトを軽く受け流し、ココーマは出口に向けて歩を進める。

「ンな下らなこと考えてる暇があんならTHEのパートナーのことを考えるよ」

「……羽純にまで何かしたのかつ……」

「さア、でもアレくらいう俺もビンディングだわな

ケケケとゲスじみて笑つココーマの言葉に、ナクトの頭の中は真っ白になった。

出来ることが出来るようになるところはトイボックスばかりではな

い。
反面犠牲にしたものも出でへる」ともあるのだ。

マーとの本番当初、ナクトは『羽純に懲にから』と行為そのものを断ち切っていた。

半ば無理やりパートナーとしたにもかかわらず、だけど大きな文句一つ言わず自分の我儘を受け入れてくれた羽純。

そんな羽純を裏切るようなことはしたくないと思つたのだ。

だが目の前のマーに、同年代の、それもどびつきりの美少女の痴態を見せられて、懇願するような瞳で見つめられて、ナクトは若い欲望を抑えることが出来なかつた。

昇つていた日が暮れて、辺りが暗くなり、再び日が昇つて。ナクトは何度も何度も、自分をマーへと引きつけた。

帰つて羽純を安心させる機会はいくらでもあった。

だがどうもぶら下げられた極上の餌に誘惑されてしまい、結局勝利報告をしたのは今日になってから。

ハツと我に返つてカテナイ亭に向けて走り出し、朝部屋にいないことをマルテに問い合わせて。

そしてリコーマの部屋で出来ていた美少女、美幼女、美少女のサンディイッチに、ゴクリと生睡を飲み込んでしまって。

それから羽純を起こして、勝つたと報告して、朝食を誘つてみるとハ雲とステラに断られてへこんで、終わつたらすぐにはロシアムに連れ立つて出かけた。

だが結局、ナクトはマニのことをついて羽純に何か言つただろうか。

実はナクト、羽純相手に大した弁解も弁明もしていないのだ。

羽純からは何も特に言つてこなかつたし、ナクトと羽純は恋人同士なわけではない。

それにレイチャエルと話していたということもあつて、どうも許してくれる、気にしていないとそんな考えを勝手に抱いていたのだ。

今はまあそんなこと問題ではない。

それよりもリコーマが羽純に何かしたのかもしれない、そんな考へで一步も動けなくなつたナクトは、気が付けばおかえり盆栽の枝を一本折つていた。

かき消えていくナクトの姿にガシガシと頭をかく。

「ケケケ、これで堂々とガキンチヨの財布懐に入れれるつてもんだ

わ

手に持つた、先ほどまではナクトのものだったそれをヒラヒラ。リューマはやはりリューマだった。

所も時も変わって再び夜、リューマの部屋にはハ雲と、そしてその膝の上にちょこんと座るステラが居た。

本来なら闘神都市での無償労働となつていていた訳だが、彼女はしつかり免除金を用意していた。
もといその材料となる存在を。

ハ雲が試合観戦に行つている間、カテナイ亭の前では公開解体ショーアーが行われていた。

観衆の輪の中心に居るのはステラ。
工具片手に次々とゲラーミンを分解していく幼女といつのは中々に刺激的であった。

そしてその身体に使われていた良質な鉄や付与魔法がかかつた武器などを道具屋の一つである『ココリコ』に売りさばいたのだ。
リューマとの試合では使えなかつたが、腹の中に隠されていた巨大な戦槌など、武装はさまざまに存在した。

使われていたらならば、また試合は違つた結果となつていたかもしない。

「……にへへ」

だがハ雲になでられ満足そうなステラの顔を見れば、まあ良かつたのだろう。

「……ステラ、良かつたのホントに？」

「あい、ステラまだまだです……だから……造られてた物じやなくて、ちゃんと自分で造んなきや……です」

「……やつ」

猫のように目を細めるステラにハ雲は自然と微笑みがこぼれる。ステラは意外に研究者魂か技術屋魂か、それが強いらしく小さな胸をトンと張りながらにこにこと笑っている。

「それよかだ、虐殺したつてのは第三試合だつけか？」

話を変えるリューマの問いかけにハ雲は笑っていた顔を強張らせ、小さく口クと頷ぐ。

大会四日目、昼過ぎた頃から始まつたマダラガ・クリケット・S・ 戦士力キタロスという組み合わせ。コレは一方的な試合展開となつた。

マダラガの腕から生えたヌメヌメした触手。

それは一瞬で力キタロスの身体を引き裂き、内腑をそいら中に飛び散らせたのだ。

圧倒的で、残酷な試合運び。

昼食を吐きだしてしまつたことを思い出し、見ていた試合を思い出すとまた顔が青くなる。

「そこへは……私もしかるべきだなッ」

「...え?」

「明日は多分そいつ、相手方のパートナーの凌辱ショーでもやつてから見学に行くぞ」

そう言つとコヨーマはとつとと布団に身を押し込み、ぐがーと寝息を立てながら寝てしまった。

「寝よう」

リューマの言葉がいまいち理解出来なかつた八雲はステラとともに三人で川の字を作るよう布団に入る。

並べられた一枚の敷布団の上、ステラを挟んだ向こう側にいるリューマの顔はいつものような八雲の事を考へない傲慢な態度で、その顔に少しだけ八雲は悲しかった。

十二戦田（後書き）

今回もなんか変な感じです

十四章（複数形）

せひまじく一つがどうかわからぬ

十四戦目

闘神大会五日目の中、リューマと八雲は広場を訪れていた。ちなみにステラはカテナイ亭にてお留守番、机いっぱいに広げた図面と向かい合つてうんうん唸つてゐる。

小高くなつたその一角、一人は目の前の光景を見つめていた。リューマは楽しげに興味深そうに、八雲は視線を逸らし青い顔をしながら。

何かを取り囲むように出来た人の輪、その中心で行われている光景を。

「やつぱおもうこ身体だわな」

「…………うえつ…………」

「ヤニヤと口元を釣り上げるリューマとは対照的に、八雲は口に手を当て拳をキュッと握り、必死に自分を保つてゐる。

集まつた人々の輪の中央には裸にされた少女と、モンスターのような触手を持つ男がいた。

薄く澄んだ緑髪の男の腕半ばから生えた触手は先へ行くほど枝分かれし、少女をがんじがらめにしている。

その力は相当なものらしく、男は立つた姿勢のまま手も触れず、少女を空中に持ち上げてゐるのだから。

公開レイプショー。

本来ならば少女の見られたくない場所は彼女の意志とは関係なしに、周囲の観客たちの目に完全に晒されている。

「……人間……なんですか？」

「ぶあか、どつからどつ見たつて真つ当な人間だらうが」

「でつ、……でも……」

瞼に涙をためたハ雲は見上げるようにリューマを見つめる。そんな視線に気付いたのか、今度は吐き捨てるように彼は言い放つた。

「何さ、ちょっと他人と違うからつてもうバケモノさんなわけ？」

「ちがつ……」

口に出しかけた言葉をぐつと飲み込む。

『違う、あの人は人間だ』、そう声に出そうとしても喉が、舌がその言葉を拒絶する。

黒く太い触手の先からは、黄色く細い触手が幾本も生え、少女の身体を這つていく。

自分には、一般的の人間には決して存在しないそれを、それを持つ男を、ハ雲は自分と同類だと見ることは出来なかつた。

「……テメエだつて人と違うかも知れんくせに……バケモンかも知れんくせに、よーそんなことが言えるよな」

鋭く尖つたリューマの言葉、それはハ雲の胸に深々と突き刺さる。震える体を抱きしめて、切れ長の瞳をこれでもかといわんばかりに

見開いて、ハ雲は力チ力チと歯を鳴らす。

途端蹲るように崩れ落ちた彼女は、リューマに縋りつと彼の袴に手をかける。

だがその伸ばした手を乱暴に振り払つた彼は、ハ雲の首根っこを掴み上げ、その顎へと拳を叩き込んだ。

正確にハ雲の顎の先端を捕えたそれは、脳を揺らし、彼女を典型的な脳震盪の状態へと陥らせる。

意識の飛び去り弛緩したハ雲の身体を肩に担ぎ上げ、もう一度リューマは目の前の光景を見つめだす。

「『ムシ使い』か……公式にやア初期の聖魔教団に全員消されてた事になつてんだがね」

現在人類を統一している『聖魔教団』、これは元々魔法使いたちの地位向上のために組織された。

今では信じられないが、百年ほど前は剣を中心とした『力』こそが全ての時代。

この頃の魔法使い達は、どんなに強大な魔力を持つっていても詐欺師と罵られ、ただ利用されるだけの存在だつたのだ。

そんな状況に嫌気のさした聖魔教団の創始者である『M・M・ルーン』は、自分たち魔法使いを認めさせるために魔法使いを集めて戦争を吹っ掛け、今では人類統一国家の元首とまでなつている。

人類統一の際、自分たちを虜げていた戦士、彼らに言わせれば『蛮族』たちはその支配を良しとしなかつた。

ついほんの数年前までは自分たちの下にいるのが当然だつた者たち

が、今は自分たちの上にいる。

敗北し、屈服させられても学び体験し、確立した認識を改めること
は容易では無かつたのだ。

そこで魔法使いたちは考えた。

『ならば彼らよりもっと低い立場の者たちを見つけ出し、とりあえ
ずその自尊心を満たさせよう』と。

その時白羽の矢を立てられたのが、当時森の奥深くのみに集落を作
り、ひつそりと人目をはばかって暮らしていたムシ使いたちであつ
た。

「全部ちやんと驅逐してくれりやあ良かつたのこそ」

「こらんだな、生き残りも。

どうやって参加者になつたかなんて分かんないけど、そりじゃな
かつたら呪き殺してやりたいぜ」

「違うだろ、やっぱムシは焼かねえと」

ケラケラとした笑い声が田の前から聞こえる。

やはりムシ使いは嫌われているようで、敵意と嫌悪のみが彼に向け
られていた。

彼らが魔法使いにとりたてて何かをしたわけではない。

ただ単純に、誰が見ても不快感を与えるものを持っている。

それだけの理由であらぬ濡れ衣をかぶせられたムシ使いたちは数を
減らし、ついには絶滅したとまで言われていたのだ。

「んん……んう……うひうひ……！」

少女は苦しげな表情を浮かべながら、疲れ切った体で懸命に奉仕をする。

「どうやら男の息子は普通の人間のモノと変わりないようだ。それを一眼、勝つたとガツツポーズを決めるリューマ。

「足りねエな」

沈黙を保っていた男は自分の眼下にいる少女の頭を見つめながら口を開いた。

「使えねエ舌なら切り取つてやつてもいいんだぜ。」

パートナーの殺傷は無理でも、明日自分から頼みに来させるつてことは出来る訳だしなアッ！！」

ヒツと息を飲む少女に気分を良くしたのか、饒舌になつた男は今度は凄惨な笑みを浮かべる。

「良く見りやイイ舌だ。」

虫の餌にはちよつといかもなア」

口に手を突っ込み、真っ赤な少女の舌を弄ぶ男。

更に笑みを深く、その手を離した後も、恐怖にひきつる少女の口からはまともな言葉は出てこなかつた。

「今日だけでおしまいにして欲しいのか？

「だったらお願ひしてみろよ、人間様の言葉でよオ」

「イイね、やつぱおもしれーヤツだな」

「う……うあ……やめて……やめてう……下さ……舐めますから
……やんと」

「何をだよ、見えてんだろ周りが。

野郎どもが期待していることを言えよ、このメスブタが」

男が肩を動かすと、少女を捕えていた触手が波打ち、更に少女を高くへと持ち上げる。

その衝撃に彼女の見られたくない部分が観衆の鼻先を掠め、欲望を身きだしに見ていた幾人かが称賛の声を上げる。

ケケケと悪い顔で晒つコウーマもまた、その口元をさらりと釣り上げる。

そんな彼にうすら寒いものを感じ取つた周りの人々は、リューマから身体を少し外した。

恥辱に耐え切れなくなつた少女は、きつく目をつぶり、男の要求に応じる。

淫らな言葉を口に出す少女に、男は触手を蠢かせ、彼女の身体を蹂躪していく。

「お願は人間様の言葉でしろって言つただろうが、メスブタがアツ！」

どんな感じだった、正直にお前を見ている野郎どもの前で言つてみやがれッ！」

そして再び少女が言葉を紡ぎ、「ヤリと口元を歪めて触手を束ねた男の耳に、トサリと何かが崩れ落ちる音が聞こえた。

リューマも視線を移してみると、何故かいるナクトの後方で、責ざめへたり込む羽純の姿が田に飛び込んできた。

「あアア、女か？」

「あ……あ……あ……」

「羽純っ！」

どうやら少女の凌辱を田の当たりにして、腰を抜かしたらしい。

「だつ、大丈夫か羽純！？」

問い合わせるナクトの言葉に返答はなく、震える手で駆け寄った彼の手を握る。

「クツクツク……腰を抜かすほど羨ましかったか？

「混ざりたいなら、混ぜてやるぜ！」

少女の身体を釣り上げたまま、男はくいりとからかうように羽純を手招きする。

ナクトは羽純を背後に庇い、とつせに剣に手をかけた。

「ざつけんな！」

羽純に手出しして見やがれ、その触手ブツた切つてやるつ……

「野郎に用はねエんだよなアア。

死ぬか？あア死ぬかア？

男はすぐに触手を伸ばしてはこなつたが、先端で指をすりつけた。クトを示し、自分の身体の横で隙無く蠢かしている。狙いを定められているナクトもまた、決して柄から手を離さないとなかつた。

「無論そつちの女もなア」

ギュリンと音でも付くように首をリューマへと向ける男。担がれた八雲の臀部から、段々と彼の顔へと視線を移し、リューマの爪先から頭のてっぺんまで、虫の這うような眼差しが進んでいく。

「うん、それ無理」

「あアア、何様だテメエは！？」

飄々ととぼけるてみせるリューマに突き刺さる男の視線。そこに響く軽快なトランペットの音。

銀髪のヒーロー、忍者仮面が一人の近くへと降り立つた。

「君たち、ルール上私闘は禁止されているのは知っているだろ？」「

「へいよへいよ、じゃあ俺帰るわ

踵を返すリューマ。

まるで自分の事など眼中に無いかのじき態度に、男はピクニヒ

「逃げんのか……情けねエ男だなア」

「ちばーし、俺の目的地がアツチなだけだし、それに……だ」

顔だけ振り向いたリューマはにひやつと小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

ゆらゆら触手を漂わせる男に、事も無げに、躊躇いなく口を開いた。

「俺つて、雑魚に用はねエからッ……！」

「雑魚、雑魚、ザコ雑魚ザコ！」

「クツクツク……、じゃあ証明してくれよオオオオーー！」

「やん、リュー・マヘンこわーい

途端、少女に絡み付いていた触手はリューマ田掛けて走った。

重力に従い地面に叩きつけられた少女をよそに、触手は幾本もの槍の如く、リューマの体を貫かんとする。

「H A H A H A、あぐびが出ちまつザイ

集まつた切つ先は雨のように彼の体を狙つ。

それをヒョイヒョイッと、リューマは八雲を抱えたままよけていた。

「クツクツク、オモシレエヤツだ」

「眉を吊り上げてみせた。

「あらま、ありがと。」

やつちの忍者さんも出てこなくつたつて止めるから、なー。」

背負つた忍者刀を抜き放ち、ギッと一人を見つめる忍者仮面にリューマはおどけるように笑いかけた。

男も触手を自分の体へと納め、再び少女の体へと絡みつかせた。

「テメエ、リューマひつたか。」

三回戦……いろいろと楽しみにしてるぜー。」「

少女の陵辱を続けながら、凄惨な笑みを浮かべる男。
そんな男、『マダラガ・クリケット』にリューマはやれやれと首を振る。

「ま、楽しみにしてるぜー。」

ポンとマダラガの肩を叩き、リューマは口元を弧月に塗める。
一瞬でマダラガの背後に移動したその動きは観衆の顔色に驚愕を塗りたくり、同時に言いようのない、なんとも気持ちの悪い感覚を腹の底から呼び覚ました。

「アンタ……アンタ本当に何なんだよ……。」

「何だつてイイだろ？が。」

俺は俺、俺である俺以外の何者でもねエンドよ

むせ返りやつにならぬ胸元を抑えたナクトに、にぎりとこつものよつ

な軽薄な笑みを浮かべ、今度こそリューマは歩いていった。

ハ雲をカテナイ亭へと連れ帰ったリューマは『教会と貯水池』と呼ばれる迷宮を訪れていた。

そこにある教会の外、田の前の光景をぽんやりと見つめていた。

「なあンでゾンビがこないこいるんでしょうね」

地面をガツッと蹴り上げて、腐った肉片を舞いあがらせる。先ほどまでいなかつた『動く死体』、それが何の因果か教会を出ようと扉を開けたリューマの眼前を埋め尽くすように、その存在を主張しているのだ。

「リューマさん、一体何が……ッ……」

「ケケケ、こりゃちと多こねエ。

あ～ああ、嫌になるぜ～

彼を追うように外に飛び出した金髪のシスター、『ポロロム・グライフ』は少々不機嫌そうに額にしわを作る。

『A-L教』のシスターとして、神の摂理に反する彼らを許すことが出来そうになかったからだ。

AL教とは女神アリスを信仰の対象としている、聖魔教団公認の宗教のことである。

正式名称はALICE教だが、通常はAL教と呼ばれており、教団の運営は現在は聖魔教団しか存在しないが、各国家から寄付金で成り立っている。

結婚、葬式、祭り事などはこの宗教の方式によつてなされており、人々との密着具合も極めて高い。

また魔王が代替わりした時には、神から法王へ指令があり、そこから各国家元首、そして民衆へと伝達される仕組みとなつていて、といつ世界中に教会を持つ宗教なのだ。

「せつかくさ、美人さんとも仲良くなれて、気分も良かつたのにやる」

「初々しい反応つていいね」

「私の方がちょっとだけおねえさんなの……」

頬をほんのりと朱に染めて、唇を尖らせる彼女はとてもかわいらしい。

近くにある墓地でマビル迷宮に潜り、命を落とした冒険者たちの弔いをしていたポロロム。

そんな彼女を田舎とく見つけ、のんびりとお茶としゃれこんでいたのだが、そんな時間も終わりのようだ。

すらりと腰に差した白刃を抜き放ち、リューマは無造作にそれを振るつ。

ゴトリと首を落とした田の前のゾンビであるが、まるでその事実に気が付いていないかのよう、のつそりと手を振り上げた。

「……だからゾンビ系統は嫌いなんだよなア、疲れるし

迫る腐った爪を指、肘、肩と切り裂く。

尚もこちらに近付こうとするゾンビを今度は横薙ぎに切り払い、解体されても動く肉片を踏みつけた。

「まあだからこそ、シスターがいて良かつたわ

蛆を出し、ズルリと飛び出た眼球と剥けきった脣のひつつく頭を持ち上げたリューマ。

迫り来る次のゾンビ目掛けて放り、それと脳天から股下まで真つ二つに寸断する。

臭気を放ち、飛び散る内腑に舌を出し、顔を歪めて見せる。

黒々しい血が着物に付着しないよう右隣のゾンビを柄頭で殴りつけた。

「うづ、避けた意味ねエ」

ズボリと柄を握った拳付近までゾンビの顔にめり込んでしまい溜め息一つ。

諦めたようにスカスカの頸椎を掴んだ彼は、元は成人男性であろうそれを、易々と持ち上げ、彼らの中へと投げつけた。

その衝撃によろよろと姿勢を若干崩す前方のゾンビ。間髪いれず叩き込んだ蹴りはその身体を後方に運び、やがて後ろの幾体かを巻き込み倒れ込んだ。

「どいたどいた、邪魔だよ邪魔だよ」

グシャグシャと草履で倒れ込んだゾンビたちを踏みつけ、リューマは前へ前へと進んでいく。

伸ばしてきた手は刃で斬り伏せ空いた拳で叩き伏せ、飛ばしてきた口から放つ毒液のようなものは身を屈めて目標点をずりせん。

「！」の辺かねエ、なアツ！！」

大凡集まっていたゾンビたちの中心に辿り着くと、彼は周囲から近付くゾンビを順々に斬撃を与えていく。着実に両肩口を分断し、確実に肢の付け根を両断してダルマを作り上げる。

本来囮まれるような位置に立つところのは愚の骨頂であるが、幸い相手は酷く緩慢な動きをするゾンビ。

自身の身体に触れられる前に、しつかりと彼らを転がしていった。

「終わリッと。

後はポロロムに浄化でもしてもらひつか

ふいーと息を付き、かしかし頭をかく。すんすんと着物に鼻を近付けてみれば、白だったそれはドス黒く染まり、臭いも極めてイヤンな感じ。

今だ地面でうめき声を上げるそれを見下ろし、リューマは酔つてきたハ工を鬱陶しげに払う。

軽く教会で洗わせてもらひつか。

そう思いクリリと踵をかえしてみると、一か所に集まつたゾンビと呻くような女性の声。

「……新人さんのかねエ。

けど……ゾンビの浄化とか実習とかでやんねエのかなア？」

深く肩を落としたリューマは氣だるそうに歩みを進めるのだった。

十四戦田（後書き）

シユツセラシヒロロムセラシハ 一 田惚れ

十五戦目（前書き）

たぶんこれがR15でセーフなら、これ以降全てセーフ……なはず

「いやっ……来ない……で……っ」

ゾンビたちはまるで、光に集まる蛾のようにポロロムを求めて來た。教会の外へと踏み出した当初、毅然とした態度でゾンビたちを睨みつけていた彼女。

しかし少し前で、ポロロムが今まで田にしたどの冒険者よりも手際よく、彼らを斬り伏せていくリコームの姿を、彼女は視線を移してぼんやりと見つめていた。

純粹に驚愕と、そしてその強さに畏敬の念を抱いて。

しかし彼女が今立っているのは戦場。

戦闘中に、しかも敵が眼と鼻の先にいるといつのこやちらを見ず、見当違ひの方向を見つめると、いつ行為はもあらん行うべきではない。単純にその人物が危険に侵される、だからしない。

そんなもの常識中の常識だ。

だが彼女はそれを侵した、だから必然のようによろよろと、ゾンビが体に囲まれ組伏せられてしまった。

「やっ、やめて……くう……」

先も述べたがやはりシスターであるポロロムにとつて、ゾンビは認めべき存在だ。

その認むべき存在に、今自分は穢されようとしている。そんな考えたくもない事実に、彼女は必死に抗おうとした。

「くう……くう……」

だが女の身で、ゾンビに抗うなど出来る筈もない。
ゾンビとして蘇ることによって、彼らは生前よりも高い生命力と
膂力を得ることとなるのだから。

たやすく転がされ、彼女の身体に腐りきつた肉が触れる。
冷たくヌルついた感覚に頬を引き攣らせる、そんな一瞬の間に彼女のスカートはたやすく取り払われていた。

「こ、こやつ……！」

下半身を下着一枚にされ、羞恥に身を震わせる彼女。
そんなポロロムに容赦をせず、ゾンビたちは残った下着を引き裂いた。

「ひつ……！」

ビリリリ、と布を裂く音がしつかりと耳へと飛び込む。
小さく悲鳴を上げた彼女は、硬直したかのように身を固くした。

ゾンビたちの視線があらわになつた下半身へと集中する。
ねつとりと熱く、だが冷たい視線。

「つ……見ない……で」

恥ずかしさから逃れようと股を開じようとする。

だがわらわらと伸びてくるゾンビたちの手によつてそれも阻まれた。
それどころかさらに両股を広げられ、穢れを知らぬそこを大きく彼らの目前へと差し出された。

「ああ……あつ……」

あまりの羞恥によつ泣き出しあつになるポロロム。

「うつ、……あつ……て、天にまします我らが神よ……魂のないこの者たちに……んんあつ……」

ポロロムは祈りの言葉を捧げ、ゾンビたちを浄化しようとする。

『浄化』とは魔法の中でも『神聖魔法』と呼ばれるものに分類される魔法の一つである。

ゾンビや靈体系統の実体を持たない魔物相手に有効な魔法であり、彼らを只の一度の詠唱で消滅させることができるのであるのだ。

一般的にゾンビや靈体系統の魔物は耐久力が極めて高く、厄介な敵だ。だがこれさえあればその酷い手間暇を一発で解消できる。

それだけ聞けばかなり強力なものに聞こえるが、逆に実体を持つ相手にはほとんどといって良いほどダメージを与えることが出来ない。まさに彼らに対応するためにこそ特化した魔法のなのだ。

ちなみに『神聖魔法』とは主にA-L教神官が多く持つ魔法スキルのこと。

名前と違い別に神の力を使つ訳では無いので、習得するのに特に聖職者である必要はなく、主として回復や援護などに重点を置かれた魔法である。

冒険者なら、そのスキルを持つ者は是非ともパーティに加えておきたい存在である。

「安らぎを……あつ、『』……ひやあつー!？」

だがそれも、彼女の身体を這うゾンビたちの手によって中断される。

「やつ、んんんつ……そこは……ああつ、あつ……」

そのうち一体のゾンビが開かれたポロロムの股の間に身体を割り込ませた。

ひんやりとした固いものが彼女の股に触れる。

純潔を守るべきであるシスター。

その誓いを易々と打ち碎かんと、ゾンビのそれが自分の中に無理やり侵入してこようとしている事実に、ポロロムは恐怖した。

魂を持たず、動くだけの死体であるゾンビの顔に、一瞬喜悦の笑みが浮かぶ。

もはや抵抗しても無駄であるという無力感が彼女の力を奪い去つていぐ。

だがそれと同時に、今までの感情とは全く違つたものが彼女の中から湧き上がってきた。

「あつ……神よ……わたし、は……」

絶望的な状況、犯されるという恐らく確定しきつた未来。そして、脳裏をよぎるその未来の自分の姿。

それは無意識のうちにポロロムの身体を熱ぐする。

「そつ、んな……わたし……」

強く弄られていた乳房も、犯されそうになっていた股も、好きな男を迎えるんとするがためのよつに自分の中の女を呼び覚ましていく。

「はあ……ああつ……どうして……あああつ！？」

私は……神に仕える……んんつ……！」

段々と、彼女の声に恐怖から甘さが混じっていく。

心なしか股の間のゾンビの顔も、楽しそうに歪んで見えた。

「お許しください……神よ……ああつ！」

じんわりと、触れられている乳房から伝わる肉の疼きがポロロムの心を蝕んでいく。

彼女は背徳に目覚めつつある自分を嫌悪した。

だが神に仕えるため禁欲生活に付け込んでいた自分の身体は、貪欲に肉の悦びを欲し、求め、心を裏切っていく。

「いやつ……汚らわしいものが……私の身体に……」

ゾンビがゆつくつと、彼女に覆いかぶさり侵入しようとする。

だがもう彼女は抗おうともせず、寧ろ喜々として迎え入れんばかりの心根を、拒絕の言葉とは裏腹に滲みださせていく。

その先端が埋まるか埋まらないかといつ刹那、それはパンと床を舞い、彼女の眼前に落ちた。

周囲で、自分の身体を一寸たりとも動かせんとするゾンビたちの力

も急速に失われていく。

崩れ落ち、地面に倒れ伏す自分の身体。それは力強く、されどゾンビたちには無かつた生身のあたたかさによってすくい上げられた。

「ケケケ、これで喰わなかつたら男じゃねェだろ」

「…………へつ、あつ……ココーマセタ……！」

眼を白黒とさせるポロロムは散漫していく意識を急速に手繰り寄せ、サアツと血の気のころよつに顔を舐めさせた。

何とか弁解の言葉を紡いだとしたそれはリコーマの唇によって乱暴に塞がれた。

「イイよねイイよねイイよね」

だつて俺を結局いつち来て「ヘヘヘッ」

呆けたように自由になつた手で唇をなぞる。ポロロム。熱く、あたたかい、焼けるような感覚。

「私は…………神…………仕える…………」

「やめて俺に仕える。

返事なんて聞かねェけどなッ……」

最後の最後、防波堤としていたその誓いは紙きれのように吹き飛んだ。

ポロロムを抱えたりューマは教会に飛び込み、ガチャリと重厚な力ギをかける。

その後教会からは、甘く愛しく主人を求める声が数時間にわたって響き続けた。

カテナイ亭のリューマの部屋。

灯りも燈さず窓を閉め切った薄暗い部屋の中、八雲は布団にくるまりカタカタ震えていた。

「ハ雲……おねーちゃん……？」

「大丈夫……ですか？ つらそう……です」

「うん……私は大丈夫だから」

覗き込んでくるステラに八雲は精一杯の笑顔を作つてみる。だが精神的に疲れきった彼女の笑みは、ステラの不安を煽るばかりだった。

彼女は本心から自分を心配してくれている。

そうわかつて、そう感じて、そう覗えて。
でもそれがつらくて、それが苦しくて、それで疲れて。

今朝のリューマの言葉がハ雲の中にふつふつとよみがえつてくる。

自分もバケモノかもしない。

いや、『かも』なんて生易しい言葉では片づけられたらどれだけ良かつただろうか。

眼を合わせた人の声が見えるハ雲のどこが、自分をバケモノではないと否定するだらうか。

ハ雲がこの力に気付いたのは兄が旅に出る一年ほど前。
最初に見えたのは自分に対する好意、昔から彼女を好きだと言い続けていたとある少年の心だった。

むせ返るほどに強烈な心の奔流。

想いは文字となり、ハ雲に尻もちをつかせ、泣きだせるほどの威力を誇っていた。

当時彼女はそれが彼の心だとは思つていなかつた。

「好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ」

だが男の子の姿を見るたびに彼の背後を埋め尽くさんばかりの文字が彼女の視界を覆つてゐる。

今までありえなかつた光景に、彼女はその男の子を酷く恐怖した。

引っ込み思案だった八雲はこの出来事から兄の背中に隠れることが、いつもにも増して多くなった。

外に出ればどこからともなく現れていた男の子。

見える前までは、気後れしながらも少しだけ、言葉を交わすことの出来る数少ない相手だったのだが……。

それも遙か昔、一度と八雲はその男の子と面と向かって言葉なんてかわせなくなってしまった。

兄が誰かに乱暴を振るう様にもなったのもこの頃からだつたかな。思い返せば八雲はそう感じた。

それは決まって八雲に対して、何らかの感情を持つている相手ばかりだつた。

「兄さんは……きっと信じてくれたんだね」

時間が経つにつれて、彼女の力はどんどんと強くなる。

初めはその男の子だけからしか見えなかつた文字も、他の男の子、他の男の子とネズミ算式に増えていった。

時には同年代だけではなくて、一回りも年上の男からも。

父親と同じ年頃の男の後ろにも、八雲は文字を見るよになつた。

何だかわからなくて、けれどとも怖く感じて。

「好きだ」なんて文字以外にも「触りたい」とか「挿入したい」とか「無茶苦茶にしたい」とか。

当時はどんな意味かなんて全くわからなかつたけど、その文字に含まれた八雲の背筋を冷たく撫でる嫌な感覚は、幼いながらも感じ取

つていた。

そんな文字を眼にするたびに、ハ雲は決まって兄の布団に潜りこみ、兄の着物の裾をギュッと握りしめて一晩を明かしていくようになる。やさしく髪を梳き自分を抱きしめてくれる兄に、ちょっとずつ、その日の事を話すのはハ雲の口課となっていた。

兄は最初この事を話した時、ビックリしたように固まり、すぐに怖い顔になつたのをハ雲は覚えている。

痛いほどに肩を握り、その後また痛いほどに抱きしめてくれた。

何か、兄は言つていたような気もある。

だが言ひようのない不安を抱え上げてくれた兄の態度に、ハ雲はただ涙を流すばかりだった。

やはり時間が経つにつれて、ハ雲の見える文字も増えていく。

男だけからしか見えなかつた文字は女からも見えるようになり、好意しか見えなかつた文字はその他の感情を見るようになる。

そしてそれが相手の心の声だと氣付いた時、ハ雲は14歳になつていた。

父も母も、誰しも例外なくハ雲が視線を交差せると背後に心の文字が見えた。

自分の持つ力の特異さに恐怖を抱き、兄に縋りつとしてもそれに兄はいなかつた。

兄は彼女の前から姿を消していたのだから。

ハ雲は自分の力を、父と母、そして兄以外に告げた事は無い。

父母から絶対に口外するなときつく言われていたからというのもある。

だがそれ以上に、話せばきっと、自分を人ではなく人で無い何かとして見るようになるだろうから。

こんな力があるせいで、彼女はきっとどんな人間よりも人の心の闇というモノを知っている。

簡単に人を裏切り、蔑み、見下す。

そんな黒く重たい感情を、彼女は前を向くだけで眼にするのだ。

「……………ですか」

おろおろと眼に涙まで溜めてしまっているステラ。

ハ雲のかぶつた布団をキュッと健気に握る彼女の頭をゆっくりと撫でてやる。

「大丈夫……うん、私は大丈夫だから」

自分より幼い彼女にそんな顔をさせてはいけない。

そんな使命感にも似た感情が、ハ雲の中でもぐもぐとわき上がりていく。

こんぢはちゃんと、にっこり笑つてみせる。

「えへ……えへへ……」

「……ハ雲……おねえちゃん……」

まだ心配そうに、文字は揺らいでステラの後ろを漂っている。
もう一度彼女のやわらかな髪を梳き、ハ雲はステラを胸元に抱きい
れた。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫。

何度も何度もハ雲は心の中でその言葉を反芻させる。

正直に言えば辛い。

大丈夫なんて、バカみたいな嘘っぱちだ。

出来るものならば何度もこの瞳をえぐり出したいなんて考えたことか。

だが、それでも、彼女は今の現状に心を折らぬよう歯を食いしば
る。人が聞けば、どうしてそんなに頑張れるなんて聞くのだろう。
それは彼女に頑張れる理由が、しっかりと心に根づいているからだ。

その理由は単純で、けれどもハ雲にとつての大切な心の支え。

大切な大切なそれを、大事に大事に大事に彼女は心の奥底にもう一
度立てる。

父にも母にも、村の誰にも、誰にも会わずに旅に出た兄の言葉。
いなくなってしまう前の夜、布団の中でハ雲を抱きしめながら兄は
言つてくれた。

『俺が絶対お前を助けてやるぜ』

それが無理ならハ雲の傍で、俺が一生お前を護つてやるぜ』

大好きな兄の言葉。

それが打ちのめされる八雲の精神を少しだけ頑強にしてくれた。

だから頑張れた、今の今まで。

だからこれからも、八雲は頑張つていこうと誓つた。

それに、今の居場所は思った以上に心地良いものだから。
自分がよつやく、本心から話せるかもしない相手が見つかったか
ら。

「灯りぐれH点けりや」「ノーヤロー」

「…………」

声のした方へと視線を移す。

思つた通り、そこに立つてゐるのは自分を攫つたリューマが一人。

「あ、えと……おかえりなわー」

「ンな挨拶より飯だ。

いやー俺も若いから頑張つちまつてた、腹がへつてなア」

「…………」

「はー、今日はくんできを作つてみました」

「…………くんでき…………楽しみ」

「ねこしこ…………おなかこつぱー…………食べる…………です」

「アリヤイイじつた。

「…………〔…………〕」

そういうてたたんでおいた着流しを一枚手に取ると、ズカズカ共同
谷陽の方へと歩いて行く。

それをピンクの小さな風呂桶に、かわいらしくまんパンツと寝巻を入れて、追いかけるようにステラが走つていった。

「あア、着いてくんのか？」

[.....]

どうやら今田はリコー・マと一緒に入るようだ。
首根っこを掴み上げ、肩にステラを乗つけた彼。

まるで父娘のような雰囲気に、思わず彼女の頬もほころぶ。

何故かはわからない！

だがハ雲がリユーマに会つてから、一度たりとも彼女は彼の心の文字を見た事が無かつた。

考えようとすれば、いくらでも疑問が顔を出す。

だけど、あえてハ雲はそのすべてを無視した。

自分は彼のことが何も分からぬ。

でもそれは、本当は普通のこと、そんな普通のことが出来ている
といつのがハ雲ことつてとてもうれしい事だったから。

傲慢かもしねぬ。

けれど自分がリューマの前なら、普通としていられるよつな気がし
たから。

「……いかない」の油煮も、つけたら喜ぶかな

人の為を思つとは、多分こんな感じなんだうつなと思ひながら、彼
女は夕飯の準備に取り掛かつていつた。

十五戦目（後書き）

後半が変な感じですね～

十六戰田（龍書丸）

— 田惚れしたキャラは……変態でした

十六戦目

大会六日目

ラキ

第1試合

ナミールハムサンド▽・S・アジマフ・

第2試合

リューマ▽・S・白井カタナ

大会七日目

第1試合

レオパルド・マーラー▽・S・宝光

第2試合

ボーダー・ガロア▽・S・タイガー

ジヨー

大会八日目

第1試合

ナクト・ラグナード▽・S・十六夜幻

一郎

第2試合

ウイング・シードマン▽・S・ワートナー

大会九日目

第1試合

レメディア・カラーヴ・S・ブルマ大使

第2試合

マダラガ・クリケット▽・S・ラフレシア

頭巾

ついに一回戦へと突入し始めた大会六日目、リューマは毅然とした態度の女性に睨みつけられていた。

命を落とした冒険者たちを弔う、『教会と貯水池』にある墓地。そのとある一角、石造りの墓の前で、小さいながらも鋭さをこじみ出させるナイフを手にした一人の女性。

黒い喪服姿の、『千代』といふ名の彼女は手にした凶刃をリューマに向けた振りかざす。

「貴方がつ……、貴方があの人を……！」

涙で頬を濡らし、我武者羅にそれを振る。想いの籠つたそれを後退しつつ避けるリューマ。

「なんでこうなったんかいねエ」

チラと彼女の足元に視線を移し、今日の出来事について思いを馳せていった。

二回戦一日目、第一試合となつたリューマ。

今日は一回戦日とは違ひ、酒に酔つてゐる訳でもなく、不都合な事をしている訳でもなく、極めて普通の朝を迎えていた。

少し遅めに目を覚まし、八雲が作ったJapanaの一般的な朝食を食べ、寝汗でぬれた身体を湯浴みでもう一度さっぱりさせ、綺麗に洗濯された白の着物を纏つ。

軽く日本刀の手入れをして、コロシアムで試合観戦中のハ雲が準備していた昼食をステラとともに食べ、帰つて来た彼女の報告に耳を傾ける。

普通で普通でとつても普通なよう、リューマは試合に臨むはずだつた。

ハ雲も適度な緊張を持ち良好な状態。

今日の対戦相手が女だから、という事で自分の身に汚れた欲望が降りかからないであろうとこづ思いも彼女の気持ちを軽くさせる。

少しだけ嬉しさをにじみ出させたような笑みを浮かべるリューマと、その背後に視線を巡らせ眼を閉じるハ雲。

どこにでもいるような、極めて一般的な闘神大会出場者とパートナーの姿だった。

そう、だった。

今までに、この時までは。

ハ雲の編んだ草履を履き、腰に刀を差し、カテナイ亭から通りへと出る。

昼過ぎ頃だからか、恐らく食事をしに帰つたナクトを一瞥して扉を開けた。

「リューマ様、お待ちしておりました」

そこには恭しく頭を下げる、青と白の修道服に身を包んだ美麗のシスターが立つていた。

連れだつて彼の後ろから現れたハ雲は状況に着いて行けず、とりあえずリューマの後ろから様子を窺う。

その後ろにステラ、なんだか妙な光景だ。

「何でいんだ、テメエは？」

「無論、リューマ様の御雄姿をこの田で拝顔させていただくためです」

淀み無く、まるでそれが当たり前かのように彼女、ポロロムは告げる。

その顔に浮かぶのは満面の笑み。

リューマの背中に隠れた二人の口はポカーンと空いている。

意味がわからない、彼女ら、特に八雲の心情を代弁するならこれであらう。

ふと、ポロロムはそんな彼女たちへと視線を移す。
しばし首をひねり、ポンと手を叩いた彼女。

酸いも甘いも受け入れてくれる、A.L.教シスターは慈愛の笑みを浮かべながら一人に向けて言葉を発した。

「はじめまして、私はポロロム、ポロロム・グライコ。

リューマ様の奴隸兼肉便器を務めさせていただいています
「はじめまして、私はポロロム、ポロロム・グライコ。

リューマ様の奴隸兼肉便器を務めさせていただいています」

完全一致したポロロムの言葉と心の文字。

ハ雲の経験上、それはかなり珍しいのだが事もなげに彼女はやつてみせた。

……まあ最低の方向ではあるが。

「俺さ、ンな事頼んでねエンだが……？」

「いえ、私がやりたくてやつている事なので御気になさう。ですが……私の髪の毛一本から血の一滴に至るまで、すべてリューマ様のものですか？」

キヤツなんて頬を染めて見せるポロロム。
非常にかわいらしい仕草なのだが、奈何せんどうも台詞と合つてい
ない。

果たして昨日、リューマがどのよつた事を彼女にやつたのかは甚だ
疑問が残るが。

まあ元々彼女にもそういう、つまり変態な素質があつたのだらう。

「ハ雲おねえちゃん……元くべんきつて……」

「うん、まだ知らなくていいからね」

ポロロムの言葉にこれでもかといわんばかりに顔を赤くしていたハ
雲であるが、ステラの危ない発言に、どうにか自分を取り戻す。
取り戻して、ステラの口を塞いで、またまたハ雲は湯気を出しそう
なほどに真っ赤になつていぐ。

ポロロムの言葉がわからないほどに彼女は子供ではない。
寧ろ、むき出しどなつた男の欲望に晒されてきたハ雲は、同年代に

比べれば耳年増。

清楚なはずのシスターの方を向けば、後ろに浮かぶ淫らな文字の群れ。

「……あう……」

思考が焼き切れんばかりの現状ではあるが、どうにか今を打破せねばならない。

それはこれから試合があるから、というのが一つ。

そして何となく、見えない事が悔しいのか悲しいのか、そんな風に思つてしまふ彼と彼女で一つ。

「どうちやでもいいんだがね、とりあえず行かなダメだろ?」

「…………」

「はい、すぐにお供いたします」

「嗚呼、リューマ様を想つだけで……んんっ」

バツとポロロムから視線を外す。

僅かに体をくねらせている彼女が、まるで視界に入つていなかの如くにリューマはズカズカ、コロシアムへと足を運んでいく。勿論彼の視界には何時も通りに自分は入つていないわけで、少しきみしい気持ちが沸き起こってきた。

だがその勢いは、いつもと違つてちょっとだけ激しかつた。

熱を持つていた頬も急速に冷えあがつて行つたようを感じる。

リューマは大して氣にも留めていないようだが、何となく今の状況

は気に食わない。

気に食わないといつても彼女に何か文句を言えるほどにハ雲は強くもない。

攫われて、一応自分はパートナーのはずだ。

大事な初めても、無理やり奪われているはすだ。

だというのに明らかに、リューマと深い関係になつたであろう女性が彼の少し後ろを歩きついて行つている。

彼の半歩後ろを、着かず離れず一定のペースで。

チクリと、少しだけ胸が痛む。

やわらかに保たれていた表情は崩れ去り、ひどい顔へと変わりつつある。

歩いて行くリューマ。

その後ろに続くボロロム。

いつの間にやらリューマの肩の上にいるステラ。

俯いていた顔を上げればそんな光景がハ雲の目の前に飛び込んできた。

でもそれは違うはずで、本当はどこか違うはずな光景。

「……あ……えう……あ……」

思わず瞳が熱くなる。

自分の居たはずの場所に自分がいなくなつている。

あそこにいたのは自分なはずなのに、そこには違う人が居座っている。

前にも言つたがハ雲は人見知りだ。

誰も知り合いがおらず、誰とも知り合いになれず。

一人ぼっちでこんな見知らぬ鬪神都市に来て、普通ならば平静を保つていられる訳もない。

だが結果として今までそつは成らなかつた。

それは無理やりであるが攫つて来たリューマが、思つた以上に彼女にとつて居心地のイイ場所を作り上げてくれたから。

だからこそ兄がいなくなつてストレスばかりを溜めていたような「appa」にいた頃とは違い、自然と顔がほころぶようになった。

なのに今は、自分なりに考えて、リューマのことを思つて作り上げたい場所は搔つ攫われていた。

どことも知れない、見た事も無い女性によつて。

ハ雲は人見知りだ。

その上さびしがり屋だ。

瞳はさらに熱くなる。

焼き尽くすような、痛いほどの熱さが瞳を襲う。

自分は何故にここまでに悲しいのだろう。

置いて行かれたから？

いや、それはいつもの事だ、そしてそれを追いかけるのが今ここでの日常なのだから。

大して気に留めるようではもつやつていけないだらう。

ステラが自分に何も言葉をかけてくれないから？

いや、一緒にいる事が多いのは自分が、自分よりリューマに彼女はなつていて。

それに肩の上は彼女のお氣に入り、よつぱどの事がなこと降りよつとはしない。

親しげに女性と話しているから？

いや、そう言つながらシユリや、トトカルチョ会場のバーもそれに当たる。

そんなことに田べじらを立てるほど、嫉妬なんて感情をハ雲は抱かないだろ？

何故、何故、何故、何故、何故。

熱くなり零れ落ちそうな瞳に対応して、頭も熱く、同じ事ばかりがグルグル回る。

「お前、……ポロロムさんに何してんだよ……」

そんなハ雲の思考を遮ったのはナクトの大きな声だった。
またか、とでも言いたげに下顎を突き出したリューマと強い視線で彼を睨むナクト。

「奴隸とか……こつ、肉便器……とか……」

「お前何やつたんだ！？」

どうもやはり、彼はリューマの事が気に食わないらしい。
これまでにさんざん煮え湯を飲まされてきたにもかかわらず、まだ彼にこつやつて敵意をぶつけよつといつのだから。

「ナクトさん、安心してください。」

私は別段何をされたわけでもありませんから」「

熱くなつたナクトをたしなめたのは、意外にもポロロムだった。まさか彼女が矢面に出てくるとも思わず、何もされていないなんてことを言つとも思わず、呆気にとられてしまつ。

辺りの人間も何事か、と一人に興味深そうに視線を注ぐ。その原因たるリコーマはそこいらの、少し荒っぽそうな男たちと、まるで自分には関係ないかのように話に花を咲かせていた。

「何もつて……でも、それならっ！」

「本当ですよ、私はこれでもシスターですから。

私の仕える方に誓つて、何もやましい事はしておりません」

直情的な彼をふんわり受け止め、ポロロムは笑みを絶やさない。やはり様々な人が訪れる教会、そこにいた彼女は今のナクトのよくな人のあしらい方もしっかりと心得ているのだろう。

消沈しつつあるナクト。

そんな姿をぼんやり眺めていたハ雲は、急に首根っこが引っ張られるのを感じた。

「テメエな、何遍言わせりやわかるンだ。

俺試合、テメエ必要、連れちゃ困る、……おわかり？」

ヒョイッとステラの乗っていると逆側の肩に担がれたハ雲。

突き刺さる好奇の視線に、今まで回っていた思考はなんのもの、上回るよつた熱さが頭を焦がす。

「今日はゲロ吐かねえのか?」

「兄ちゃんに賭けてんだからな」

「この前みたいなぶつ飛んだ試合を楽しみにしてるぜ」

必死に身を小さくする自分をよそに、先ほどまで言葉を交わしていた筋骨隆々の親父たちから声援が飛んで来る。どうも彼らには、今までに無いリューマの傲慢不遜な態度がいたくお気に召したようだ。

「ケツ、イイ気になりやがつて」

「じりせお前は今日女に負けるんだよ」

反対に、やはりリューマが気に食わなく野次を飛ばす人物もいる。その言葉にちらに小さくなるハ雲であるが、本人は気にも留めていない。

クロシアムへと向けて歩みを進めていったリューマはクルリと踵を返し、誰が見ても恐らく悪人面で、その姿がさらに深く濃く見える笑みを浮かべた。

「当たり前だろ、てっぺんてのは俺の為にあるんだからな」

「かつこわいー」

「ダセヒヤ兄ちゃん

「ハセヒヤ、黙つてヨリアツー！」

獰猛に剣歯を剥き出して、彼はガルルと吼えてみせる。ギヤハハとバカ笑いする男たちを後に、リコーマはズカズカ歩いてつた。

「勝てよヨリア

その中の一人が背中に声を投げかける。ピリッとした音、空気が締まる気がした。

「そう、の方に誓つて……」

陶酔したようなポロロムの表情に、ナクトはふと首をかしげる。

昨日『教会と貯水池』で会つた彼女はこのような狂信者だつたどうか。

そんなこと無いと思うんだけどなあ、と思いを馳せていたその時、彼の疑問は瓦解した。

「ハツ、私が唯一絶対この世でお仕えするリコーマ様に誓つてー！」

ええええええええええつー!?

「嗚呼、思いだすだけで身体が熱くなるつ……。

貴方様にお仕えすることこそ私がこの世に生を受けた理由つ、使
命つ！！

もつとその逞しいお身体で私を汚してつ、穢してつ、蹂躪してつ

……それが私の至上の幸福……」

熱ひゆく思わず囁む觀衆の息子をおひそれかしうるの色香を表す、パロロ。

チロと唇を舐めるしぐさなど、誰も彼女が昨日まで処女だったとは思えないほどに妖艶で、蠱惑的な魅力が孕まれていた。

「ハツ、リューマ様！？」

嗚呼、こちら、こちらから貴方様の香りが、今ボロボロ

辺りを見渡した彼女はきょろきょろと周囲を見渡し、一田散に駆けていく。

残されたナクトらは、ただ美麗のシスターの行動に、前屈みであんぐり口を開けることしか出来なかつた。

十六戦目（後書き）

変態シスター 覚醒

キャラ崩壊は激しいんでしょうか？

十七戦田（前書き）

ナクトくんって技能レベルとかあるんでしょうか？

「……あつ、あのつ……」

「あア、何か用か?」
「…………」

「いつ、……いえ……」

「ロシアム、闘神大会出場者控室にいるハ雲は田の前のリューマの
背中に視線を寄せる。

そんな自分の視線など眼中にないかのよつて、彼は長椅子にゴロリ
と横たわっていた。

聞きたい事は、たくさんある。

たくさんといつても、すべて同じ事に対しても、たくさんでも
ないのかもしねりない。

でも聞きたい事は、確かにある。

リューマと、ポロロムの関係。

いきなりあんな発言をされて、ただならぬ仲にあるところのは予想
がつく。

恐らく、肉体的なそれ。

キュッと胸がしまる。

閉じた手のひらを、軽くそこに添えてみる。

今、自分のこの胸に、あるそれは何なんだろう。

そもそもどうして、自分はこんなにも平静でいられないのだ？

冷静に、冷静に、八雲は頭を冷やしてゆく。

ポロロムとリコーマがただならぬ仲にある。

けどそれはそこまで、自分が気にするような事なのだろうか。

よく考えてみれば、自分に襲いかかるかもしかつた劣情を代わりに受け止めてくれているのだ。

つまり、簡単に考えるならば自分が性の捌け口にされなくなる可能性が高まつてくる。

記憶も曖昧な中で散らされた純潔、そこに無法者を侵入させなくて済むところこと。

どうせとも、これは諸手を上げて喜ぶべきことなはず。

……はずなのだが、そつやつて喜べない自分が今ここにいる。

何故か、と聞かれてもやはりわからない。

わからぬのだが、わからぬになりに、どうなく嫌な気持ちが胸に居座る。

「……言いたい事があんなりまつあつ言へ。

やつて、オドオド見られるのはウザいんだわ

〔…………〕

「あつ……すいません……」

「……ハア、勝手にしどけ」

「…………」

舌打ち一つ、ジロリ睨み付けるようなリューマの視線にハ雲はさらに委縮する。

彼はそんな彼女に見向きもせず、懐から一本の煙管をとりだした。雁首の火皿に丸めた煙草のようなものを取り出すと、マッシュらしきものでそれに火を付ける。

一口、一口、一息入れて三口。

噴き出す呼気とともに白い煙が控室に漂っていく。

それはヤニ臭ではなく、どこか香草のような匂いを持つていた。

山の中の、草木や樹木の香り。

ハ雲はそれに兄と探検に行つた故郷の山々を思い出していた。

思い出しに促されてからか、ハ雲の頭は段々と整理されていく。

先ほどの出来事を振り返つてみよう。

カテナイ亭から出たとことにボロロムがいて、彼女の発言でハ雲の頭は沸騰したはずだ。

だがそんなもの簡単に吹き飛んだ。

何故？

それはリューマに担がれたから。

首根っこ掴まれ、担がれるのはいつものことである。

だがいつもいつも、そんな事されると今まで考えていたことはすべ

て吹き飛んでしまつ。

これもまた、いつものことだ。

担がれるだけでなく、何氣なしに触れられたり、自分の行動を褒めてもらつたり。

そんな風に扱われるだけで、八雲は「これでもかといつぱりに赤くなつてしまつ。

恥ずかしいのと、そして他の感情が縫い交ぜになつて、八雲の身体を締め上げる。

けどそれは決して不快なんかじやなくて、ほかほかと、あたたかくなるような気持ちが彼女を覆う。

この気持ちは何なんだろう。

多分だけど、これがあるから「自分はポロロムに変な感情を抱いたのだろう」。

……厳密に言えども、ポロロムだけではないのかもしれない。

シユリにしても、バーーさんにしても、果てはステラにしても。リコーマが一緒にいるときは何か、胸に引っかかるものを感じていたのではないだろうか。

「リコーマさん、そろそろ試合時間ですか？」
「ありやー、またリコーマさん何かしたんですかね？」

「んう……ブハア～」

「…………」

「ケムたつ、何するんですか！？」

「ヤー臭……くはないですね、何でしょ？」

「ケケケ、了解了解。

ハ雲、その袋よこせ

「…………」

「…………はい…………」

突然入っていたシユリによりハ雲の思考は再び遮られる。

背後に浮かぶ文字に、心配かけてしまったかな、と少し俯き、やっぱり胸に引っかかりがあるように感じる。

若干重たい腰を椅子から上げて、彼女はリューマに小袋を手渡した。いつもは世色癌などのアイテムを入れているそれであるが、回復系統は大会では使用禁止なはずだ。

小首を傾げるハ雲にニヤリ口元を釣り上げたりューマ。手に持った煙管を遊ばせながら、彼は闘技場へと向けて歩きだしていく。

今回のリューマの対戦相手、『白井カタナ』は名の知れた女戦士である。

聖魔戦争にも参加しており、前線で長刀を振るう姿は圧巻。
『緋袴の長刀使い』なんてカツコイイのかカツコ悪いのかわからな
いが、異名まである人類でも屈指の実力を誇る存在だ。

美しき長刀使いとして知られるカタナは、同時に、禁欲的な求道者

としても知られている。

基本的に己との戦いの場である修行場、そして人類の敵である魔王や魔人たちとの戦いの場である魔人領と人間領との境界にしか赴かない彼女。

それがなぜこのような場に現れたのか、と聞かれるとアレなのであるが。

ともかくカタナは彼女の目的の為に、人類と魔人の戦争の場をほつぽり出してこの場に駆けつけている。

それだけ彼女と、その妹である『使い』白井クナイにとつて大切なものがここにはあるのだろう。

故に彼女らの氣概は半端じやない。

来年で30年、戦争は続いている事になる訳であるが少々人類はヤバ気なムードである。

聖魔教団が造り上げた闘神都市も、すでに魔人たちにより幾機か墜とされている。

長い戦争によつて人々の精神疲労も凄まじいものがある。

さらに人類側にとつての訃報は続く。

非魔法使いの中、唯一生身で闘将にすら匹敵する実力を秘めていると謳われていた剣士も戦死した。

蛮族と、少々罵られ氣味の彼らにとつてその存在は非常に大きな心の支えであった。

自分たちと変わらぬ魔法の使えない男が、剣片手に、それこそ魔法使いたちなど目にもくれないような活躍をしてみせる。

自分なわけではないが、けれども自分だつて頑張れる。

そんな気持ちを奮い立させてくれていたのだ。

だが彼は死んだ。

そしてそれにより聖魔教団を非難する声も高まっている。

彼が死んだのはきっと闘将へと変貌させるためだ、魔法使いの陰謀により彼は死んだ。

不満は募り、根も葉もないような噂が立ち、戦争開始当初とは比べ物にならないほどに士気は低下している。

彼が死んだ唯一の救いは、彼目当てで戦争に参加していた魔人の幾体かが魔人領に引っ込んだことくらいであろう。

といつても十数体の魔人は、魔物たちを率いて遊ぶように自分たちを蹂躪する。

魔人たちを切り裂けるといわれる『魔剣』や『聖刀』の担い手が現れたという話も聞かない。

人類は、特に非魔法使いたちは敗戦ムード全開なのだ。

だがその中でも、自ら前線に立ち人類を鼓舞する。

そんな存在の一人がカタナであるのだ。

だからこそ、彼女の氣概は半端ではない。

免除金である30000GOLDは仲間たちのカンパにより集まつた。

無論1GOLDたりとも無駄にしたくはない。

そんな彼女の気持ちがビンビンと、八雲には伝わって来ているのだ。

不安は胸を焦がし、気分を苛立たせる。

際限なく泳ぐ視線。

縋るような思いでリューマへとそれを投げかける。

「キキ首を鳴らす彼は、珍しくそれに気付いたのか」ひびきを向いた。

少し、緋色の瞳を見つめたリューマはいつものように不遜に顔を歪める。

刹那、ハ雲の顔はこれまでの赤が赤ではないほど紅く染まり上げた。不安も苛立ちも、すべて押し潰される。

心臓が早鐘を打つ、フラフラと視線が定まらない。

「……あう……」

ポテツと膝の力が抜けて椅子に腰を落としたハ雲。

「さてはて龍のコーナーより姿を現したのはリューマ選手……！」

「今回ほどのよつたな試合展開を見せてくれるのでしょうかー…？」

シユリのアナウンスも右から左に抜けてゆく。

攫われて、ここに来て、まったく見えなくて。

たつた一度だけ一瞬だけ、彼の背中に見えた文字。

「……まアハ雲は俺にとって必要だしな……、……あう……」

それがどんな意味を含んでのモノなのか、深く判断できないほどにハ雲の全身は火照っていた。

片手に長刀を携え、白井カタナは優雅に立つ。ゆらりと身を屈めると、腰に日本刀を差したままのリューマを窺う。

「……抜かないのか？」

「抜く必要ねエかもしけンだろ？」

「フツ……、前の試合の愚鈍なそれと私を同じと捉えるのか、貴方は？」

「わからんから抜かんつて言つてんのにアホなの、ねエアホなの？」

それよつと、お前の妹つて処女？」

「……弄るか、貴様……！」

ギリッと射殺すよつな視線。
陽光を受けて煌めく白刃。

ゲヘッと厭らしく彼が笑つた時、カタナは地面を蹴り疾走した。

大会一日目、最初の交差はカタナから。

滑るように地面を駆ける彼女は掬い上げるように、リューマの脇腹

目掛けで長刀を進ませた。

グガツと彼女の腕に負荷がかかる。

見れば刀身に近い柄の部分に草履が乗つかった。

乗せた足そのままリューマは長刀を地面に叩きつけようと体重をかける。

「刃乱楠ツ！！」

瞬間、カタナの持つた長刀の刀身は彼女の言葉に合わせて彼の足を刈り取るように動きを変える。

白い袴が宙を舞う。

加えて少量の血飛沫がその白を染め上げた。

「何とかタナ選手の持つた長刀が変形しました！？」

脚を怪我したと思われるリューマ選手、今後の試合に響かないか心配などころです！！

観客は歓声を上げて身を乗り出す。

そこを触り、ヌルリとした血を掬いとつたリューマは口元を弧月に歪めてみせた。

「ケケケ、やるじやん。

俺つてば勝つたつもりだつたんだけどねエ

「……いや、こちらこそ見縊っていた。

あの体勢か手刀が来るとは思わなかつたさ」

頬を血化粧で濡らしたカタナは、少し興奮したように口を開く。ピッと入った一本線、足元に落ちた艶々しい黒髪。リューマは長刀を踏みつけたのと同時に彼女目掛けて、手刀を放つていたのだ。

リューマが後ろに跳んだことにより距離をとった双方。再び力タナは長刀を構え、今度は両手を携え頭上にそれを持ち上げた。

ジリジリと、地面を擦りリューマへと接近するカタナ。

「いい武器使つてんな」

「父から貰つたものだ、『宝槍・刃乱楠』といつ

「ファンクス……ねエ。

長くてしなる柄だから、槍頭の動きが变幻つてとこか

上り片鎌の槍頭をもつ彼女の長刀。

うねる刃は蛇の如く、彼の脚に襲いかかつたのだ。

ジリジリと、更に距離を詰めるカタナ。それをじつと見つめるリューマ。

「でもさ、それって贋物だろ」

あつけらかんと言ひ放つたリューマの一言に、カタナの動きはピタリと止まった。

「……意味がわからないが」

「ケケケ、惚けちゃつてさ。

本物の槍頭は菊池だろ？が、どうからどう見ても違う」
先ほどから言つてゐる『上り片鎌』も『菊池』槍頭、つまり刀身の構造のことである。

『菊池』はごく一般的に我々が思いつくであろう長刀の刀身のこと、『上り片鎌』はそれにくつ付くように刃が付属した二股の刀身である。

斬撃の機能を強化する、引っ掛け、敵刃を捕らえるなど多機能化した『枝物』と呼ばれる刀身。

その刀身をカタナの長刀は持つてゐるのだ。

「あいやりや〜、天下の白井カタナ様がそんな嘘ついちやア いかんねエ」

ケタケタ楽しそうに笑うリューマをギッと見つめるカタナ。強張つていた顔をふつと緩めた彼女は、頭上に構えた長刀を緩くおろした。

「確かにな……いや、うん……すまない。

貴様如きこれで十分だと思っていたが……やはり私は見縊つていたようだな」

そつ告げてクルリ踵を返すと、シユリに向かつて声を上げる。

「すまないが、武器を変更したい。

「控室に戻ることを許してはくれないだらうか?」

「えつ、イヤそれは私の独断で決める訳には……」

「イイんじゃねエの?」

手に持つた小袋を放りながら、声をかけたのは対戦相手のリューマであった。

人の良さをうな、だからこそ不気味な笑みを浮かべた彼。

「俺は全然かまわねエゼイ」

「……はい、ではその意義を可決します」

「恩にあら、リューマビの」

ペコリ一礼した彼女は、開いた扉から控室の方へと駆けこんでいった。

少しの間があいて、カタナは新しい長刀片手に姿を現した。

白く長い柄に、黒い柄の日本刀を接続させたようないでたち。

だがそれは、先ほどまで刀が持っていた赤い柄の長刀とは比べ物にならないような存在感を醸し出していた。

「宝槍・刃乱楠だ」

その言葉に息を飲む観客。だが何処となく、やるせない表情を見せている。

自分勝手な真似をしたからか、とカタナは深く恥じる。ならば、この場をそれ以上に盛り上げればいいだけのこと。

「破アアアアアアアアアツー！」

そう感じ取った彼女は裂帛の気合を込める。緩み切っていた空気はとたん張りつめ、刃のような鋭さがカタナの全身から吹き上がってくる。

彼女に呼応してか、リューマもスラリ日本刀を抜き放つた。

地面とは水平に刀身を置き、やわらかに肩にそれを乗せた。通常の日本刀より、さらに長く鋭利な刀身。

恐らく『太刀』と呼ばれる種類のそれを右腕一本で軽々と支える。

「……まあいいや」

放つたリューマの言葉とともにカタナは疾走し、落ちた。

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ、真面目にやるわけねエだろバアアアカツー！」

見れば彼女と彼をつなぐ直線状に空いた大きな穴。

その中に落ちたカタナに切つ先を付けながら、リューマは厭味つたらしく声を上げた。

先ほどのカタナのいなくなつた間、彼は必死に穴を掘つていた。
そして出来上がつた落とし穴、そこに何の疑いもせず向かつて来た
彼女は落ちたという訳だ。

「ひつ……卑怯者、恥を知れ！！」

「ケケケ、ンな物知るかッ！」

「勝てばいいのさ勝てばよオ！！」

喚くカタナに悪人らしく笑うリューマ。

無論どれだけ喚こうが、彼の白刃は彼女の喉元を正確に捉え、そこ
を離さない。

結局不完全燃焼な空氣の中、カタナは負けを認めることしかできな
かつた。

十七戦田（後書き）

無茶な終わらせ方な試合……

やつぱりまだまだだなあ

十八戦目（前書き）

今回ちよつと妙な感じ

十八戦目

「うへへ セクロスセクロス。

今セクロスを求めて全力疾走している僕は闘神大会に出場する一般的な男の子。

強いて違うところをあげるとすれば、前の試合の勝ち方がちょっとおかしいってところかな。

ふと見ると通路に若い女が立っていた

「ウホッ！いい男……じゃないッ……！」

「ノリが悪い……やつてらんねエなア」

ギンッと強い眼差しでリューマを見つめるのは先ほどの試合、落とし穴なんてと古典的な手段で敗退となってしまった一人の女性。人類屈指の実力者（笑）、白井カタナが通路を塞ぐように立っていた。

「なにせ、負け認めただろ？ がテメエは……。

しつこい女は嫌われるゼイ」

「言つに事欠いて……貴様はッ……！」

立ち上るよつに滾らせていた怒氣はさらに天を突くよつて、膨れ上がる。

チリチリとした激しい殺氣。

やんのかコラ、と敵意むき出しのカタナにリューマは首をかしげた。

カタナはカタナでそんな彼の態度に不満を倍々と募らせる。清廉潔白、正々堂々を自らの信条としている彼女にとって、先ほどの試合は認められるものではなかつた。

勿論この大会のルールは知つてゐる。

だが己の身を生け贋として奉げてくれた妹、クナイの名誉のためにも、自分が正面から『負けた』とはつきり言い切れる相手でないと理解が出来ても納得が出来ないのだ。

「とりあえず邪魔、俺はその後ろに用があんだよ」

「あの～カタナさん、一応ルールですので」

リューマの背に隠れるように口を開けたシユリ。

元々彼をクナイの待つ部屋に案内するためにやつてきた訳であるが、普段の行いでも悪いのかとばつちりを受ける羽目となつていた。ガツンと彼女にも降りかかつてきたカタナの威圧感にサメザメ心で涙を流す。

スススッ、彼の後ろにさらに大きく自分の身を隠したシユリは、もう一度この大会におけるルールを思いかえしてみる。

まずは勝者の権利について。

勝者は対戦相手のパートナーの女性を、試合後24時間の間、自由にできる。

但し、性交以外の傷害、及び殺害は認めない。

対戦相手が女性であり、自分自身をパートナーとしていた場合もこ

れに準ずる。

そして敗戦時の罰則。

パートナーを試合後24時間の間、対戦者に預ける事。
その間にパートナーがどの様な目に遭つても、大会運営委員会及び
対戦者に責任を問う事はできない。

つまりこの場合、負けたカタナはパートナーのクナイを勝つたリュ
ーマに預けねばならない。

その上彼の行為を、邪魔してはいけないはず……なのである。

「カタナ選手、これって結構なルール違反なわけですよ。

リューマさんが申請とかしちゃうと、それこそ一発で一人とも労
働義務と罰則がかけられちゃうくらいには

現に出場者同士で私闘をしたせいで、失格となつた選手も既に存在
する。

流石にそのことを知つてか、少し気後れを見せるカタナ。

人類、非魔法使いたちにとつて今なくてはならない存在となつてい
る力タナ。

その彼女がこんなところで、それこそ三年間かそれ以上か、居座つ
ている訳にもいかないのだ。

そんな事態となれば士気の希薄化が進む前線が瓦解し、いざれ魔法
使いだけでは留めきれなくなつた魔人や魔物たちが怒濤の波の如く、
今の人類の居住区に流入してくるだろう。

こここの都市が幾ら大陸の東南部に存在し、その付近が戦争とはかけ
離れた治安の特殊区域にあるとしても、胡蝶の夢か水泡のように、

消え去つていいくであらうことは眼に見えている。

そのような事態になる訳にはいかない。
かと言つて、妹のクナイを自分の情けない失態のせいで、彼女の大切な純潔を散らす訳にもいかない。

ならば、自分が覚悟を決めよう。

そう思い彼女は考えを少し転換させた。

元々こんな事態を引き起こしたのもすべて自分が悪い。

偽善や自己満足かもしぬないが、自分の身を犠牲にこの場を乗り切り、とつとと前線へと復帰しようではないか。

第一、本来は一人で参加するつもりだったのだからとつとて覚悟は出来ている。

少し悪い言い方になるがクナイがそうさせる訳にはいかないと、やつてきたせいで今自分は氣を揉んでいる訳なのだ。

それに、だ。

こんなこと最愛の妹の前では口が裂けても言えないが、貧相な身体の彼女よりも自分が魅力的なはずである。

少し武道の邪魔になるくらいに育つた胸、引き締まつた腰、やわらかいはずの桃尻。

髪だつて肌だつて、まあ自分も女な訳で、多少は氣にする訳で、艶々しくハリがあり、男なら眉唾ものであると思つ。

魔法使い、非魔法使いに問わず男に迫られたり口説かれたり襲われかけたりした事もあるし、種族の壁を越えて魔物からも厭らしいねつとりとした視線を受けた事もある。

クナイはというと一部ががちよつと残念なためか、自分よりはその

量も質も劣つてゐると感じる。

後、加えていつなりばしつにこみつであるが、やつぱりカタナも女わけである。

20を越えた彼女。

Japanの、地元周辺のでは同年代の娘は皆が子を成し、幸せそうな家庭を築いている。

歳下の娘も、五つか六つ、七つせどりの歳の差であればほとんどの娘が結婚している。

Japanの女子の結婚適齢期はだいたい13～16歳ほど、許容範囲を求めれば18歳くらいまでであろうか。

早ければ10歳でも結婚が決まってくるようなそんな土地で、彼女はもう二三年もすれば折り返し。

20歳を超えると『年増』と呼ばれ、23歳を過ぎれば『中年増』、26歳を超えると『大年増』と呼ばれ、30歳を越えてしまえばまともな女性としては扱つてもうれない。

そんな場所で、今の今まで男性とともに手を握つた事も無く、恋愛や肉体関係なんて以ての外。

迫られたり告白されたりした事はあるといつても、答えた事なんてない。

十年か、いやまだ五年前くらいなひばしゃпонでも引く手多數であつたが今では全くの疎遠。

迫られたりなんてことはすべて前線の、Japan出身ではない男たちばかりだ。

Japanでは名の知れた寺の跡取り娘で、それゆえに禁欲的に過

「ごしてきた彼女。

だからそ、やはり関係を持つのは寺に婿養子に入ってくれる人で、尚且つ J a p a n 出身が望ましい。

そしてどうせなら、その人だけにすべてを捧げて、子を成したいと思う。

20を越えて、男性との一次接觸すら果たした事のないカタナは意外なほどに乙女であった。

引く手多数なころはその数に舞い上がってしまって、20が近くなると異様なまでに堅実になってしまって、結局今の歳。なのにその心は乙女、厄介なことこの上ないと自分でも自覚はしている。

だつたら今の状況は渡りに船なのではないか？

無理矢理奪われてしまう訳だがとりあえず経験は出来る訳だ。自分の心に残っている名残のようなモノも、この状況なら許容とうか諦めというか、ケリはどちらにしてもつけられる。

後は歳食うことで勝手に入るだけ入ってきた技術やらなんやらを必死に試して、経験無さそうな歳下を捕まえてしまえば……。

「わっ、私は何をツ……ー？」

「知るかボケ」

最後の意見は彼方に蹴り飛ばし、ふうふうと荒い息をつく。

ともかく人生は経験、武道も経験が大事。

凝り固まつたプライドというか、前時代の遺物というか、それをなくしてしまえば更なる高みに行ける……かもしない。

恐らく赤くなつてゐるであろう、火照つた顔を持ち上げて、強張つた精一杯の笑顔を向けてみせる。

「先ほどのはすまなかつただから私がそう私が妹のクナイの代わりにお前の相手をしてやろう。勘違いするなお前に負けを認めた訳で何でもない。そうだただただ妹のクナイが可哀想だからこの場は私が身代わりにならうという訳だ。幸いなのがなんのかはよくわからんが私には男性経験もあるし処女のクナイより貴様を満足させてやることだつて出来る筈だ。一応言っておくが違うぞ私はやりたくてやつているのでも何でもなくてただただルールルルルルだからだ。奉仕なんて言つことを貴様にしてやるのは私もひどく心外なわけだがこれはルール違反のお詫びだと思つて男なら度量を持つて受け入れてみせろ。さあ出は待ちに繰り出して闇に入つてまぐわいをしようではないか」

一息のうちに早口で言こきつたカタナはどこか達成感のようなものを漂わせる。

そんな彼女にリューマは照れくさそうな笑みを浮かべ、スッと手を差し出す。

カタナもプルプルと震える腕をゆっくり持ち上げ、彼の手の前での動きを止める。

触れるか触れないかの位置、そこでしばし引いたり出したりを繰り返したカタナは意を決し、リューマの手を握った。

そして投げられた、それはもう盛大な一本背負いで。

「瑞々しい処女がいるつてのに何で中年増の、嘘吐き処女を抱かねエといかねンだつつの。

「行き遅れはぶたバンバラと盛つてろ」

『ぶたバンバラ』とはこの世界で代表的な男の子モンスターのこと。安っぽい槍か剣と盾で武装するサスペンダー付きのズボンを履いた二足歩行のぶたで、人間を殺して楽しむのが仕事で生き甲斐という邪悪な種族である。

が、ある程度の実力となれば経験知要員として狩られるかなしい種族もある。

シユリから降り注ぐ痛い視線もなんのその、呆然とした表情で転がるカタナの脇を抜け、クナイがいるであろう扉へと手をかける。

刹那ドカツ、という音とともに、彼の顔の傍に深々と刃が突き刺さった。

そこには一匹の羅刹が立っていた。

先ほど桜色に染まっていた顔は何所へやら、ビキビキ青筋をたてた顔。

少し潤んでいた瞳に今光は無く、深く奥底が見えない闇を宿す。

壊れた機械のようにつぶやくカタナ。

一言一言に例えようもなく重い、怨念が含まれ、それがリューマの耳を犯す。

のつそりと、緩慢な動きで力タナは彼の隣に刺さつていた長刀を抜き取る。

ギュリギュリと彼女を覆っていた瘴気とも言える、朱黒のエネル

ギーがその手に携えた凶刃へと集まつていった。

「……おおッ、そいやアちょっと俺用事あるからね。」

ナガサキ、後は頼んだ」

「へッ、何言ひてゐんですかリューマさん…?」

「くッ……ナガサキ、テメエの活躍は多分忘れねエかも」

「何ですかそれはアアアアアッ…!…!…!」

「男なんて……みんな死ねばいいんだアッ…!…!…!」

もはや駆け出しているリューマと、訳のわからない状況に立ち入っていたシユリ。

長刀より発せられた伸びるような赤黒い奔流は、直線状のリューマをシユリごと巻き込み、その空間を抉り去つた。

「ほり前、リューマさんゾンビですゾンビ」

「人使いが荒いつての、自分でやれ自分で」

「なんですか、この美人のおねーさんがどうなつちやつてもいいん

ですか？」

「ハハツ、美人、テラワロス~~~~~」

迫るゾンビを蹴り飛ばし、無表情に笑つてみせるリューマ。
むうと膨れた顔のシユリなど全く氣にも留めていない。

襲い来る恐怖の彼女から逃げおおせた二人は現在、『教会と貯水池』にいた。

恐らく『必殺技』の類であるうカタナの攻撃を、シユリを抱えて何とか逃れたりリューマであるが、冷徹なる追跡者は一人の逃亡を許さなかつた。

街中だらうと関係なしに長刀を振り回すカタナとシユリを抱えて必死に逃亡を図るリューマ。

二人+の愉快とは言い難い追いかけっこは、迷宮に入らうとした冒險者の一人を人身御供にする事で何とか終結を迎えた。

「……彼、大丈夫なんでしょうか」

「知るカンなの、俺には関係ねエし……」

「ホントにイイ性格してますねエ……あ、褒めてないですよ

照れるリューマに釘を刺し、シユリはにっこり笑つてみせる。

迷宮に入つて三時間がそこらへらい。

傷つきボロボロな様子でゾンビに囲まれていたナクトを散々からかい、とりあえず追いかけてやつて来たボロロムにブン投げた後、彼

らはのんびり迷宮を探索していた。

とはいっても何故か泥だらけになつてゐる迷宮内、女の子にそんなとこ歩かせるんですか、とでも言いたげなシユリ無言の要求により、彼女は今リューマの背中にいる。

お帰り盆栽はハ雲に預けてあるためここにはないし、シユリはもちらん持つていない。

結果として入口にある脱出用魔法陣へと向けて、二人、もとい一人ぶらぶら歩いているのだ

「にしても『必殺技』、やつぱりカタナ選手つてその名に違わぬ実力でしたね」

ガンガンとゾンビを足蹴にしていくリューマに対し、元々おしゃべりなのかシユリは口をどんどん聞く。

まあそれがリューマにとつて氣分転換にもなるのか、彼からは文句の一つもない。

ゾンビは倒すのには時間がかかるが、今はそんな必要も特にない。動きのノロい彼らを少し遠ざける、逃げるを繰り返す彼にとつてはうるさいくらいがちょうどいいのだろうか。

ちなみに今話題に上がっている『必殺技』とは主に戦闘・魔法系の技能レベル以上の者が開発・習得可能な大技のこと。

大意として、その人物にとつての最高の攻撃手段である。

『二日考えて出来るようになった』とか『一日練習したら剣から衝撃破が出るようになった』など、実に才能頼りの能力である面が伺える技である。

これは例えばとある流派とか、そこで教わる攻撃手段とか、そんな

ものは一線を画す威力や攻撃範囲を誇つており、才能のない人物はたとえ天地がひっくりかえるような事が起こっても習得できない技能である。

それを使用したといふことは、やはり折一した実力を彼女は持つていたという訳だ。

「正面から戦つてたゞくなつたかわかりませんでしたね~」

「ケケケ、俺が負けてたつてか?」

「いえいえ、どちらにしてもリューマさんが勝つてたと思いますよ

意外な返しに少しおどけた様子のリューマ。

てつくり非難でもされると思つていた彼にとって、彼女の言葉は予想外であつた。

「落とし穴なんて面倒な真似した訳だつて何があるわけですかね?」

「そこを教えてくださつたらおねーさん、喜んじゃいますよ~」

「まあ暇でもあつたらな。

ンな」とよりナガサキ、意外に胸あるじょん

「……セクハラですよ」

じつとりとした、薄く開いた目から突き刺さる視線に怯むことなく歩みは進む。

結構な時間一人で居る訳であるが、別段息苦しいといふ訳でもなく、友人同士のような関係を作つていたシユリとリューマ。

からかいからかわれ、ケタケタ雑談を交えながら歩みはそりに進む。

「んんっ……ああっ……」

それを止めたのは、耳に飛び込んだ艶っぽい喘ぎ声だった。

「よつし、見に行ひばせ」

「うつう、リューマさん、不味くないですか？」

「静かな湖畔の森の影から、男と女の声がする、あんっ、いやん、奥はダメっ」

「……やつぱりセクハラですね~」

と、言つてしまふものの、リューマの背中にこるため必然的に出歯
龜をしてしまつシコリ。

興味はやはりあるひじへ、墓石の脇に姿を隠し、顔を乗り出してみ
せた。

「あなたっ……あなたあ……」

声を上げていたのは喪服姿の、妙齢の美女。

肌蹴た胸は色っぽく、その先端からは母乳が漏れ出している。

「……ひ、ひ、ひああっ……」

そして彼女を抱え上げていた相手は腐った皮膚を剥き出しに、必死
に腰を振り動かすのは魂の消えた、肉体だけの存在だった。

十八戦目（後書き）

力タナさんは22歳

十九戦目（前書き）

好みはうるさい方なりユーマ

十九戦目

二回戦へと突入し始めた大会六日目、リューマは毅然とした態度の女性に睨みつけられていた。

命を落とした冒険者たちを弔う、『教会と貯水池』にある墓地。そのとある一角、石造りの墓の前で、小さいながらも鋭さをにじみ出させるナイフを手にした一人の女性。

黒い喪服姿の、『千代』という名の彼女は手にした凶刃をリューマに向けた振りかざす。

「貴方がつ……、貴方があの人を……！？」

涙で頬を濡らし、我武者羅にそれを振るう。想いの籠つたそれを後退しつつ避けるリューマ。

やがて壁に背を付いた彼の胸元に小さな凶器は突き立つ。鈍い痛みがリューマを襲う。だがそれを意にも返さぬ彼は、柄を握り込んだ細腕を取り、千代を力づくに引き倒した。

「なア、なんでテメエは怒つてんだ？」

アンタ襲つてた肉の塊叩き斬つただけだろつよ」

「違うッ、あの人は……あの人は私の夫なのに……！」

ようやく、ようやく、ようやく再会できたのになんであなたは邪魔をしたんですかッ！？」

リュー、マの身体の下、もがく千代の瞳は妖しく光る。

人間としての倫理とか、道徳とか、そんなものを何か別のモノの為に捨て去つたような狂氣を孕んで。

しばらぐの間シユリとともに一人の行為を出歯龜をしていたリュー
マ。

が、突如繋がつていた二人の前に現れ動く死体を一刀の下に切り捨てたのだ。

傍目から見れば彼はモンスターに襲われている婦女子を助けた訳で、何の非難も受ける理由は見渡らないはずである。だが千代はしばし呆然とした後、肌蹴た胸を隠そうともせず懐に忍ばせていた短刀でリューマに斬りかかってきた。

「神の思し召しを……再びあの人につれられた奇跡を……どうしてあなたに阻まれねばならないんですッ！！」

— あの人、夫、アレが？

千代の言葉を信じるならば、今だ蠢くアレは彼女の夫らしい。

元冒険者で、この迷宮の探索を行つていたらしいがモンスターの襲撃により敢え無くその命を落としてしまつたそうだ。

結果未亡人となってしまった彼女はたまたまAL教支部のあつたこの墓地に夫を埋葬し、毎日欠かさずその世話をし続いているのだ。

聞けば一途な妻の美しい話であるが、リューマは何がおかしかった

のか大爆笑。

大きな笑い声を隠そつともせず、ゲラゲラト品に晒す。

「ぐだらねエ、ぐだらねエ、ぐだらねエなアツ！

思い出に逃げて過去に固執し、今も先も見ようともしねエ……。

だから惚れた相手の顔もわからんなくなつまうんだよオツ」

「なツ……、貴方に何がわかると「うんですかツ！？」

「知るかんなの」

飛び出して来たリューマの言葉にズルツと口ヶてしまつシコリ。てつくり千代を慰めるか戒めるかすると思つていたのに、とんだ予想外である。

何度も述べるようであるがゾンビとは魂の無くなつた肉体だけの存在だ。

肉体という器に魂が入り込むこむによつて人やモンスターは意志を持ち行動できるというのがA・L教の教えであり、だからこそ器だけの存在は愚かで、忌むべき存在なのである。

故に元の魂が本能のみとなつた器によりその輝きを穢さぬよう、彼らはゾンビたちをいち早く砂に帰し消滅させようとする。

その事を懇切丁寧に教え込んでやるのか、と少々期待していたのだが裏切られた気分だ。

「俺はただ……テメエの身体ゾンビ如きにやあもつたといなと思つただけよ！」

ひどく男らしい発言ではあるが、最低な発言である。

先までの行為で滲んでいた母乳を、リコーエは乳房に口を近付け一気に吸い上げた。

「いやあっ、やめてっ……んんっー」

「ケケケ、甘い声が出ちゃつてるぜイ？」

覚えている訳ではないが口に広がる懐かしい味。リコーエは倒置的な欲望がむくむくとわき上がり、下半身へと収束していくのを感じた。

本来なら一回戦勝利といつゝと彼はクナイを抱いていたはずである。

だが何の因果かカタナに邪魔をされ、来る必要もなかつた迷宮へと足を運ぶはめになつていた。

完全に『女を抱く』という思いに傾いていた彼の心であるが、それを阻止されたとなれば行き場のない欲望はどこに行けばよかつたのだろう。

加えてリコーエの背中を押していたやわらかい双子山もまた、その欲望を加速させる。

しかし加速させるだけさせといて、じじでシコリを押し倒して大会失格となる訳にもいかず、頼みの綱という事でやつて来たポロロムの教会でもナクトの大怪我により志半ばでそれも落ちた。

まだ治療中で無ければナクトなんぞ無視してその場で押し倒しても良かつたのだが、すでにお帰り盆栽まで彼の懐から暴き出して、その枝を折ろうとしていたところだった。

ポロロムもまだA級教シスターとしての自覚はあるらしく、早口で

まくじ立てるといつとひじかに行ってしまった。

簡単に言えばリコーエの息子は限界であった。

そこに極上の餌が舞い込んで来た。

器量も身体つきも実際にすばらしい、花丸をあげたいほどい。

乳房を絞り上げるように揉みしだくと、先端から飛沫のように母乳が飛び散る。

それを手の平に溜めると、わざとはしたない音を立てて飲む。唇の端から白い液体を垂れ流し、不遜に口元を釣り上げるリコーエには何所か妖艶に千代の目に映った。

思わず頬が赤くなる。

同時に乳房に受けた刺激により流れかけっていた意識をハッと取り戻し、黒い喪服でそこを隠そうと躍起になった。

「あっ……ああ、いつ、やめっ……て……」

「……なア、アンタ売春してるらしいな。

金がいる……何の為だろうね?」

リコーエの太い腕を千代のか細い腕で止められるわけもなく、彼の蹂躪は続く。

乳房を撫でていた無骨な手の平は、やがて段々と下へ下へ侵攻する。

「墓の世話をするためだろ?」

いやー、身体売つてまで世話をされるなんて愁傷なこつて、アレも

喜んでるんじゃね？

「えつ……いあ……ああつ」

リューマ向けた視線の先、そこには体を真つ一つに割られてもまだ蠢くゾンビがいた。

思わず顔を青くする千代は彼を拒むために徹底的に攻勢の姿勢を見せる。

だがそれは彼女の頭の中だけで、すでに先ほどの行為により体を火照らせ濡らしきっていた千代にリューマを拒む事は出来なかつた。

弱々しく震える手はやさしく彼の胸板を押す。

それはかつて触れた夫などより幾倍も硬く分厚く、強い男の香りが千代の鼻孔へと飛び込んできた。

その時、千代の身体はふわりと宙に浮いた。

力強いリューマの両腕に抱かれた彼女は、とつと彼にしがみ付く。だがそれがいけなかつた。

先ほど以上の強い雄の香りが千代の脳内を侵食する。

これまでに身体を開いたどんな男よりも強烈で苛烈なニオイ。

今だ胸元に刺さつた短刀より流れる鮮血も色っぽく、自分の体の奥からさらに熱いものが溢れてくるように感じじる。

「……じゃあや、こうなつたらどうするよ?」

千代の中の変化に気が付いていないのか、リューマはすいすい歩みを進める。

そして割れたゾンビの前に立ち止まると、躊躇い無くその頭を踏みつぶした。

「……いや……い、やあ……、……あな……た……」

「カテナイ亭ってどこに俺はいる。」

買って欲しけりや、テメエの人生ごと残らず買い取つてやるぜ！」

パツと力を抜かれる事で千代はグシャグシャに潰れた腐つた肉の絨毯の上に転がされた。

彼女と鼻先が触れるか触れまいかといつ距離で、リューマはにっこり笑うとクルリ踵を返す。

そうして墓石の後ろ、真っ赤な頬をしたショリをひょいと抱ぎ上げると、振り返ることなく墓地を後にした。

「昼間は失礼を、そして感謝いたします」「

「姉共々、リューマどのにて向と云つてよいか……」

ショリを口ロシアムへと連れ帰り、カテナイ亭へと帰つて來たリューマは田の前で土下座をする姉妹相手に偉そうにふんぞり返つている。

ステラはやせこじへなりそつなのでマル、テの下でお夕飯、しつかり夕食代を取られた。

ハ雲はリューマの後ろにひょこんと正座し、ハラハラと事の顛末を

見守っている。

……視線の半分以上は恥ずかしそうに伏せ眼になりながら、彼へと注がれているのだが。

「リューマジのおかげで、私たちの仇の手がかりが見つかりました」

「そが、じゃあ礼しろ今しろ身体で払え」

「はつ、恥ずかしながら……」

「ちえんじで」

彼女ら、白井カタナ・クナイ姉妹の話を纏める、と父の仇の手がかりがつかめたという事だ。

二人が人類存亡危機的状況の今、ここに来た理由はそのためであった。

現在非魔法使いたちにとつて、娯楽の地となつてている闘神都市を中心とする一帯。

主にここから非魔法使いたちへの情報などは配信されている。

魔法ビジョンの番組も新聞も雑誌も、この一帯がその根幹をなしているのだ。

そのためこの一帯は非戦争地域となつてている訳であるが、その話はこじら邊にしておく。

まだ魔法使いたちの利用する技術のすべてが非魔法使いたちに行き渡つていないので静止画でしか、魔法ビジョンによる番組をお届する事は出来ないのだが、それにより一人は一年前の闘神大会である事実を知ることとなつた。

十年前、幼い姉妹から父を奪った男が使っていた魔のアイテム、それを持つ者が闘神大会の準決勝まで勝ち残ったというのだ。

アイテムの名は『夢ノート』、名前を書き込まれた者は死亡するという卑怯極まりない効果を持つている。

その所持者『ウイング・シードマン』は父の仇よりもずっと若く、同一人物である可能性は低かったが、父の仇を見つける手がかりには違ひなかつた。

かくて昨年の大会でベスト4入りを果たしたシードマンは、来年度の大会への出場を既に表明していた。

故に彼女は同じ大会への出場を決意したのである。

そしてどうも近寄り難かつたのだが、とあるきっかけにより彼との接触が出来たのだ。

それは昼間に行われたリューマとカタナの追いかけっこ、その最後人身御供にされた冒険者こそシードマンその人であった。

とつさの判断で彼に直撃させることを防ぎ、そのまま思いの丈をシードマンにぶつけたカタナ。

それにより父の仇と思われる人物の名前を彼のパートナーの少女、夢ノートを持って倒れていた『アオイ』から聞き出したのだ。

尤もアオイは記憶喪失だったらしく、唯一覚えていた『ダル・ゴルチ』という名前のみしか手がかりを得る事は出来なかつた。だがそれでも十年間でたつた一つの手がありである。

二人にとつては天啓であった。

「……俺ンとこ来る理由ねエだろ」

「いえそれは……一角の武人でありながら、その……逃げるなどと

「あア、俺に文句でも言つに来たのか？」

「違います、逃げたのは……自分で……」

そう告げるとカタナは持ち上げていた頭を床に擦りつけんばかりに下げる。

「どうか、この卑怯な私に一時の情けのお恵みを」

要は脇間はこつちが悪かった、だからお仕置きしてください、といふところ。

薄い眼でカタナを見つめるリューマ。

その視線に気付いたのか、クナイもまた頭を下げる。どうやら彼女も自分を捧げるようだ。

まあこれがルール上普通な事である。

すでにルールを犯し、二人共に鬪神としての無償労働が確定しているのだが、やはり元々真っ直ぐな気質なのだろう。

カタナの言葉に俯いていた八雲はチラと一人に視線を移す。背後に見える心の文字も、覚悟を決めているようだ。

何となく、何となしに、理由はまだ分からぬが胸が詰まる。だから向けたくて向けれなかつたリューマへの眼差しは、彼の声を聞いた事でしつかり視界のど真ん中に捉えれるようになった。

「やだ

「なつ、何故ですか！？」

「私もお姉ちゃんも、本氣で……覚悟も……」

「そだなア、投げやりな感じが興奮しね。」

「ンなテメHに無駄打ちするよか……イイのがどうやら来たみたいだからなア。」

そう言つとリューマは立ちあがり、腰に日本刀を差す。

立ち上がりうとしていたハ雲を手で制し、扉の方へと歩みを進める。

「次会つ時にやあもちつと色氣つてもんを考えとけ、処女姉妹」

扉は閉まり、リューマはカテナイトを後にする。

ふうと夜の冷たい空気を吸い込んで、通りの陰に隠れた女に向かってニンマリ、三田田のように口を歪めてみせた。

十九戦目（後書き）

最後の女性はあの方

妙な感じはやはりぬぐこられない……

「あーと欠伸を一つ落とし、リューマは見知らぬ天井を見上げる。Ja pan風の家屋、畳の上に曳かれた布団をはねのけて、鼻孔をくすぐる匂いの下へと歩みを進めた。

黒の喪服ではなく紫陽花色の美しい着物に身を包んだ女性は、小さな台所の前でトントンとまな板を叩く。

きざんだ野菜を鍋の中に入れて、自家製味噌を足して少しがき混ぜ。小さな皿にそれをほんのり、上品に口元に運び味を確かめた。

揚々、上出来な味に胸を張り、米に魚に豆腐におひたし、いかなごの佃煮と料理をちやぶ台へと並べる。

箸はいつものように二膳、いつもとは違ひ皿の前の茶碗からも白い湯気が立ち上っていた。

「白飯に味噌汁、豆腐に佃煮……イヤイヤわかつてんね」

台所から襖一つ越えた先の茶の間に、男は無遠慮に足を踏み入れた。鍋のような肉体を惜しげもなく晒して、腰に褲が一つ巻かれている出で立ちで。

「……おはよの……いざれこます」

昨夜の情事を思い出させるように彼の胸元に残る、赤い印に誇らしくとも千代の顔は赤くなる。

夫の墓を世話するために身を開いたどんな男よりも、記憶の彼方にある夫との事よりも、はしたなく牡を求めた自分の牝。

それは自己嫌悪に千代を陥らせ、同時に彼女の中にあつた操に対し、その観念というモノを打ち壊していた。

千代もまたJapanの女性であり、貞操觀念は強い方だ。だが冒險者を志していた同じ村の夫の姿に心奪われ、夜逃げ当然で大陸へと渡つて来た。

結局のところ彼女の夫には大した才能がなかつたため迷宮で命を落とすこととなつてしまつたが、その四年前までは他の男など知りもしなかつた。

夢に向かうその姿に少女時代からの初恋が絶妙なさじ加減で混ぜ込まれ、心底惚れて彼女は真つ直ぐに彼を見続けていたのだ。

しかし死んでしまつてから、彼女の人生には暗い灯が墮ちていた。世界は色を失い、貯蓄を切り崩しながら夫の墓の前で泣く毎日。单调でつまらない人生が千代を蝕んでいた。

内へ内へと籠つていた千代であるが、そもそも我儘を言つていられない事態というものは訪れた。

貯蓄は無くなり、手元にある金品の類はすべて夫との思い出の品ばかり。

今居るこの家だつて、彼が自分の為にと建ててくれた一品だ。

どうしても、彼女はそれらを捨てる事が出来なかつた。

その結果、千代は売春という行為を思いついた。

夫以外に一度と無く……いや、たつた一度だけときめいた事のある胸を押さえて、彼女は股を開いた。

金額も大したものでもなく、女一人ならば一週間なんとかなるか程度で。

まだやはり思い出を捨てきれないのか、夫の面影を持つ男を探して。

「相も変わらずイイ腕……うむ、うまいゼイ」

「ふふつ、そう言つてももうえるとうれしいですね」

もしゃもしゃ朝食を搔き込むリューマに思わず千代の顔はほころぶ。

「……そういえば……貴方は何故こんなところにいらっしゃる？」

「さア、ンなモノどっちでもイイだろ？が

「そうかも……しれない、……なんて言える場合じや」

「イイの、俺がイイって言つてる、これがすべてだろ？よ

銳くなつたリューマの視線に思わず萎縮する千代。

実はこの一人、会合も情事も初めてではなかつた。

彼女の夫がいまだ存命の時に幾度か会つた事のある彼女が夫を失い始めての青春に選んだ相手、それがリューマだつた。

思い返せば時の経つのは早く、もう三年近くが経過している。だが今もまだ彼女の秘所は彼の息子にぴつたりと合致した。

ホントかウソかはわからないが、男を愛する女の性器の構造は、その男をガツチリと受け止められるようなものへと変化していくらしい。

生物として効率的に精子を受け取り受精するために起る現象で、まさしく生命の神秘といつやつである。

これには肉体的快樂と精神的快樂、一つが合わさった時にこそ発生するらしく、幾分感じが違うと思ったならば精神的にも傾いている浮氣が起っているといつ訳だ。

何が言いたいかといふと、要は夫を失つて一年少したつたころには千代の心はリューマに傾いていたということ。彼女が聞けばすぐさま反応するだろうが、本心はやはり彼女にしかわからない。

ともかく一人には面識があつて、今リューマの周りの人間は誰も知らない彼の過去を千代は知つており、アレだけ酷い真似をされたにもかかわらず彼女は彼を受け入れた。この事柄たちだけは変えようのない事実である。

「えいせつさん、じゃあ俺は帰るぜ」

「あつ……」

素つ気なくも田の前の食物を平らげたりューマは、いつものようく白い着物を着ると刀を差して長屋のような家から出でていった。小さく上げた千代の声は彼に聞く事も無く、外と内を隔てる壁に当たり墜落した。

カテナイ亭のリューマの部屋の中、田の前に立つ一人にリューマは口をあんぐりと開けた。

申し訳なさそう一ガ笑いとともに、こちらに意味ありげな視線を投げかけてくるのは白井姉妹。

「帰れ、失せろ、寧ろ死ね」

「リューマさん、そんな風に言わなくて……」

「……何様だ、テメエは……？」

辛辣なリューマの言葉に思わず食つてかかつた八雲。しかし胸倉をグイと掴み上げられ、足が畳から離れていく。

「何で俺がこいつらの脱走なんて手引きしなきゃならねンだ……？」

こつからテメエはそんな事安請け合いで出来るまで偉くなつたンだ
……、なア？」

昨日リューマの心が見えたことなど嘘のよつて彼の後ろには無言の空間が広がる。
心なしか、どこか淀んだ禍々しいオーラのよつたなものまで見える始末。

鋭い視線と怜俐な態度は自分を攫つてきて会合した初めての日、と言つてもまだ一週間ほどしか経つていないといつての遙か昔の出来事のように思えた時と寸分違わぬものであった。

少々傍若ながらもある程度の気配りのよつたものをハ雲相手に見せて、いたリューマ。

無碍に畳に彼女を転がす彼の姿に思わずカタナはリューマに向かおうと腰を上げる。

だがそれよりも速く、彼の手にした日本刀の切つ先はカタナの眼前へと突き付けられていた。

「それ以前に何で俺のところにお前らは来たんだ、あア！？」

脱走、大いに結構、勝手にやつてくれ……俺にやあ微塵も関係ないんでねエ

「利ならばある！

もとはクナイを救うために用意した3万GOOLD、これを貴方に差し出す！！

「金の問題じやあねエんだよ、ダボがッ！

だつたら妹救つてテメエがワビ入れに行けばすべてお仕舞いな話だらうよ、……テメエの都合で俺を巻き込むなや……」

「だが元はと言えば……」「勝つた俺が悪いなんぞ餓鬼の戯言、言つんじやねえぞ？」「……つづ！」

力チと刃を下げ、リューマはカタナの黒髪を握り上げる。

大会に出るといつこじとは皆が皆、それなりの覚悟を決めているとい

うこと。

出場者は死ぬかもしぬれば負ければパートナーを差し出すかもしぬないといふこと、パートナーは負ければ蹂躪されるかもしぬないといふこと。

承諾が事前にしろ事後にしろ、勧んでにしろ無理矢理にしろ、この場で試合に出でしまつたそれぞれに突きつけられ受け入れねばならない事実はたつた一つだ。

『負けた対戦相手のパートナーは闘神都市で無料奉仕、問題を起した出場者は即刻失格』。

唯一の非魔法使いたちに解放された公認の娛樂都市、戦争とは無関係に過ぎせる一帯の中心。

『平和』と『快樂』と『榮華』の象徴ともいえるこの場所だからこそ、厳しいルールによって縛られている。だからこそルールはプライドより、金より、道徳より、倫理より、何よりも重い。

『強者こそ正義』という子供でも分かるような理屈をルールの根幹とするからこそ誰にも縛られることなく、非魔法使いたちが心の底から楽しめる場となつてしているのだ。

ここまで今は深刻な事態となつているがぶつちやけてしまえばリューマが気のせいっスね、とでも言えば終わる事柄だった。カタナが暴れまわって、公共のものや個人のものを破壊する前ならばだが。

試合が終わりカタナがクナイを一応差し出した時点で、とりあえず闘神大会に於けるカタナを縛るルールは消える。

落とし穴に落ちて負けたなんて言つ悪評は付いて回るかもしないが、彼女は自由の身だ。

あとは一晩我慢してしまえばすべてが終わるはずだった、だったのだ。

だがまあいろいろあって、じく簡素にいえば沸点超えた単細胞でどうしようもないお嬢さんが一人いらして、気がつけば彼女のもとにはゼロが見るのも嫌になるくらいの請求書が届いていたということ。

そもそも3万GOLDは当初の主人公、ナクトノ発言にもより凄まじく高価なお値段のようにも思える。

が、実はこれ、そこまででもない。

ランスらの生きる時代ならば一般人の年収は約4万GOLDほど、リューマらが生きる今ならば非魔法使いである一般人の年収は約1万GOLDほどだ。

三年分と考えれば酷く多くも感じるがあくまで平均、そこそこの冒険者ならば一年ほどで稼ぐ金額。

加えて世界中が戦争ムードなため聖真教団の経済事情自体は潤つており、最前線ならばこれまた一年ほどで稼げるお値段だ。

といつても冒険者も戦争もお金がかかる。

食事やら武器やら防具やら道具やらで半分以上が消え、博打やら女やらに湯水のようにお金を使う性格の者たちが多い。

結局一年終わって手元に残るのは雀の涙程度。

カタナやクナイはそこまで呆けた使い方はしなかつたが必要経費以外金銭の類を受け取らうとしなかつた。

実際に素晴らしい精神ではあるが、結果として搾り出せるお金というものは目の前の3万GOLDのみとなっているのだ。

つまりすぐ一金額の賠償請求 お金ない けど早く戦争して帰らな
いと でもお金ない 踏み倒そう 手伝つてとこうことだ。

今

「手伝つてくださいねば犯されたと有りぬ尊を流して回つます、

「ケケケ、『勝手に』」

「あつ、明日からまたも元外を歩けなくなりますよー?」

「俺、ンなもの気にしねエ」

「でつ、ですがつ「お姉ちゃん!」……クナイ……?」

「私が『』で代わりをするからお姉ちゃんは戻つて!」

早くしないと……本当にこいつまで攻め込まれてしまつかもしれ
ないのこつ……」「……

「ならば私が『三文芝居は外でやれ、ウゼ』……だったら何か考
えをくれてもよいではありますか……」

ついに逆ギレである。

この場限りのことと言えばリューマは向の非もない清廉潔白、叩け
ど埃のほの字も出でこないほどだ。

だが彼女たちの中では本気で切羽詰まつた状態。行きようのない気持ちは爆発し、ついには矛先をしつかりと彼へと固定してしまつた。

親の仇を睨み殺さんばかりに鋭い視線のカタナに、リューマはついにキレた。

「……そつか……ちよづびイイ、ステラもそろそろ行かにゃあならんかつたしなア」

鞘の中に納められていた白刃は刹那、空気に触れる。ボトリと肉が畳に落ちる音とともにカタナの手の甲、魔法印の押されていはるはずの場所は抉り取られていた。

「があつ……ああああああああああああああああああつ……」

薄皮一枚なんてヌルイこと言わずに指の付け根から肘まで、骨が剥き出しへなるように綺麗にそここの肉は剥ぎ取られた。

「これでテメエの戦争行き片道チケットを取つてやるよ。

……八雲、蹲つてる暇がある前にステラ呼んでこいや

ペロリ切り身となつたカタナの腕の肉を手に取りひらひら、彼は呆け口を押さえる八雲の首根っこを掴み上げ部屋の外へと放り出した。

「余計な音、立てんじやねエ」

バレようが俺には何の被害もねエンだからな

掴んだ肉片を床に落とし、グジャリ踏み潰したリューマは何の感慨も抱いていないようなガラス玉のような瞳で倒れ伏す姉妹を見ていた。

一十一戦目（後書き）

千代トリューマ、過去に関係あり、確認

一一一 戰田（前書き）

今回もいまいち上手くいかない……

難しいですね、小説書くつて

『うし』と呼ばれる生物が存在する。

丸っこい赤い体で猫のようなヒゲと一本の角があり、みやーみやーと鳴くこの世界において最もメジヤーな家畜だ。

うし車などの移動手段として多方面で広く使われる反面、女の子モンスターの一種『うし使い』の相棒も務める。

その大きさは馬サイズから象めいた大きさまで様々で、主に都市間の一般的な交通手段として『うしバス』がある。

勿論、この鬪神都市にもうしバスは存在し、東西南北すべての方向へ向けて運行を行っている。

その内の一つ、西の魔人領方向へと向けて歩を進めるうしバスの停留所にいくつかの影があつた。

一つの大きな麻袋を足元に置いた女性と少女、彼女らと向かい合うように立つた男が一人と女が二人。

着物姿の千代は丁髷頭のリューマに向けて頭を下げた。

「では私は……行きます、あちらの方へ」

「それがいいや、ガキ置いてここにまで来るつてのがまず間違つてんだろうが」

「そり……ですね。

母親として、私は決してしてはいけないはずの「あ、長くなる? だつたら止めて」……ふふつ、そうします」

千代の言葉を遮るリコーマに笑顔を返した彼女。

母乳が出る、という事はそれなりの年頃の子どもがいる訳だ。

ちょっと体质が特殊らしく、子供が生まれて三年以上経っているのだが未だに溢れるように出でてくる。

精神的なものが恐らく影響しているのだろうが、その話は一先ず置いておこう。

千代は友人に子供を預けて大会の前後三ヶ月ずつの間、闘神都市の家にて生活を続けていた。

彼女の夫もまた大会の出場者で、その時のパートナーが千代であった。

結局予選敗退で、どうせならとこいつ事でマビル迷宮に潜っていたのだがそこで命を落としたところである。

そんな訳で千代にとって大会は特別な意味を持つ行事なのだ。

娘に悪いとは思っていても、どうしても自分の中の女に逆らえず、そこへ足を運んでしまう。

自分はダメな母親だとは常に自覚していても、勝手にそちらへと足が動き、気がつけばいつもの場所へと赴いているのだ。

「あの……千代さんはどちらまで？」

「私は『骨の森』の近くまで。

今、空の闘神都市は『サーレン山』の方へ数が多く偏っていますから……。

非魔法使いたちの本陣はそちらにあると思うので

「ううむ……つてことは千代さん、戦争に参加するんですか……？」

「まあ、お金を稼ぐにはそれが手っ取り早いですしね……。

一度と行かないよことは思つていていたんですが、売春は……もつ

チラとリューマへと視線を移す千代。

ハ雲と羽純はそんな彼女に気がつかないくらい、ポカーンと美少女の顔が崩れるほど口を大きく開けていた。

まさか虫も殺せないよに見えるこの美人さんが、あらうことか戦争に参加しようかといふのだ。

剣を携え魔物に向かう。

槍を片手に屈強な男たちと肩を並べる。

弓を引き絞り必殺の矢を放つ。

魔法を使う怪しげな魔女、というのが失礼ながらなんとか一番簡単に想像できたが、ならば向かう先はまず『ゲート』であろう。

どちらにせよ目の前の彼女が『闘い』という行為に身を置くという場面がまるで予想もつかない。

ちなみにここで言う『ゲート』とは文字通り空の闘神都市と地上をつなぐ輸送システムのことである。

魔法使いと魔鉄匠たちのみが通過を許された、大陸に全部で二十四個存在する転移魔法陣。

最新式の鉄兵たちによつて守られた、陸と空を繋ぐ唯一の通路だ。

元々兵器であることは機密であった空中移動要塞『闘神都市』であるが、対魔人用に作られただけあってその防御システムは極めて優

秀だ。

魔力の供給によって様々な魔法を放つ砲台や工場から生産される鉄兵。

更に何らかの手段を用いて警護用に駆けられた『ドラゴン』が多数存在している。

ダメ押しが体長3mにも及ぶ遠隔操作可能な巨大な鋼鉄の操り人形『闘神』。

これは強力な力を誇る魔人とも互角に戦えるという聖魔教団の切り札で、都市の呼び名の由来にもなっている。

30年ほど魔人と戦争を行い続けただけあって、疲弊しているとはいえ強大な武力を有している聖魔教団。空を飛んで近付こうにも魔人が纏う『無敵結界』でも無い限りケシ炭にされる事請け合いだ。

ともかく彼女は戦争の場に向かおうといつのだ。

『骨の森』と『サーレン山』は両方とも地名のことで、前者は大陸の西南部に位置する膨大な広さを持つ森のことである。

魔人領と人間領を分ける境目にもなつてあり、『気を抜けば熟練の冒険者も容易に迷い、魔物の餌となることが約束される大陸最大の森林地帯なのだ。

さらに幾体かの魔人たちの住居でもある城まであるというのだから、そこを守る魔物たちの層は厚く強大であるといつことが窺える。

後者は大陸西北部に位置する、岩肌の露出した枯れた山。

頂上に『ヒララレモン』という不思議な木の実を実らせる木があり、大陸有数の高度を誇っている。

魔王の住む城、『魔王城』もまたこの辺りあるのだが、最高戦力で

ある闘神都市を集中させているという事は、一大決戦を行う心積もりなのだろうか。

「そいやあた、戦線つつーとビ」まで行つてつかわかるか?」

「いえ、私はもう離れて数カ月経つてますから、どのあたりという
……具体的なモノまでは」

「……『弓き裂きの森』にあつた我々の陣地はすべて破壊された。

せつかくあそこまで進攻していたというのに……第一あの方たち
がやる気をなくして引っ込んだのがそもそも問題だ!!

最高戦力とはいえる一人死んだくらいで……最近はプロヴァンス
様かバー・コフ様が交代に一人ずつしか出て来ない!!

勝ちはもう無いかもしぬないが一軍を率いる『黙つてろ、この
ダボ!』「ぶつ!」

突如として声を上げた麻袋目掛けて足の裏を叩きつけたリューマ。
むせかえすような声が聞こえたあと、それはびくびくと震え始めた。

「……犯罪だつてわかつてんのかね?、こいつは」

「すいませんすいません、姉さんには後でしっかり言つておきます
から!」

「テメエも黙れ」

「……」

ギンッと効果音でも付きそうな勢いで貫かれたもう一つの麻袋は、ぴたりと静まり返った。

怪訝な目でこちらに視線を寄越す人々を、厳つい目線で退けた彼は、煙管を取り出し火を付ける。

吐きだされた紫煙はゆらゆら、辺りを漂つっていく。

「……いよいよ人は終わりかもしれませんね」

「ケケケ、だつたら俺は逃げるぜイ。」

「Japanかどつかにでも隠れ住んじまわさア」

「でも……それだつたら他の人が……」

「俺は俺の大事なもんが大事……おわかり?」

至極真つ当な意見に思わずハ雲は口をつぐむ。

『人を助ける』という行為は素晴らしいことこの上ない。だがそんなもの出来るのは強い力を持っている者だけだ。

腕つ節や心など、いくつか種類はあるかもしれない。

折れない朽ちない曲がらない、そんな何かを身体が貫いている者だけが偽善なんできつと出来るのだ。

だが自分にはとてもじゃないが備わっていない気がする。

攫われた自分にある特別な力。

コレを使つたつてきっと自分は無理だろ?、そんな考えが頭をよぎる。

そしてそこで、八雲はふと違和感に気付いた。

今までならばそんなリューマの言葉に難色を示していた自分の心が、何故だがそんな風に振れていないと。むしろ嫌がっていた偽善を捨て去るという行為に、何ら違和感も不快感も感じていなかつたのだ。

「どうかした、八雲？」

「あ……うん、何でもないから、大丈夫だよ」

そう羽純に返した八雲はそんな想いに蓋をする。

ピッカリ漏れ出さないようにし、八雲は再びリューマを見つめた。

「ステラもさ、上いけるといいね」

「あい……頑張る……です」

ケケケと笑い声を上げて、リューマはステラの髪の毛を乱暴に撫でます。

うにゅうー、と声を上げるが皿を細めて、彼女はその行為を心地よさげに受け入れていた。

「じゃあそこまでの護衛は頼んだぜ、千代」

「ステラちゃんには指一本触れさせませんから」

小さな子供には優しいのか、珍しく優しい言葉をかけたリューマ。多分ステラだからこそその言葉ではあるが、どうやらせよ彼女は無垢な笑みを彼へと向けた。

「おにーちゃん……ステラ、お願いがあるです……」

もつもつし車も出よつかという時間、急にステラは口を開いた。無邪気に問いかける彼女。

「ケケケ、言つてみな

「あい……ちゅー……してほしい……です」

「す、ステラ!？」

思わず大きな声を上げたハ雲、そしてその隣でバツの悪そうな顔をする羽純。

実は昨日、ステラを交えた三人で一緒に寝たのであるが、その時羽純はナクトとのキスの話題を持ち出したのだ。

明日対戦するナクトの相手、幻一郎は前にも述べたがJapana出身の忍者である。

その中でもなかなかの実力を誇っているようだ、とりわけ速さに於いては特筆すべきものが窺える。

前の試合など、相手に触れさせることなく勝利をもぎ取つたというのだから。

『速度』という事柄は戦闘に於いて重要視されるモノの一つ。

単純な話、速度に劣つてゐる者が勝つてゐる者を捉えようとするのは至難の業だ。

自分の攻撃より前に相手がその目測から外れたところに移動される。

相手の攻撃を避けようとしても行動より速く一撃が迫る。反撃しようにも既に間合いの外にいる。

よしんば攻撃が当たつたとしても直撃を避けられる。

簡単に考へてもこの程度の利点はあるだらうか。

『ヒットアンドアウォイ』は簡素ながら酷く有効な戦法。捉えられないのだから意味がない、といつやつだ。

研磨し続ければ『如何なる攻撃をも回避し相手を討つ』といつある種、究極の闘い方を体現することも可能となつてくるだらう。つまり相手が自分より速い、という事はそれだけで脅威となるということ。

しかも今回の場合圧倒的といっていいほどの差がある。はつきり言つて正面から向かつて勝てる可能性はほゞゼロだ。

ならばどうするか？

彼、ナクトは考へた。

そして閃いた。

『魔法』を利用しようではないか、と。

多種多様な魔法が存在するがその中には『範囲魔法』と呼ばれるモノが存在する。

『炎の矢』のように対一戦闘用ではなく、『火爆破』のよつた対多数戦闘用の魔法を用いればよいではないかと。

なるほど、戦士として通つてゐるナクトが魔法を使へば幻一郎は油

断し直撃させられるかもしない。

その上闘技場を丸まま範囲指定できるような魔法を放てば、当たることは確実だろ？。

それで脚に傷でも負わせることが出来れば、速度を落とすことが出来れば勝ちも見えてくる……かもしない。

「ちゅー……な

ふえ、と首を傾げるステラ。

その小さな体をふわりと持ち上げると、リューマは頬に唇をふれさせた。

「……ちゅー……」

「ホレホレ、ステラも」

「ちゅー……ちゅー……」

「ケケケ、可愛いヤツめ」

抱きかかえられたステラは真横にあるリューマの頬へと唇をふれさせる。

一度、二度、三度。

さらにも頬を擦り寄せる彼女は唐突に唇に振れる何かを感じた。

プルプルとやわらかく心地よい。でも段々とそこから熱が生まれ、ほんのりホカホカ心があたたかくなる。

「続きはまた今度つてヤツだな。

ま、テメエなら大丈夫だろつけどせ

「……あい」

地面上に下ろされ、くしゃくしゃ撫でられる頭に小さな手を添える。なんとなく恥ずかしくなつて顔を俯けるステラを横田に、リュー
マは麻袋一つをうしバスの荷台に放り込んだ。

さて魔法を使おうと考えたナクトであるが、彼にそんな技能は無い。今から魔法を覚えるといつてもそんな時間もあるはずもない。そこで出て来たのが付与魔法だ。

前述したとおり付与魔法により付与された武器には特殊な効果が表れる。

攻撃力増加然り、体力増加然り、防御力増加然り、そして魔法の使用然り。

だが魔法の場合、他の付与とは少々異なつてくる。

付与スロットに特殊なアイテムを付与し効果を移すのが付与魔法で、その効果は対象が破壊されるまでほぼ永続的に続く。だが魔法の場合、使用できる回数が限定されているのだ。

使いきったならば付与されたスロットは破壊され、一度とそこと別のモノを付与することは出来なくなる。破壊されたスロットを修復するアイテムもあるらしいが、これでは関係のない話なのでおいておこう。

付与スロットのある武具は珍しく、ひどく高価だ。

そのうえ大抵が既に付与済みであり、空の付与スロットがあるものなどさらにその上を行く。

ならば冒険者らしく迷宮で見つけて来よう、と考えたはいいがどうも無かつたらしい。

羽純と二人、途方に暮れていたがここで一つの秘密を彼女はナクトに明かした。

それが何なのか、というのは置いておぐが、今直面している問題を解決するために、とあるアイテムが一人は必要となつた。そしてそのとあるアイテムを譲つても構わない、という人物にも会えたのだが代わりに条件を叩きつけられた。

『自分の前でキスをしてくれ』、それが一人に出された条件だった。

試合は明日。

今日のうちにナクトがそのアイテムを見つけて帰ることが出来なければ、その条件に従わねばならないだろう。

無論ナクトのことは、羽純自身嫌いではない。

昨日、『ナクトが嫌ならいいよ』なんて言つてしまつたが、そうなればアイテムは貰えない。

だが自分の大切な幼馴染が死体と化す姿なんて見たくもない。

自分は構わない。

羽純が気になるのはナクトの気持ちだ。

(ふあ……リューマさんとステラちゃんキス……しちやつた。

私は、どう……なのかな?

ナクトはマークこと……してゐるんだもんね（マーク）

マークに対する嫉妬があつて、ナクトとのキスを躊躇つ駄でもない。向こうもまた踏み込んで無理矢理、なんてしてこないから話がこじれているところもあるのだが、何より羽純は不安なのだ。

今の関係は心地よい、どうしようもなく。

何年も何年も、それこそ出会つたときから続いてきたカンケイ。打ち壊す勇気が、彼女にも彼にも無かつた。

だから右往左往し、結局踏みどどまつてしまつ。

ぬるま湯のような、そんな一人。

慣れ、というものはかくも恐ろしいという訳だ。

わからなくて、女の子だからやせはり初めては大切にしたくて。どうしてよいかわからない、そんな事を昨日一人に羽純は話していたのだ。

ま、一人から大した意見は帰つてこなかつたのだが。

「では、行きますね」

「苗鶴染みとして、死ぬなどだけは言つてこやうか？」

「リュー・マーさん……ええ、ありがと「やがこせや」

ペコリ、一礼した千代はうじバスへと足をかけた。

その隣ではステラが弱々しく視線を投げかけている。

「……ハ雲……おねーちゃん……」

「私、も……頑張るから……ステラだつたらきっと大丈夫、だよ?」

少し呆けて、どこかに行っていた意識を取り戻してハ雲はステラに目線を合わせる。

そしてほんのり濡れた頬を両手でむにゅっとまむ。むにむに彼女の頬はモチのよじに形を変える。

「……おまじない……」

兄さんが私にいつもやつてくれた、だからステラもまた一緒に……また会えるから……ね

「……あい」

そう言つうとステラも千代に続きうじバスに乗り込んだ。

赤いうしはみやーみやーと鳴き声を上げて進んでゆく。

昼間だからだらつか、身体は少し暑かった。

一一一 戰目（後書き）

物語が進まない……「んなもんなんでしょうか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5228n/>

その道、遙か遠からんや

2010年12月14日02時55分発行